岳　山

第五十年
第一號

山岳

目次

第十五年第一號　大正九年八月發行

多摩川相摸川の分水山脈　理學博士　武田久吉……一
大町より下廊下へ　沼井鐵太郎……二四
大武川より三峰川まで　柳直次郎……七一

圖版

○黒部川（御前澤の合流點附近）……對頁三二
○黒部川（御前澤と御山澤の間）……六四
○間の岳北方の高所より北望……八八

雜錄

○大門山（鷹瀬壽雄）○七倉岳と不動堀澤岳○河の左岸右岸に就て（以上二項木暮）

雜報

○樽前山爆發す○富士登山者三名行方不明○富士山の強風雨○白山登山者暴風中遭難○會員通信

會報

○第十三回大會記事○第九回小集會記事○會務報告○會員の住所移轉○新入會者○會員の訃報○無效會員章番號○會籍削除○交換及寄贈圖書○本會規則抜萃○投稿規定

英文欄

卷末附錄として英文欄を添へたり

多摩川相摸川の分水山脈（上）

武田久吉

緒言

武藏野の西南隅が山性を帶びて來て、初は丘陵にすぎないものが、西へ寄るにつれて、やがては高距五六百米の、何々山と名のつく一かどの山岳となり、次第に西に遠ざかるに從つて、一千米を超える山岳が現はれ、それが更に西に赴くや、假令一上一下はあるにしても、漸く高距を增加して、終に土地はもう甲州の領分に入るが、西の空にスカイラインを劃し、六千尺に出入する連峭は、一萬尺を超える赤石山系北部の尤物をしてさへ、其背後から帝都を窺ふことを許さない。此南北に蜿々たる大屏風を立廻す山脈こそは、人も知る大菩薩連嶺である。

大菩薩連嶺の西側からは、笛吹川に流入する重川（又面川）と日川（又三日川或は三日血川）が產れるが、東側の斜面に降る雨や谷に積る雪は、東に流下して多摩川及び相摸川の源流の一部をなすのである。されば此二川は、大菩薩連嶺から東に派出する山脈によつて分隔されて、一は其北を流れて東京灣に入り、他は南に沿うて走つて終に相摸灣に注ぐことになるのである。

山は新綠に交はるツヽジにほひ、河岸は紫のヤマフヂに彩られる五月の頃に、大菩薩連嶺を起點として、左右に多摩川と相摸川との源流を俯瞰しながら、此分水山脊を東に辿るか、左なくばその逆に、六千尺の大屏風を目標として、此長大な尾根を西に傳つて見たいとは、私の年來の希望ではあるが、不良な天候や俗用といふ山の旅には禁物な條件につき纏はれて、此無理てもなさそうな慾望は未

に充實されないで、尾根の大部分は未踏の地として殘つて居る。酬つて同好の人々の足跡を尋ねて見ても、未だ此分水脊の全部を跋渉した形跡はないやうで、全般に亘つた記錄に至つては從つて絶無と稱するより致方がない。私の知つて居る處で、此連脈を最長距離に亘つて縱走されたのは、木暮、田部の兩君で、景信山から陣場ヶ峰、和田峠等を經て、三頭山の南の一角一四六〇米の峯頭迄を、二日に跨つて通過されたのである(『山岳』第十一年第一號一五一頁及び田部氏著『日本アルプスと秩父巡禮』一五六頁以下參照)。私自身の僅な經驗は、到底語るにも足りないが、責任を明にするが爲に大體を述べると、縱走としては、此連脈西端の小部分と、淺間峠から醍醐峠までと、陣場ヶ峰から高尾山の間、及び大平山から高山の間を、或部分は一回、或部分は數回通過したにすぎないし、横斷としては鶴峠、栗坂峠、三國峠、醍醐峠、和田峠、南郷峠、明王峠、案下峠、小佛峠、大弛峠、案内峠、榎之久保、七國峠、及び案内峠と榎之久保との中間にある名稱不明の峠の全部又は一半を一回以上通過したにすぎない。尤も此連脈に關する知識は、以上列擧した分水脊以外に、其支脈を縱走又は横斷して、山脈を望見したことは一再に止らないが、今は直接に必要がないから、敢て記すことを止めにする。

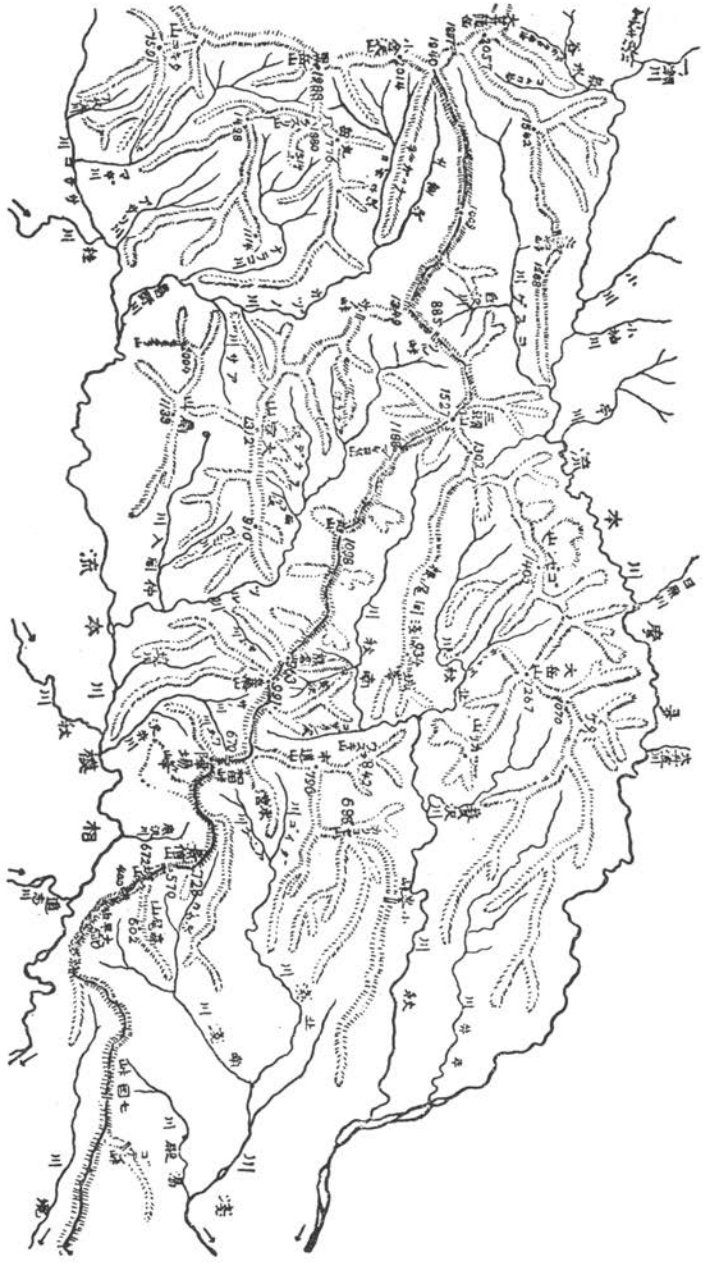
斯の如く私の足跡が一部分に限られて居ることは、勢此記事にも精粗厚薄の部分を生ずる原因で、これは現在の處どうにも致方がない。そして私が最近興味を集中したのは、武甲相三國の界に當る三國山附近と、それから東に連る武相境の脈上小佛峠に至るまでとである。又私が跋渉の際と此記事執筆の折とに常に參照して、少からぬ暗示や解決を得たものは、甲州に關する部分は松平定能編輯の『甲斐國志』中森島彌十郎の調査になる都留郡の部と、武州に關する處は德川幕府編纂の『新編武藏風土記稿』中主に多摩郡の部、及び故河田熊氏の著になる『武藏通志』山岳篇(『山岳』第十一年第一號所載)で、相州に關する箇所は、同じく德川幕府の編纂に係はる『新編相摸國風土記稿』中津久井縣の部

てある。本篇中に掲げる地名の多くは、跋渉の際に土人に質したものであるが、木暮君の努力によつて明にし得たものが、殊に多摩川上流地方に於て多くある。尚多摩川源流の一部に關しては、小菅村役場に照會して知ることを得たものが少くない。參考地圖は主に陸地測量部發行の五万分一地形圖丹波山、五日市、上野原、八王子圖幅、同二万分一上野原村、高尾山、中野村、二十万分一帝國圖甲府號東京號、及び同上輯製圖、地質調査所發行二十万分一地形圖甲府圖幅並に東京圖幅とてある。

總說

地圖を披いて多摩、相摸兩川の分水嶺を物色すると(概念圖參照のこと)、大菩薩連嶺の盟主二〇五七米と測られた大菩薩岳(即ち大黒茂谷(オホクロモダニ)のセリ)の南に當つて、一八九七米の鞍部、即ち今いふ大菩薩峠の頂から、南に續く遠望金字塔形の、一九八〇米に餘る川入山(カハイリヤマ)を越えると、山脈は急に東南に曲つて、其所に雙峰駝の背の樣な峰が隆起して居る。此の二峰は共に天狗棚山なる名稱を有するそうてあるが、南方にある高い方は一九四〇米に餘るもので、實に問題の兩川分水脊西端の重要なる一峰である。これから東に派出された長い尾根こそ、多摩川と相模川とに落ちる水を振分けるもので、乘て一部は武甲の境をなし、一部は武相の界を劃するものである。さて此の尾根の連續する工合を見ると、初め東微に北に向つて出たものが、間もなく徐々に東南に屈曲し、土室澤(ツチムロ)の左岸について緩い弧を描きながら、やがて佐野峠(サノ)に連なり、此の邊から左右に支脈を派出しながら、東南の方向から漸く東に向ひ、長大な大室山(オホムロヤマ)となるのであるが、其の最高點一三一二米の附近から南に出る短い枝は、大室山と略並行する扇山(アフギヤマ)に連なり、更に百藏山(ヒヤクラ)を起して、此處に此の山脈掉尾の勇を示して居る。

大菩薩連嶺から派出して居る支脈中、最長大である處の此の山脈は、上記の全部が多摩川と相摸川との分水脊をなして居るのでないのは、概念圖を一見すればわかることであるが、土室澤の左岸で、



○多摩川相模川の分水山脈　武田

これが小金澤（寧ろ正しくは黄金澤、時に金澤と記さるゝこと――甲斐國志の或部分――がある）と合流する地點の、東稍北に當る一三四九米と測られた御坊山（宛字）なる峯迄の部分が、眞正の分水脊で、その以東は、共に相摸川に注ぐ處の葛野川と鶴川との分水脊をなすに過ぎないのである。

然らば多摩と相摸との兩川の水を分ける脈はどれになるかといふと、御坊山の東稍北に當る三頭山から東南に曳く長大な尾根が即ちそれであつて、御坊山と三頭山とのつながりは、此の兩山から出る比較的短小な山の尾によつてなされるので、其の間の鞍部は即ち高距八八五米の鶴峠である。

最高點一五二七米と註さるゝ三頭山から、東南に引く長い山脈は、槇寄山を經て丸山に至るまでは一千米以上の高度を保つが、その東では只一二の峰頭のみが一千米突を僅に突破するのみで、山脈は漸を追うて低まり、淺間峠の稍西方に至つては、八百米を超ゆること極めて僅となつてしまうが、栗坂峠の東から漸く高度を增して、生藤山の直東では再び一千米以上に出でゝ居る。しかしそれも東の間で、其の東半里許の醍醐峠に至ると、已に八百米以下に下つてしまふ。それと同時に山脈の主力は急に折れて北に向ひ、市道山で復二岐して、更に北に赴くものは臼杵山に向ひ、東に向ふものは鳥切場からこれも急に北に折れて、刈寄山や小峰峠の方に連つてしまふ。しかし此の山脈中でも分水脊をなす部分は、醍醐峠から再び隆起して高岩山を起し、此處でまた分水脊から離れて本宮、御堂窪に連つて、終には醍醐川と案下川との間に終つてしまふのである。

以上述べた分水脊をなす第二の山脈の後を享くるものは、八五七米の高距を有する陣場ヶ峰を起點とし、時には南、時には北に彎曲しつゝ堂所山に至り、此處で二派に分れて主脈は景信山を起し、小佛峠を經て城山に至り、こゝから分水脊をなす部分は、甲州街道の大弛と呼ばるゝ所へ下つて終つてしまふが、寧ろ主脈とも云ふ可き部分は高尾山へと連つて、末は丘陵に化してしまふ。一方堂所で分派した他の一部は、主脈の北を東に走り、末は小佛川に注ぐ處の小下澤の左岸に連亘し、漸次數派に

分れて、末は丘陵となつてしまふのである。此の分水脊第三の脈と上述の第二の脈と接する所は、高距六七〇米の和田峠一に案下峠とも呼ばるゝ鞍部で、昔の甲州街道裏道である。

さて現今の甲州街道をなす國道の大弛と呼ばれる部分は、武相の國境に跨つて高距約四〇〇米を算し、武州の案内村から緩に上る道は、國境をこえると直に相州千木良に向つて急に下つて行く。大弛以東で分水脊をなす山脈は、一里餘の間相摸川本流の左岸に密接し、城壁の如く連なる低い山脈で、最高點は高距五三〇米の大平山で、これから東南に連る金比羅山（五〇六米）、高山（四七六米）、椀之窪山を經て、急に東南に曲る邊迄は武相の國境をなす山脈であるが、此邊で境川が發源し、國境は間もなく東に下つて境川に沿ふと共に、分水脊も杖を打つて、主脈は多摩川と境川との分水脊をなし、他は境川と相摸川との分水脊をなすことになる。かくて主脈は漸次に丘陵と化しながら、右曲左折して、やがて七國峠（約二〇〇米）に及び、これ以東は益々高度を減じて、田端の北の一八四米の測點を經て小山の北に到り、續いて東南に走つて、八王子街道と略平行しながら、木曾や原町田を經て、辻の東の高距一〇〇・四米と註さるゝ高尾山に到る事となるのである。

斯く分水脊の高距が減ずるについて、分水脊と多摩川本流なり又は相摸川本流なりとの間に、幾筋かの小流が起つて、その或者は他の者と合流するとしても、終には多摩、相摸兩川の何れにも流入せずして、單獨に海に注ぐ事になる。分水脊と多摩川との間に於ける帷子川や鶴見川や、相摸川寄での境川、引地川等は即ちそれである。

かく分水脊が丘陵化して來る上に、他の獨立の小流が現れる樣になると、吾々の興味も次第に淡くなつて、到底之を海岸まで辿る勇氣も必要もなくなつて來る。實際の處多摩、相摸兩川の分水脊は、八王子の西南、川和の東北に當る境川（武相境の）發源地あたりで打切る方が適當で、それよりも東では寧ろ帷子川と境川との分水脊をなすことになるのである。故に本篇に於ても、大略椀之窪山あたり迄

を取扱ひ、其餘波は七國峠以東には及ぼさない考である。

上述の如く、此處で今取扱はうとする多摩、相摸兩川の分水脊は、東南に向つて略平行する四つの山脈から成るもので、是等の各山脈の大部分が與るのである。今直接に分水脊をなす部分ヶ西端から初めて順次に列記すると、第一は大菩薩連嶺中の天狗棚山(一九四〇米)に起つて御坊山(一三四九米)に至る部分。第二は三頭山(一五二七米)から高岩山(タカイハヤマ)(八〇五米)に至る部分。第三は陣場ヶ峯(八五七米)から城山(シロヤマ)(六七二米)に至る部分。第四は大平山(オホダイラヤマ)(五三〇米)から榎之窪(エノクボ)山(約四二〇米)に至る部分であつて、第一部と第二部との連絡は御坊山から東北に出る山足と、三頭山の西肩から西南に出る山足との間の鶴峠によつて成立し、第二部と第三部との間は高岩山と陣場ヶ峯との間の和田峠によつて接續し、第三部と第四部とは大弛峠なる鞍部をなす山足が連接することになるのである。

次に此の分水脊は多摩川及相摸川の各本流を分つか、又は支流とすれば何川と何川とを分つものかをザット調べて見ると、分水脊の第一節の部分は、多摩川の一支流小菅川と相摸川の一大支流の葛野川の分水嶺をなし、第二節は多摩川の方ではそれの一大支流の秋川の上流の南秋川と、相摸川の方では大部分は鶴川と一部分は澤井川の大部分との分水嶺をなすのである。第三節は北面からは北淺川の上流の案下(アンダ)川と、南淺川の上流の小佛川をうみ、南面よりは澤井川の一部(殊に栃谷(トチヤ)川)と底澤川とが出ることになる。最後の第四節は最異彩を放つので、北面からは南淺川の本流が產まれるが、南面は直接に相摸川の本流に接し、單に四五本の小溪が流入するだけで、その內東端から出る大澤入りでさへ、到底之に支流の名を呈する價値はない程の貧弱なものである。

以上を以て本篇の總說とし、以下各部分について、その山脈の大體や、それから流れ出す溪流の主なものについて、實際の觀察と、從來文獻に現はれたものとを綜合して、時にはこれに口碑、傳說の如きものを加へ、時には眺望其の他登躋に興味ある點を加味し、一には地理研究者の參考に供し、一

には山地跋渉家の侶伴としたい考である。遺漏の多かる可きは筆者自らも豫期する處であるが、萬一に潜入した誤謬を見出された諸賢は、之を本誌上に發表して教を垂れ給はんことを冀ふ次第である。更に豫め記して置きたいことは、山峰や溪流の名稱の明でない場合や、實際と記錄にあらはるゝ名稱其の他の點が齟齬し、且つその當否の判斷しかぬる場合もあるが、それ等は後來の研究家によつて闡明されんことを希望する。

本篇は本來は分水に直接たづさはる峰のみを取扱ひ、他を顧みざるが正當かも知れないが、左樣な嚴格な方進によらないで、分水脊をなす山脈は、大部分之を追うて、意外な末端に及ぶことがあるかも知れない。

各説

一　天狗棚山より御坊山、佐野峠を經て、大室山扇山及百藏山に至る山脈

（五萬分一地形圖丹波、五日市、谷村、上野原參照）

多摩川の上流の小菅（コスゲ）川と、相摸川の上流の葛野（クヅノ）川の發源地を詳細に記すと、勢ひ大菩薩連嶺東面の大部を細說せねばならなくなる故、之は稿を更めて述べることゝし、今は唯分水脊西端附近の小部分を說くを以て滿足して置かう。天狗棚山とは已に述べた如く、現今大菩薩峠として知らるゝ鞍部（一八九七米）の南に聳える川入山（一九八〇米）の東南に當り、之に接して連續する二峰の名で、此の兩峰間の小鞍部の東北面から、小菅川源流の一なる天狗棚澤が發源するのである。二峰の內西北方に位するものは高距一九二〇餘米を算し、實際は天狗棚山の肩部に當る一大隆起とも見る可きものであらうが、遠望甚顯著なもので、東京からも之を明に認むることが出來る。而も之を特立の一山とは考へ得ない故、今假に天狗棚山の北の峰と呼ぶことにし、他の一九四〇餘米を算して、東南に位するもの

大菩薩峠北南の峯（即ち一九四〇米の峯）より東望

を南の峰と稱することにする。處で此の北の峰は多摩川の上流の小菅川と笛吹川の一支流の日川との分水嶺ではあるが、相摸川には少しも關係がないに反し、南の峰は天狗棚山の最高點であると共に、又多摩、相摸兩川の水を振分ける重要なる峰である。即ち此の峰からは前述の通り、東に向つて長大な尾根が派出されるのである。

五萬分一地形圖を見ると、此の天狗棚山南北の兩峰間を通じて、東西に交通し得る小徑が記入してある。此の徑は、西方では一旦日川の源に下つてから、砥山（一六〇四米）に上りつき、其の最高點の直南で十字路をなすものであるが、これを西に重川の谷に下る路は即ち砥山峠又は上日川峠と呼ばれるものである。天狗棚山から東に下ること數丁で、小徑は二岐し、左のものは問題の分水脊を辿ること約二里で、大マテー山（一四〇九米）の少し手前から東北に下り、高指山（一二八〇米）を經て小菅村の字田元に出づるし、右のものは

土室澤小金澤の間に介在する、狹くて細長い長峰（ナガネ）といふ尾根を辿ること三里許で、土室澤と小金澤との合流點に下るのである。此の長峰は相馬將門の餘類が忍んだ地だと言傳へられたもので、甲斐國志卷之五十四（古蹟部第十六下）に左の記事がある。

〔長峰山館蹟〕　金澤（コガネ）山ト土室山ト兩山ノ間ヲ長峰山ト云峰平坦ニシテ廣シ上屋敷、下屋敷ト云地アリ土人相傳フ古相馬將門ノ餘類深ク世ヲ忍ビテ此山中ニ隱レ住ミケル所ナリトゾ時人長峰殿ト稱ス其邊ニ麗水ノ湧出ヅル地アリカネツケ水ト云彼婦人タチ齒ヲ染メシ水ナリト云此水鐵氣アルニヤ今モ落葉ノ水ニ散浮ベルハ忽チ黝ミケルトゾ又馬場ト云地アリ平地ニシテ長百間許此長根殿後ニ瀨戸村ニ下リ移リテ山谷ノ間ニ住居セリ今ノ和田村是ナリト云弘安年中本村藤木善兵衞ト云者長根ヨリ十一面觀世音ノ銅像ヲ掘出セシコトアリ長四寸餘重九十八匁アリ色深黑ニシテ滑澤アル漆ノ如シ治工甚ダ細密ニシテ本朝ノ物ニアラズ必ズ舶來ノ物ナルベシ是蓋シ長根某ガ安置佛ナルベシ後ニ小祠ヲ建テ此像ヲ安置シ山神ト號シ金山、土室兩山ノ守護神トシ毎歲十月十七日ヲ以テ祭日トス近世モ其地ヨリ陶器ヲ掘出セシコトアリト云水瓶ナドニヤアリケン水五升許モ入ルベシ村民ノ家ニアリシガ後ニ破裂シテ其破片ヲ存スルノミ是亦長根ガ家具ナルベシ

同書に又いふ

〔相馬將門裔苗〕　瀨戸村ノ支村和田ニ居住ス此村ハ本村ヨリ西ノ山中ニ入ルコト一里餘民戶僅ニ十四軒其七戶ノ者ハ皆惣髮ナリ相傳ヘテ將門ノ子孫ナリト云フ氏ハ相馬紋ハ放馬ヲ用ヰ此七戶ノ者若シ惣髮ヲ厭ヒ月代スル者アレバ必ズ殃ヲ受クルコトアリトテ世々如此或ハ他村ヘ出テ他ノ家ヲ相續スル者アリトモ其一人ハ生涯惣髮ナリ左ナケレバ殃アリトゾ近村ノ者傳ヘ云金澤（コガネ）、土室山、兩山ノ間ヲ長根ト云古相馬某此山ニ隱レテ久シク長根ニ住居セリ土人長根殿ト稱シキ此地ハ人跡絕エタル深山ナレバ後ニ里近キ所ヲ求メテ居ヲ移ス今ノ和田村是ナリトゾ此地ニ住居セルモ猶久シキコトナル

ベシ村居ヨリ西二丁許ニ一ノ宮ト云フ小祠アリ除地七畝分米二斗一升凡一國一二ノ宮ノ外一ノ宮ト稱スルモノハ古某地ノ領主或ハ故アル人ノ隱レ住ミテ私ニ神祠ヲ建立シテ一ノ宮ト稱シタルコトアリシトゾ然レバ此一ノ宮モ其類ニテ相馬ノ先人勸請ト聞エタリ又一ノ宮ノ東半丁許ニ石ヲ築キ高六尺許上ニ五輪ノ石塔アリ文字ナシ土人云此邊不淨ナルモノヲ入ルレバ必ズ祟アリ故ニ昔ヨリ草原ノママニテ畏レ近ヅク者ナシトゾコレ蓋シ其先祖某ガ墳ナルベシ產神アリ八滿天神ト稱ス何神タルコトヲ知ラズ神像アリ面目手足腐損シテ具ハラズ元祿十七年彫刻ノ新像アリ蓋シ舊ヲ模シタルナルベシ束帶シテ弓ヲ持テル像ナリ鰐口ノ銘ニ大永十八年子八月吉日襲奉勸鰐口妙秀敬白ト此外古記錄ノ類絕エテ無シ

此の上屋敷、下屋敷、馬場などいふ地は現今知るに由もないが、カネツケ水は相變らず湧出し、其の附近で一三二六米の三角點を有する峰はカネツケ頭と呼ばれて居る。長峰全部は深い密林で、上部にはカラマツやサラサダウダンの巨木などがあり、下部には栗の大木多く、中には幹の直徑一間內外のものさへある。殊に一〇〇〇米附近の平坦に近い地で栗ノ木平と呼ばるゝあたりには栗が殊に多い。嶺上の小徑は今は通ふ者も稀であるが、昔は可なり交通が多かつたと見えて、中々よく踏めて居るので、所々笹が深いが、通過の困難や危險はない。密林であるが爲に夏は眺望はないが、春か秋は深山の味を知るには面白い地である。但之を東から上つたら少くも五時間を要する上、隨分倦きる上りであるが、下りは休憩時間を除いて三時間はたつぷり掛る。一筋路で別に迷ひそうな箇所はないが、天狗棚山から急に下ること五分許りで小菅へ通ずる路と分れて右にとること、更に四十分許して路の右手に小屋(エーベ小屋といふ名であるそうな)の舊趾を見て(此の附近を尋ねれば水があるといふ)から少し行つて、小凸起の右手を過ぎたらば、急に左に、寧ろ少し後へ戻る位に、まがつて次の尾根に移る所と、更に三十分も行て一二七〇米許の小鞍部から右に下らぬ樣に注意すれば、外には迷ひ込む恐れ

のある箇所はないと思ふ。東端に近づいてから九四〇米の三角點のある峯を過ぎると、現今の路は小金澤へ下りないで、小金土室兩川の合流點附近に急に降ることになる。其處には小金澤橋といふ木製の釣橋がかゝつて居る。之を渡ると伐木製炭何々商會などといふ札の掛つた小屋だの、人夫の小屋等が幾棟もあつて、土室澤と小金澤とから惜氣もなく木材を伐り出して居る。板小屋(人家二軒)から葛野川の左岸に立派な新道が出來て、和田で右岸に移ることになる。これは土室及小金澤の恩賜林から伐出した材や炭を運ぶが爲めに、大正八年の春山梨縣で拓いたものであるが、葛野川の恐ろしい釜を見ながら、竹ノ向(タケノムカヒ)あたりまでの景は中々よい。

主題に戻つて、再び天狗棚山から分水脊を傳ふことにする。長峯の路と分れてから、左に切れて山側を可なり急に下つて行くと、二十分許で小鞍部に出る。其東北に當る黒木立の小突起は、一七〇〇餘米の玉蝶山で、此の峯の東北面から、小菅川の源流の一なる玉蝶澤が發源するのである。路は峯の南面を經て、一寸急に下ると尾根の上に出て、初は急に、後には緩に下つて行くと、一四二九米の三角點のある小瘤起に來る。是が即ち樫の尾山(宛字)といふ峯で、此處から少し下ると、ダラ長い尾根の上を、徐々に上ることになる。地圖に一三六五米の獨立標高點の記號のある峯は、小菅村役場によると、牛ノネ山なる名があるといふが、聞きなれない者である。地形から言へば牛の背山とでもいふ名のありそうな所だ。此の頂上から北へ出た尾根の、西側からは平山澤が出で、東からは狩場澤が出て、末は合流して遂に小菅川に注いて居る。此の狩場澤の頭あたりに、狩場山神の祠があつて、前記の長峰山中より掘出した、十一面觀音の像を安置したといふのである。前に引用した甲斐國志の記文によると、此の十一面觀世音を小祠に安置し、之を山神と號し、土室及小金澤山の守護神としたとあるが、祠の位置は明記してない。本來ならば之を長峰の山中にでも安置しそうなものであるが、そうでなくて上記の分水嶺上に持來つたのは、何の故か明でない。然に現今長峯の栗ノ木平の少し上に

山の神の小祠があつて、神體は何もないが、慥か鐵製の鳥居が奉納してあつたと記憶する。祠は永年顧る者がなかつたので、腐朽して居たのを、一昨年此の邊の伐採を開始した頃、新に造營して、小さいながらも今は立派になつて居る。これに因つて考ふると、十一面觀音の像は、初めは此處へでも安置したものではあるまいか、そしてそれが後來狩場澤の上に移されて、狩場山神とあがめられたではなからうかと思はれるのである。狩場山神なるものは、弘法大師を高野山中に導いた神として知らるるもので、慥か弓を肩にした立像で、決して十一面觀世音とは何の關係もないと思ふ。然し此の長峰から掘出した十一面觀世音を、狩場山神として崇めたのは、少くも今から二百年以上も前からのことで、甲斐國志卷之七十二(神社部第十七下)に左の記事がある。

〔狩場山神社〕大菩薩峠ノ東北半腹ニアリ神體十一面觀音唐物ノ銅像長四寸重九十八匁色深黒ニシテ滑澤アリ相傳フ弘安年中藤木善兵衞ト云者長峰山ヨリ掘出ス所ナリト享保八癸卯年ノ棟札ニモ亦同之長峰ハ小金澤ト土室ト兩山ノ間ニアリテ其峯長クシテ平地アリ上屋敷、下屋敷ト云地アリ相傳フ古相馬將門ノ一族此ノ山中ニ隱レテ潛居セル舊趾ナリト今小金山、土室山兩山ノ守護神トシテ每歲十月十七日ノ祭禮ニハ村中ノ老弱鐵炮ヲ携出テ此山林ニ入リ終日遊獵シ神酒ヲ開キテ相互ニ酌之ト云宮守善兵衞

尙右狩場山神に關して、小菅村役場からの回答は左の如くである。

狩場山神ノ神體往昔長峰ニテ發掘セリト傳フル十一面觀世音ハ現今ナク祠ノミアリ祭禮ハ陰曆十一月(十月の誤ヶ)十七日ニシテ年々有志相集リテ施行セリ

牛ノネ山をすぎ、次の四五十米も高い峰をこえて、鞍部に出ると、棚倉澤の頭を通つて、山腹を東北に行く路がある。これは高指山(タカザス)を經て、小菅村の田元に通ずるもので、上に引用した甲斐國志に、大菩薩峠と呼んである峠路である。此の路は今でこそ通行する者が殆んどないが、明治十二年に現今

の大菩薩峠路が開通する迄には、小菅村と國中（クニナカ）との主要なる交通路で、之を丹波山（タバヤマ）から同じく國中へ越える大菩薩峠と分つために、小菅大菩薩峠として知られたものである。されば此の小菅大菩薩峠路と、丹波山大菩薩峠路とは、陸地測量部の輯製二十萬の地圖にも、不正確ながら載つて居る。又大菩薩に關して、甲斐國志卷之卅六（山川部第十六中）には左の記事がある。

〔大菩薩坂〕　是小菅ト丹波ヨリ山梨郡萩原へ越ユル山路ナリ升降八里、峠ニ妙見大菩薩社二ツアリ一ハ屬小菅一ハ屬萩原萩原ヨリ米穀ヲ小菅へ送ルモノ此峠マデ持來リ妙見社ノ前ニ置キテ歸ル小菅ノ方ヨリ荷ヲ運ブ者モ亦峠ニ置キ、彼ノ萩原ヨリ所送ノ荷物ヲ持歸ル此間數日ヲ經ルト雖モ絶エテ盜去ル者ナシ冬雪降リテ二月末ニ至リ漸ク往來スル比互ニ荷物ヲ送ルニ去冬ノ置ケル物紛失スルコトナク相易ヘテ持歸ルナリ峠ヨリ東へ下ルコト一里半ニシテ狩場山神ニ至ル小祠アリ神體十一面觀音ノ銅像ナリ（中略）此ヨリ分レテ一里餘辰ノ方へ連ル峯アリ長峰（ナガネ）山ト云（中略）未申ノ方數所ノ谷間ヨリ凡テ小金澤ト稱シ之ニ對シテ此邊數里ノ間同名ナリ峯ノ丑寅ヲ土室澤ト云フ金澤ト同シク材木ヲ出ス此兩澤ハ瀬戸、西原、小菅三村の入會澤ニシテ山役錢永一貫二百五十文ハ小菅ヨリ永一貫文ハ西原村ヨリ上納ス土室山ノ內巢鷹山六所アリサギチヤウ尾竪三十丁横二十丁栗ノ木尾縦二十丁横十丁シラヒノ油尾縦三十五丁横二十二丁タタビノ尾縦三十二丁横三十五丁ノボリノ尾縦四十丁横二十五丁戸澤ノ尾縦横各三十丁、小金澤ノ內六ケ所押拂澤ノ尾縦三十五丁横二十丁大カンバ尾縦五十丁横二十丁、エンマ小屋ノ尾縦四十六丁横二十丁ナラノ木ノ尾縦四十丁横二十丁石小屋ノ尾縦横各四十丁クラカイ場縦二十五丁横二十丁都合十二箇所小菅村守之御鷹見十人アリ（中略）又巢鷹山、土室山の內に大日陰、釜澤、小金澤ノ內大カンバ尾、峯山、合セテ四ケ所西原村守之

狩場山神ヨリ東へ峰續キ十丁許ニシテ又辰巳へ分ルヽ峯アリ此峯續キ大菩薩ヨリ西原村へ下ル道アリ佐野峠ニテ小菅道ニ會ヒ又分レテ東へ下リ西原ニ出ヅ佐野峠ヨリ村落ニ至ル迄三里此峯續キ山神

ヨリ佐野峠マデ未申ノ谷々ヲ凡テ土室ト云丑寅ノ谷々ハ小菅村ニ屬シ山澤入及梨子藏入ト云大菩薩峠ヨリ小菅村ヘ下ル間戌亥ノ間ノ山谷ヲ凡テ薊澤ト云

右は小菅大菩薩の記事であるが、多少丹波山大菩薩と混同した點があるらしい。峠の頂に妙見の祠二つあるといふが、これは恐らく丹波山大菩薩の妙見山と混同してあるのではないかと考へられるが、勿論其處には少くも荷置小屋はあつたことであろう。尚丹波山大菩薩や、大菩薩峠全般に亘つては、他日大菩薩連嶺全體について記す時に、詳說することとする。

分水脊から左に小菅へ下らずに行を續けると、次に來る一四〇九米の大マテー山といふ峰に上らねばならない。此の峯及びこれから東につゞく尾根の北面から出る水は、山澤川となつて、山澤と田元との間を流れて、小菅川に流入するのである。

大マテー山から二十丁許東に當つて、地圖に一三七〇米の標高の記入してある峰には、ツルネ山なる名があつて、これから北に凸出する尾根は、山澤川と井狩川並に白澤に合流する小永田川や大白澤の分水脊をなすものである。

ツルネ山から東は、少時はダラ〳〵下りてあるが、やがて小瘤起を二つ許りこして、最後の可なり長い上りを昇りきると、其處には御坊山(宛字)の一三四九米と測られた三角點に達するのであるが、此の峯は前にも述べた如く、此の連脈中最重要なるものゝ一である。即ち本脈は益々東南に連るにかかはらず、此の峯から東北に向つて鶴峠の頂上につゞく短い尾根が、多摩川と相模川との水を振分けることになるのである。

天狗棚山から御坊山に至るまでは、山脈は盡く森林を以て蔽はれるが、御坊山の頂上附近は其東南面のみは、僅の區域だけ茅戸である。山名は或はそれから起つたのではあるまいかと考へる。峯頭から東に小菅の支村長作に下る路があつて、それが佐野峠の道と十字路をなす所に、石像一基と、其の

側に古い小道標石があつて、その北面には「此方小すげ」、東面には「此方長さく」、南面には「此方甲州」と刻んである。一見妙に考へられるが、郡内即ち都留郡では、古來甲州の他の三郡（即ち山梨郡、八代郡、及巨摩郡）を甲州と呼び、同じ甲州でありながら風俗習慣等にも大分異る點が多い。即ち有名な甲州桝も、一升が他の三郡では京桝三升に當るものだが、都留郡のは二升五合に當る特殊のものを用ひた實例もある。郡内で甲州へ行くといふは、他の三郡中の何れへか行く事を意味するもので、「此方甲州」とは、甲州へ通ずる街道へ出るといふに過ぎないのである。

御坊山から先は、主脈は初め東南に向ふが、直に殆んど正南に向ふ様になり、佐野峠の所で再び東南に曲屈する。佐野峠の道は、略一二〇〇米の等高線に沿うて、鈴ヶ尾山の東面を走り、やがて一二三五米の三角點のある峯の少し手前で此の尾根をこえると、急に西方の眺望が開け、葛野川の谷を距てゝ雁ヶ腹摺山や黒岳山（一九八八米）を初めとして、北へ大菩薩岳の連嶺が一望の中にある様になる（此處からの西望の一部は、本誌第十三年第三號七一頁に出て居る）。此處から道はだら〳〵下りとなつて、東へまはり乍ら略半圓を描き、高距一〇〇〇米を僅に超える鞍部から、西南に向つてアシ澤と小寺澤との間の山坡を急に葛野川迄五〇〇米許を下ることになる。此處で右岸に移り、和田の部落から猿橋に通ずる道に合するのである。

佐野峠道の南端高距約一〇〇〇米の地點から西南に葛野川に下らずに、東北に山脊を辿ると西原村の飯尾に通ずるし、東に阿寺澤の谷を下れば、同村字阿寺澤に出るのである。かくの如く佐野峠は七保村から西原村に通ずるものであるから、一に西原峠の名を所有する、そして飯尾に出づる路には小佐野峠の名が文献に見えて居る。此峠道は小菅村にも通ずる處からして、時には小菅峠とも呼ばるゝが、元來は小菅からの道は一二三五米の測點のある峰から直にアシ澤の右岸の山坡を葛野川に下つたもので、アシ澤の左岸の山坡を通行するものを西原峠と呼んだものである。然し現今では小菅峠の道

を山脊上で西原峠に合せしめて、アシ澤の右岸の山坡を通行する道は廢道としてしまつたから、西原へ越すも、小菅へ越すも皆佐野峠の名で通つて居る、そして此の名は此の邊の山を佐野山と概稱することから起つたもので、村名に因つたものではないと考へる。

西原峠の道と小菅峠の道と分れる約一〇〇〇米の小鞍部を經て、主脈は依然東南に走るが、昔はナラ、クリ、ブナ、ツガ等に飾られた此山脈も、今は概ね炭に燒盡されて、スヽキとナラの若木の茂る哀れなものとなつて居る。山脈を辿ると、小徑は漸く上りとなつて、小枝の間から左右の眺望が益々よくなる。五万分一の地圖に一一六六米の記號のある地點は殊に眺望がよくて、佐野峠道からでは大峯（一四二一米）に妨げられて見えなかつた姥子（ウバゴ）の岩峯が、雁ヶ腹摺から東南に引く山稜のスカイラインを突破して顯れる。此處から東南に續いて聳える一二二〇米の峯は、大寺澤（オホデラ）のセリの大寺山で、これを南に下ると大寺澤から西原の尾名手（ヲナデ）澤に通ずる明瞭な乘越路がある。大寺山の南に續く一二四〇米の峰は、南面から見ると牙の如く尖つた峰で、北面から登る細徑には短距離ながら岩石を踏んで行く所などもある。此峰から東南に急に下ると、木の茂つた小尖峰が現はれる。コイハカヾミに點綴された岩壁などを踏んで上ると、アセビやヒカゲツヽジの叢生する間を通つて、更にこれに類似した尖峰を越えることになる。やがて間もなく尾名手澤から此山脈を越えて駒宮に通ずる馬道（地圖に小徑の記號あるもの）を横切ることになるが、此邊から路は良くなつて、且つ山稜通りに走らずに、其次の一二八〇米の峯も、一二六八米の三角點のある峰も横を捲んで、東へ〳〵と權現山に向つて行く。

扨此の大寺山の南の尖峰から一二六八米の測點のある峰の一つ手前迄には、前後四個の峰があるが、夫等と此内の最初の峰から西へ牽く山稜上に並ぶ三四の尖峰とは、犬牙の如く尖つて列び、之を瀬戸から仰ぐと其上を傳ふのは中々の困難らしく思はれる程である。是等牙齒様の峰列の西南面の水は皆一つの澤に聚つて、駒宮の部落で葛野川に合流する。是即ち麻生（アサフ）澤で、甲斐國志によると、下流に近

く二俣木川及び大ヨノ澤が注入するとあるが、源は麻生澤から出るとある。此麻生澤のセリは即ち麻生山で、私達には近年迄疑問の山名の一つであつた。勿論此名は七保方面の稱呼であつて、西原方面から言へば、尾名手山の稱を以て、三角點よりも少し東迄の部分を含ませることになると考へられる（甲斐國志卷之卅六）。

麻生山の東に連つて、此連脈中の最高點をなすものは大室山又の名權現山（一三一二米）である。短かい雜木で蔽はれた稍兜形の峰の頂上稍下に、大室權現が祀られてあつて、祠前の石燈は砂岩（？）の一大塊を十數階に刻んだ雅趣あるものである。大室權現について甲斐國志（卷之七十二）に記す處を紹介すると

○大勢籠（おほはめ）權現（れ）西原、湧川、野田尻ノ堺大勢籠山ノ峯ニアリ社人和見村名主神領和見村ニテ下畑貳畝歩但シ無高名主ノ家西南山上ニ登ルマデ壹里貳拾町ナリ此神犬ヲ使フコト七拾五匹此犬ヲ賴ム時ハ能ク盜難火難ヲ防守ルトテ近郷ノ農人犬借ニ名主ガ家ニ來リ札ヲ請フテ歸レバ犬必ズ來リテ家內田畠ヲ守ルト云但シ其形人ノ目ニ見ユルコトナシヤトヒ來ル日限迄キリ火ニテ飼料ヲ作リ供置ケバ則チ喰ツクスト云。

大室を大勢籠に作ることは往々ある處で、敢て珍しくはない。山上の祠には大勢權現と記した白布が奉納してあつたことがあるが、これは籠の字を脫したものと思はれる。大稻荷大明神云々と記した白布を見たこともあるが、これは山麓蘆垣の鎭守などゝ混同したものかと考へられる。現在の神體は一尺內外の軍荼利明王かと思はれる木像であるが、大分破損して居る。

大室山の最高點一三一二米の地點は、陸測五万や二万を見ると、三村の境ではないが、昔は境界であつたと見えて、先に引用した甲斐國志の記文にもしか見えて居るし、甲東村で一老人に山名を尋ねた折も、大室山を一に三境（サンサカヒ）と呼ぶと聞いた事があつた。それは兎もあれ、山の主脈は此邊から略正東に走つて、終に鶴川の右岸に達して、稍急に川に臨んで了ることになる。其間に左右に短い支脈を出

すが、其内て最顯著なものは一一七四米の四等三角點のある圓峰雨降山から東南に派出されたもので、仲間入川と其支流和見川との間に介在する桑窪山（最高點九〇六米）を起すものである。雨降山其者は餘り顯著なものではないから、山脊を傳ふても特にそれと氣づかぬ程である。山名は梅窪の對岸で鶴川に注ぐ雨降澤に由來したもので、從つて南麓の村では此稱呼は通じないらしい。

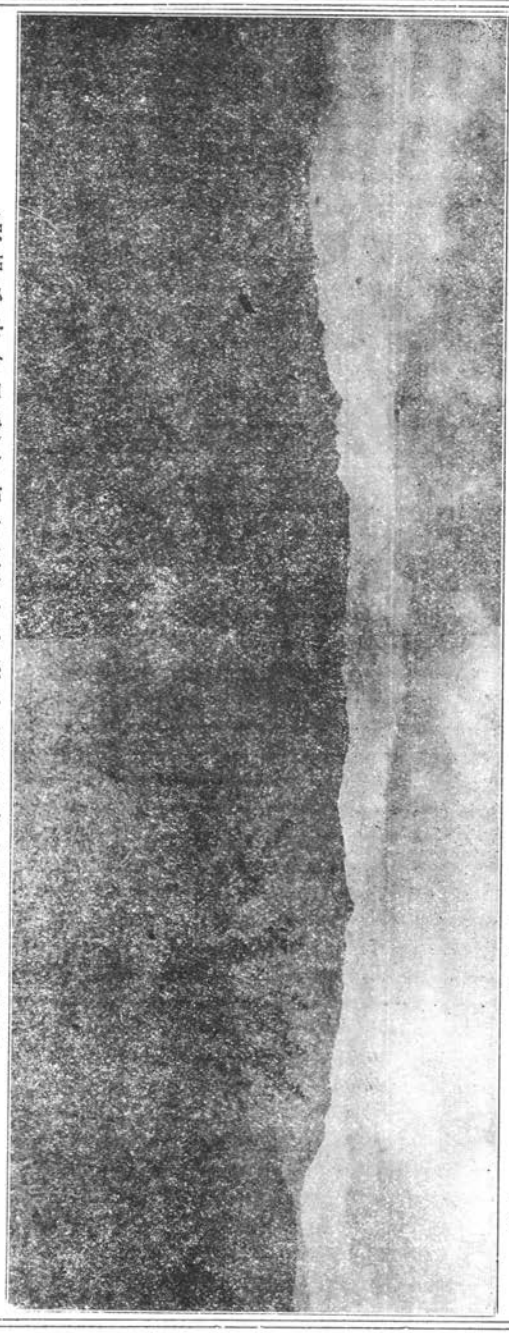
此處で雨降山及麻生山なる山名について尚一言を費したいと思ふ。私の手元にある圖で雨降山の名を記すものは左の通りである。

一、甲斐國全圖　明治九年八月製圖　森　丈助
二、郡分改正甲斐國全圖　明治十年十二月版權免許　同十一年四月廿日出版　森　丈助
三、郡分改正甲斐國全圖　明治十二年二月四日版權免許　同　年二月廿日出版　森　丈助
四、東京圖幅　明治十九年印行　地質調査所

次に麻生山の名を記す圖は左に引用する東京圖幅及び其の再版（大正　年　月出版）のもの、二つに過ぎない。

森丈助といふ人は和歌山縣の人であるが、甲府に永らく居て甲斐の地理に通じて居たと見えて、以上の外に『山梨縣下甲府之圖（但し大凡万分之一）』といふ地圖も出版して居る（明治九年八月）。上記三圖の中明治十一年四月二十日出版のものは白峰の北岳なる名稱の圖上に記された最初のものとして嘗て高頭兄に引用されたものである（『山岳』第七年第三號一三〇頁）。是等三種の甲斐國全圖は、假令近世風であつたとしても、實測に成つたものではないのだから、五万分一の地形圖の樣に、名稱を附してある山岳の位置を、正確に突止めることは困難である。然し地質調査所出版の東京圖幅は、假令ウソであつても、眞實しやかに等高線で地形を表してあるので、ついウカ〳〵と信用するが（尤も流石に實測に成つたものだとはことはつてない樣である、）此圖の價値のある點は、雨降山、麻生山共に揭出してあることて、

其代りにそれかと思ふ所に大室山とも權現山とも記してなく、唯一三四五米の高距が記入してあるに過ぎない。それで雨降山の方は少し西に寄り過ぎるかと思はれる所に其名が記してあるが、麻生山に



（影撮氏吉久田武）む望を（左）山生麻及（右）山室大りよ頂山嶽百

至つては、大室山と扇山と連絡する山稜上に座して居て、高距は一三二〇米とある。これは東京圖幅の初版の方であるが、再版のものを見ると、地形も地名も殆んど測量部の帝國圖を引寫したのかと思はれる程酷似して居て、只等高線が忽ろしく細密て、私の様な眼の惡い者には中々よく見えない丈が異る點位にしか思へない。此再版を見て殊更に氣の付くのは、初版に揭げてある地名も大部分は惜氣もなく削り去つて、總て測量部の地名に從つた（而も誤謬迄ソックリ眞似てある）に拘らず、餘程の

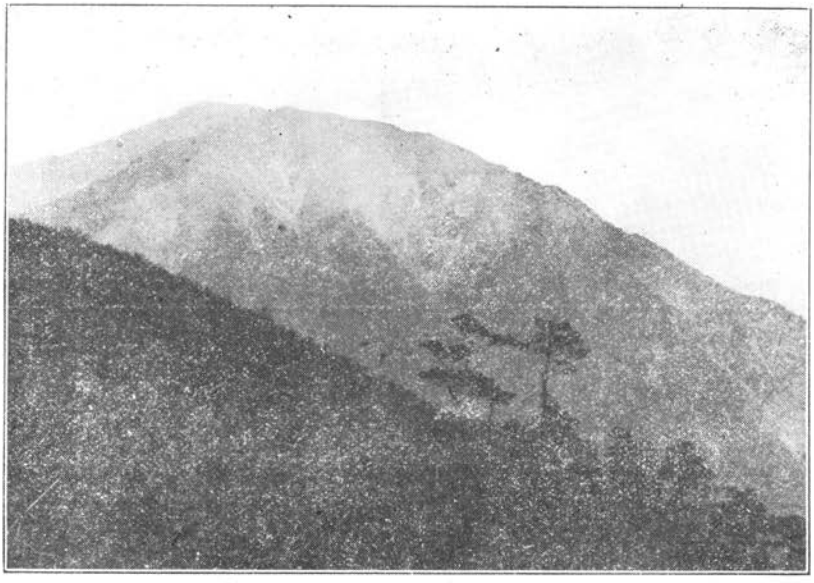
自信があつてかどうか其處迄は分らないが、測量部發行の地圖に權現山とあるのに從はずに、大室山の位置に麻生山と明記してあることである。しかし殘念ながら麻生山なる名稱は、前に述べたが如く大室山よりも遙西に連る峰の名であつて、一三一二米の峰に配す可き名では絕對にない。又此再版圖に雨降山なる名稱を削去つたことも一向に賛成出來ないことで、これでは帝國圖のある上更に存在の必要を認めることが六ケしくなる。

大室山の最高點から、東に山脊を傳うて、九一〇米の三角點の稍東の二本杉迄は、馬の通ふ立派な道が立つて居るし、草山で目を遮るものがないから眺望も甚だ良いし、晩秋から早春にかけての遊山地としては推奬に値する地であるが、此山脈の最興味ある部分は、何と言つても麻生山附近佐野峠に至るものであらう。兎に角鶴川を距てゝ武甲境の長大な山脈と略平行して走る工合は、南北秋川に挾まれて而も類似の地勢の淺間尾根に勝るも劣るものでない。

大室山から南に派出する山坡を傳ふと、下ること五〇〇米未滿で、扇山から北に出る尾根と衝突して、此處に仲間入川と淺川との分水脊を形成することになる。此の鞍部の最低部に到らない內に、一基の鳥居が建てられてあつて、大室山の登拜口なることを示して居る。しかし夫は可なりの昔に奉納されたものと見えて、現今ではカシハの叢生する間に僅に餘命を保つに過ぎない。

扇山は鳥澤の北に聳える高距一一三九米の山で、南麓から見ると扇を開いた樣な容をした、端麗な孤峰である。山の北面には闊葉林があつて、新綠の頃は惡くない景であるが、南面は草山で雜木の外には植林された杉が中腹以下を飾つて居る。山頂は北の一部を除いては眺望が廣闊であるから、東京から日歸りの遊山地としては適當な地である。大室山と同じく山頂に水はないが、南面八合目あたりに兩三株の巨杉がある根元から、清水が湧出する（此杉を水呑の杉といふ）。

扇山の頂上には何も祀つてはないが、南麓烏澤には、大木（オホキ）明神と崇められた立派な社がある。甲斐



百蔵山の中腹より扇山の西面を望む（辻本満丸氏撮影）

國志卷之七十二に載する處を次に掲げると

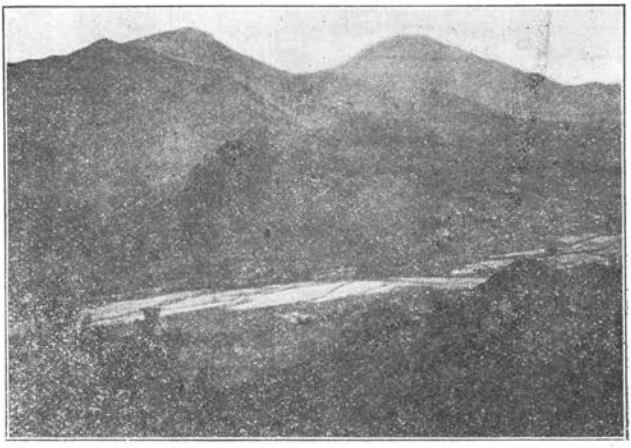
○大木明神（おほき）　鳥澤村　本村產神也社地四百貳十四坪除地神領三畝歩祭禮八月朔日天文十七年ノ棟札アリ神劔壹振銘云都留郡小西郷大木明神爲ニ御劔一天文十七年九月吉日於ニ駒橋一元近作レ之相傳フ古駒橋村ニ鍛冶元近ト云者三拾六刀ヲ鍛ヘテ一郡ノ神戸ニ納ムト云今郡中ノ諸社ヲ尋ヌルニ存スル者五刀耳神主山口因幡

現今では大木明神とは呼ばずに、八幡とかいふことにしてある。

扇山の脈も略大室山の様に東に引いて、犬目（イヌメ）の北を經て（此邊の部分を犬目山と俚稱する様である）荻野に下り、其餘波は細長い丘陵的のものとなつて、其尾は八ッ澤に迄及んで居る。舊甲州街道の内大椚から野田尻に通ずる部分は此岡陵的の上を過るもので、地勢の長大な點から、是に長峰といふ稱呼がある。

扇山から西南に曳く尾は袴着の部落に向つて低下するが、西北に曳くものは、袴着と宮谷との境の瀧ノ澤の源に東西に連る屏風の様な山脊に續き、

一旦南に折れてから高距一〇〇四米の百藏山（モモクラ）を起し、其末は葛野川の左岸に終ることになる。此の扇山と百藏山とを連絡する約八〇〇米の長い尾根は、甲斐國志によると長尾山なる稱がある樣だが、蓋し適切な名稱と思はれる。此の脈の西端で脈が急に南に轉ずる所に高距八四七米の隆起がある。これにはコタラ山の名を配す可きもので、此から西に流れる短い澤は即ちコタラ澤である。



岩殿山東腹より望める扇山及び百藏山（武田久吉氏撮影）

百藏山の頂も東西に長いもので、灌木の外に樹木はないから暑い所ではあるが、眺望は甚よい。殊に大室山から麻生に續く長大な脈を手近に望むには甚適當な地點であるし、西には大菩薩連嶺の南端黑岳山から瀧子山に至る長大な山稜がスカイラインを劃するを仰ぎ、西南には御坂山塊の東端や道志山塊の西部を望み、南に續いては同山塊の主部から、東に廻つて丹澤山塊の盟主を初め長大な燒山連山が明に認められる。

百藏山上にも水は甚だ乏しくて、只、東南面八合目邊で宮谷川の源よりも稍上部に當つて少量の水が湧出する所がある。水側には三四株の杉があるし、茶碗も備へてある。又觀世音の石像一基此處に立つて居るが、これは百藏山の祭神ではなくて、實際の祭神は下和田に鎭座する百藏山春日明神である。甲斐國志卷之七十二に記す處を揭げると、

○多摩川相撲川の分水山脈　武田

○百藏山春日明神（下和田井尻ニアリ）本村氏神ナリ地藏立像アラハハキ貳體（衣冠形座像）背後ニ文明十五癸卯ノ銘アリ十六善神壹幅天文八己亥年ノ裏書アリ神劔壹振銘曰甲斐國都留郡宮谷郷百藏大明神爲ニ御劔ニ天文十七年十一月吉日於ニ駒橋ニ元近作レ之　△花井寺ハ社ノ西隣ニアリ安貞二年ヨリ寶德年中マデ書寫スル所ノ大般若經六百卷ヲ藏ム其卷末ニ筆者ノ姓名及神主ノ名ヲ記シタレハ此經ハ明神ニ奉納シテ花井寺ハ社ノ別當職ナルベシ此寺寛和二丙戌年創造トアレバ別當職タルコト久シキコトニシテ此社ノ舊キコト可レ知應永中絶學祖能禪師住持タリショリ改メテ禪刹トナリ鹽山ノ末院トナル今ハ社僧ナク神主ノミ神領畑壹段四畝七歩祭禮七月二十六日十一月十五日神主奈良大和

百藏山は下和田から登るのが本道であらうが、猿橋からでは大神宮の側から北に道を取るのが一番近い。南面から登る道もあるし、西麓葛野からの路もある。五月中旬にはヤマツツジの花で全山赤變すと云ふも誇張ではない位である。又東面の登り口から長尾山を經て扇山に登ることも易々たるものであるし、兎に角路は縦横に立て居るから、何れの方面からでも上下出來る。

大町より下廊下へ

沼井鐵太郎

自大正八年八月二日至同十三日。

大町——鹿島川——五龍——八峰——東谷——黒部川——棒小屋澤——扇澤——大町。

案内者、佐藤靜馬。人夫、宮原勇吉、内山忠春。

一　鹿島谷より五龍岳へ

もう私達は大町から二里半も離れて居た。空は七分の亂雲を見せてゐたが、今しも輝く太陽は、リュックサックから首筋に掛けて、さつと光を撒き散らす。とぼ〳〵と歩む間に「何の爲に今歩いてゐるんだらう」と思つたりする。火山の裾野と違つて、峽間の陽はぢり〳〵と燒き付けては來ない。けれども一週間の蟄居が終に汗腺を爆發させて、只さへ夏負けの私はうんざりしてしまふ。今朝迄緊張してゐた心は、唯樹蔭眞清水と其等の考にのみ占領されて仕舞ふ。鰺て鹿島大神の宮に來て、荷物を置くと、急いで上つて社前に額づいた。納涼と開運の新禱がごつちやになつた、散々町で想像に耽つた後なので、別に黑部の話も出ない。其内日は影つて來たので氣が付いて復た北を指す。

午後二時二十分ツメタ澤を渡り、更に本谷を渡つて河原に一休みする。ツメタ澤の奥は木は欝蒼として雲が暗い。見廻す空も青色は將に隱れんとする。さアと先達の聲に立上つて、小屋の側から一二間上の林道に上つて、山の鼻を廻ると、鹿島の流は見えつ隱れつ私達の左をせゝらいでゐる。對岸の山腹は一帶に闊葉樹林で相變らず山懷の緣も美しい。道は一尺幅ばかりにか細く、蛇の樣にうねつて草の繁みを分けて行く。水面まで約二三間、其から十間二十間と段々に競り上つて、時には靜かに下る事もある。其内ポツリ〳〵と厭な雨がやつて來たので、皆着具座を被ふたが、草や木の小枝が擦れて、いくら工夫しても其不快な單音を免れる事が出來ない。三時五十分に鹿島槍側に一の澤を見る。此邊はそろ〳〵山奥らしく、尾根の上はコニファーの類も增して來る。栂の林を通つて坂を上り詰め、槍・梅・石楠等が一箇處に蔓つた處に來る。之から右へだら〳〵と下りて又一つ鼻を曲ると一寸澤らしいのにぶつかる。しつとり濡れた丸木橋をネールドブーツで危げに通り越して山懷に入つて行く。其處が一寸平な處で道の右に一軒の小屋が潰れかゝつてゐた。

此が泊場で、ツメタ澤合流點から凡一里半計りであらう。雨は止まないので楓の下に蹲んで待つてゐると、三十分後にやつと上る。先づ天幕を張る。其から火を焚いて、草の下敷に絲立を布いて、暖

い飯とミヅナの汁を食べて、天幕に潜りこみ雜談に耽る事型の如しだ。谷までは二町もあらう、聞えるものは澤の、それも愼しやかの忍音、駒鳥の聲が夕暮の空氣に泌み渡る。流行に外れた處はよい、初日からしんみりした心持を味ふことを得た。

昨夜は薄着であつたが暖かに寢られて、眼が覺めても頭が判然する。駒鳥の鳴く澤で手水を使つて歸ると、山の上に大きな二重の暈が見える。一重の暈は雨で二重のは日照だと靜馬は極めこんでゐる、鰓て其は消えて、谷を罩めた水蒸氣も上り、日光が天幕を照す頃、食事を終へてぼつ〳〵出かける。道は遠く東側に入り込んで、下りとなると再び谷へ近づく。鹿島川も奥山の裾を縫ふて流れるのだ。花崗岩の河床、溌溪たる水聲、樹木はすく〳〵と立ち繁り、地圖に讀む西側の崩れも岩壁も露はでない。半時間程に道は益〻河身に迫つて、左手、鹿島北槍の側尾根から一つの澤の、上手は雪渓、下は暗き洞穴の如くなつて落合ふのを眺めて過ぎると、一叢の藪で立ち消えになる、そこで河原に下りて一休する。鹿島槍側は如何にも急に反りかへつて、偃松の色すら打仰げない。此からが何日費すか知れない無人境の旅だ。然し二股迄は靜馬に、そして只彼一人に新しい記憶がある。

去年の夏、靜馬は慶大の豐邊君を案内して大黒から五龍に登り、南へ縱走しやうとした時、濛々と霧が懸つてしまつた、ふと東方が開けると、鹿島川が白く光つて河原も廣く見えたので、下る氣になり、尾根から危險を冒して二股に下つたといふ事である。で、彼によると右股(オーゴ澤)を上りつめる方がよからうといふ。此も盲目の杖の樣なもので、うまく當つて呉れゝばいゝといふ頗る勝手な希望に過ぎなかつた。夫にも拘はらず私がかういふ迂廻路を撰んだのは、唯だ恐らく記錄のない鹿島川の水源を極めたい爲であつた。

其から河原を傳つて右へ左へと徒渉する。水深は上手に渡ると膝までもない。川幅も幾らか開けて來て、其儘十町計り進むと、遠見山から澤の落合ふ廣い河原に出る。其處の右岸に高さ四間長さ五間

許の殘雪が横はつてゐる。海拔千三百五十米の地點である。廣河原を通過すると一つのタルがある。傍の藪を越えて上の河原に出ると、もう鹿島川も下流の穩和な姿を見せないで、傾斜が眼に見えて增して來る。水量も溪谷の小さい割に豐富で、處々徒渉し切れずに岩を乘り越えたり、へつったりする。其內谷は西へ急に曲りこんで、遠見山の側の山腹が中々馬鹿にならぬ惡場を見せ始める。靜馬は去年此邊まで二股から山腹を横にまいて來て、瀧のある澤からやつと谷に下りられたといふ。私達は食事しながら彼の話を聞いた。

再び出發したのが十一時過で、三十分も溯ると右から小い澤が落合ふ。其處に誰か泊つたと見えて焚火の跡があつた。川は尙左に曲つて水の落差は愈〻增して來る。四五町も進んで見ると、岩は更に大く流も深く岸を傳ふ事が稍危險を感ずる。一ヶ處美しい瀧があつて堰き落ちる水は深い淵に蒼渦を卷いて復た滾々と溢れ出る。暫く眺めて何と名を付けやうかと考へたが、どうも適當に表す事が出來ないので止めてしまつた。

此瀧は先づ無難に左側から上つて暫く行くと、又谷は少しく左へよれる。其處から十町程の距離に二股を分つ尾根が見える。川幅は一寸廣くなつてゐるが兩方とも深くて通れさうもない。靜馬と勇吉は荷をおろして左側の岩をへつって先を見に行く。暫くして私も默つてゐられなくなつて、岩壁を下りかけると、ふと背がつかへて跳ね反され、どつと水に落ちこんだ。見る〳〵一間計り流されたが、運よく石に足を挾れて助かる。瀨の所だから好かつたものゝ、全身濡鼠となつて大に器量を下げた。其內靜馬等も歸つて來てどうも先が惡いといふ。鹿島川のタルと淵、吾々はもう二日目に谷から威嚇されたのだ。無理にも行けば行かれるだらうが、第一の目的からして冒險が伴ふのでは叶はない。既に一時間から愚圖々々して居る。其處で右岸の藪を上る事とした。

五十米位脊尾根の樣な處を登つて右へ下り氣味に進む。掻き分ける事凡一時間半で殘雪のある淵澤

に出て休む。眞正面に高く右股の雪渓が雲を戴いて眼を射た。近く轟々と瀧の音がする。愈〻其處が二股だといふので、大虎杖の中を斜に下りて谷底に下り、對岸へ徒渉する。木々くゞり鼻へ出て見ると、左股の瀧が間隔二十間も置いて、三段に連るのが見える。高さは合せて十間許だが、中段は二條に分れて中々美事である。其上は左股の雪渓が枝を擴げて白冷の光を投げてゐる。峯は雲の内だが、折々顯れる小尾根は岩の肌も荒々しく俄かに高山景を示す。然し靜馬は景色所ではない、一服すると立ち上つて勇吉と共に上の方へ泊場を搜しに行く。若い人夫と私とはヤマハンノキに攀れながら瀧の音に茫然としてゐる。

物の二三十分もして二人は歸つて來た。雪渓まで上つて見たがいゝ所も無いし風當りも強いので引返したといふ。止むを得ず下におりて、右股の谷が落ちこまうといふ所、水面から一間程上つた岩の間を均らして天幕を張る。今日もぱら〳〵と雨が降つて來る。其が霽れて中食の餘りを食べ終ると今度は本降りになつた。折角燃えた火が弱くなつて其代り谷の水は忽ち濁り、轟然たる響を發して岩を擊つ。三階の瀧も醜惡な相貌を呈した。其南側の崖から泥水の瀧が落ち始める。まさか天幕に水はつくまいが、場所が場所とて氣味のいゝものではない。人夫達は先達ての雨續きに白馬の祖母谷で悲慘な目に逢つた話をする。早く上ればいゝ、其ばかり思つてゐると一時間位は遠慮なく過ぎ去る。何だか左の手首が痛い。思出すと其は今日墜落した時に痛めたのだ。尾根の雨は冷く恐しいが、谷の雨は今にも身體が腐つて腐植質にでもなつちまひさうで不快極まるものだ。然し其内に大雨は小雨となり消えかけた火が自ら燃え出して、到當霽れて呉れる。午後七時半である。山の中の者は正直で、月が雲を破つて出る頃には、谷の水は再び清くなつた。九時近く夕食を終る。蕗の味噌汁で腹一杯お粥を啜つた。

四日の朝は暗い内から度々眼が覺めた。雲が赤いなと窓から覗いて見て又うと〳〵する。其内に日

が出て來る鹽梅なので起きて顏を洗ふ。七時頃朝食が濟んで岩の頭に腰かけて一服してゐると、何だか空がどんよりして來て、高い峰には霧が懸つてしまふ。風は西北から吹いて來る。今日一日無事に過せば第一の目的が達せられるのだ。思へば鹿島川の源が大正八年の今となつて始めて自分の樣な者に探られるといふのは可笑しい。たとへ其が深さに於て高瀨に劣り背景に於て籠川に及ばずとも、此谷ばかりが「つまらない」といふ實證もなしに閑却されてゐたのは寧ろ不思議である。

八時半頃出發。藪を上つて直ぐ上のタルを避けて右股の河原を上る。去年靜馬が來た時は二股まで雪渓があつたさうで、左股の三階の瀧の上から右股の落口附近へ下りたといふ。時候も變つてゐるし又今年は殘雪の多い場所が去年とは異る（扇澤などがさうてある事を後に認めた）。二三町上から殘雪が現れる。雪渓はひどく割れて一寸通過困難の所もある。左から瀧のある澤が落ち合つて、其から左へ曲るあたりから稍〻長い雪渓が始まる。傾斜は二十度計りてあらう。同じ水仲間ても固體となると俄かに取りすまして風物を一變する。五龍岳は折々雲の切目に鑿の跡も荒々しく大岩塊となつて憤起する。假松の靑さも見えぬ恐しさ、復た霧が舞ひ上つて、足許の雪渓のみが徒らに生白い。雪の波形に踵を押へて步一步高く登る、左側は草の柔い島の樣な處だ。中には野營に適する平らな所もある。見るから旨さうな薊が生えてゐる。人夫は早速束に摘んで荷の間に挾む。雪渓は一寸切れて、再び始まると今度は少しく急になつた。

左手の岩蔭に休んでゐると、空は段々いけなくなつて、今迄見えてゐた五龍續きのぼろ〳〵の岩峰も全く濃霧に閉されてしまつた。稍透いて見えるのは村界から二股迄下りて行く尾根の側面で、谷は此の處廣く、三條ばかり彎曲した雪渓の分岐點になつてゐる。晴天ならば當がつくといふものだが、と靜馬は私の方を顧みたが、如何樣五萬分一の地形圖で判斷しやうにはせめて十町位も見通しが利かなくてはならぬ。後で考へると、此から左の雪渓を上れば豫定の如く五龍の南方に達せられたのだ。

が、今は徒らに考へに耽る時でもない。何でも早く國境に取り着いて一夜の避難所を得る必要がある、其處で岩蔭を出て、なせになつた草原を西北に越えて、中央と覺ゆる雪渓に取りかゝる。その縁に水が小走りしてゐたが、誰も屆付けやうとする者なく、雪と土の境を無言の内に踏み上る。ふと頭を上げるとぱつと霧が開いて、再び五龍附近の將に崩潰せんとするが如き岩峰がぬつと出る。忽ち其は厚い幕に隔てられる。霧小便が遠慮なく注いで服の毛先に細い玉となつて附着する。さと打拂ふと脆くも碎けて掌は汗の如く濡れてしまふ。その灰色の中に獨り岳雀と鶯の聲のみが、何の憂へ氣もない。

一つの巉岩の上から、雪渓は益〻急に益〻狹まる。咫尺を辨ぜぬ霧も、幅三間といふ立て籠んだ雪の往來では、左右兩面岩の根が今にも拔けて、瓦落々々と崩壞するのではあるまいかと見える。雪面の傾斜は三十五度にも及んだ。折惡しくカンジキを用意しなかつた足許は、ともすると淺い波形から滑り勝ちである。霧小便は中々止まず、氣溫も餘程低下したのであらう、足の指は感じが鈍くなりかゝつた。見返ると今年始めて山に入つたといふ若い内山は、滑る足を持て餘しながら「こんな目始めてだ、俺いやんなつたね」と苦笑する。「何あに、これ式」と元氣のいゝ勇吉が立止ると、それでも「豪えもんだの、先が見えたら猶更恐くて登れねえずら〳〵」と感心する。「さうとも〳〵」。劒の長次郎谷の様だ。」と靜馬が煙管を喰はへ出す。

かうやつて何度息を入れたか分らない。立壁の雪渓、足を入れたら其儘上るか下るか二つの内一つだ。然も尾根の那邊へ出るか、又此最後に雪が消えて綱も懸けられない崩れた絶壁に突當るかも知れないけれど、約十町も登つて右側の壁が丸く後退りして行つて、其處に最早白檜の孤影も見えなくなつた時の事だ。「もう尾根に近いのだ」と思つて、人夫達の休む暇に、試みに右側の灌木の影を目標にザラを攀ぢ登ると、あつとばかり私は躍り上つた。其處に霧に濡れて生々としたウルップサウが咲いて居る。霧小便は終に岳の冷い雨となる。絲立一枚被つてぢつとしてゐると、ひゆつ〳〵と飛んで

來る風は又も雨を吹き下して、一時ちらと本尾根を現はす。とう〳〵無事に來られたと、彼等に知らせる樂しみを豫想して待つて居ると、ざら〳〵ッと氣味の惡い音を立てながら、荷の重い三人が登つて來る。私は「おーい、尾根は眞上だぞ」ととなつた。返事は微であつたが一同も元氣らしい。

四人揃つて一先づ安心して此のザラ尾根を斜に搦んで行く。本尾根へは十分も立たない內に出られた。けれども霧は霽れさうもない。信州側から颯々と襲ふて來る。さアかうなつては泊場すら見付けるのが容易でない。既に三時半頃だ。其處で今立つ地點が何處であるか考へる餘裕も無く、越中側に野營の準備をする。丁度尾根の緣に岩角が少しばかり高まつて信州側からの風を幾分避けられる處で鳶とアルペン・シュトックで石を掘り返し、平にしてやつと天幕を張る。霧は復た雨となつて來る。と間も無く雨風は强くなつて、終に焚火する事も絕望となる。腹に容れたものは中食の殘だけだ。其れも直ぐ食べ終つて、僅かに敷いた偃松の上にごろりとなる。何かかう恐しい物を期待してゐると夕の來るのも早い。何時の間にか人の顏も見えなくなつて、天に吠え岩角に擦れる風音のみがあはれな宿りを包圍する。

二　五龍より八峰へ

兎に角一夜は寢たものと見える。氣が付いて見ると風は何時しか越中側に廻つて、間斷なく天幕に吹き付ける。晴れて呉れればいゝが、さうしたら雪を溶かして米を煮てとかゝる場合の想像は陽光と暖い食物の他に移らない。一時間二時間と時は用捨なく過ぎて、もう正午の頃である。退屈は不安以上に心を占めて、色々な食へさうな物を引きずり出す。魚煎餅・干鱈・干杏・黑砂糖・白髮昆布。人跡未到の谷へ入るといふので食糧も絕體必要品の他は大制限を加へたから、中型の私のリュックサックから

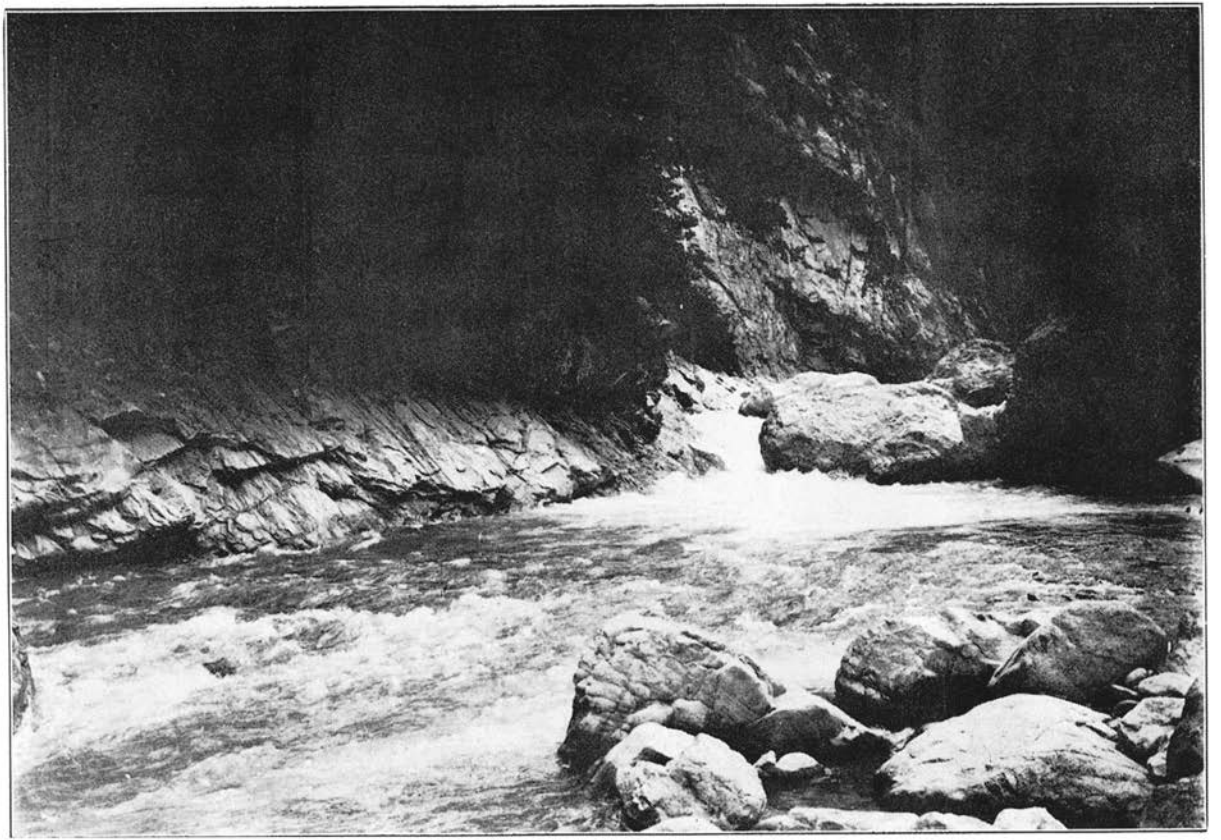
は魔術でも使はなければ殆ど出る物は無い。終に生米を噛り出したが、忽ち歯が浮いて痛いから止めてしまふ。瀬戸引の水呑に雨水を入れて、蠟燭の焔で氣永に暖める事を工夫したのも此時だ。湯氣が立つ迄はぢつと見てゐるが、天幕の垂布に當つて水漬いた足先からづきん〳〵と冷氣がこみ上げて來て、最早我慢仕切れず飲み乾してしまふ。ビスケットこそ持つて來るべきであつたが、何分私は餘り好かないので止したが、今になつて思ひ當つた。

午後から益々猛烈になつて、天幕の支柱が屢々倒れさうになる。其度に勇吉が素速く這つて出て、綱の押へに重い石を載せて來る。其が復たぐら〳〵する。天幕の屋根の兩面は風力が加はるとぴたぴたと打合つて、最早水に飽滿し切つた布からは、寢てゐる顏の上に飛沫を浴びせる。轟と鳴る。そら今度こそ、と決心する。が金二十一圓也の屋根型天幕も中々強い。あをられ、叩かれながら四人の生命を抱いて中々綱も切れやうとはせぬ。

不安の第二夜が來た。頭と足は水に濡れて、僅かに腰から胸のあたり迄後生大事と毛布にくるまつて、苦しい睡眠を取らうとする。物も言はない。宵の口とろ〳〵と寢かけると、寒氣の爲か濕氣の爲か、ぞくつと身に泌みて又々眼をつぶる。

慥か午前三時の頃、魔夢から放されて意識が明瞭になると、第一あの耳につく嫌な空氣の震音がはたと止んでゐた。窓から見ると、澄みかへつた空に星光がきらめいて居る。もう大丈夫だと、俄に手はリュックサックの底を探つてウヰスキーの栓が開かれた。飲めない靜馬達も心からの祝盃を擧げた。方二坪にも足らぬ天幕内も何處となく賑かになつて、私の心は只管曉天の美しき色が慕はれた。そして感謝の念に滿ちてゐた。

終に夜が明けた。もう誰も窮屈な天幕内に長くなる者もない。肺に一杯フレッシュな大氣を吸ひ込



黒部川（御前澤の合流點附近）　伊藤孝一氏撮影

んで、靜かに山と空に對した。南方近く聳立する鬼面の如き大岩塊は豫想通り五龍岳であつた。一昨日上つて來た折ちらと見えて消えた、あの胸に殘雪を光らした峯が夫である。もし吾々が東面を下瞰すれば分かる樣に、この潰滅に近い山稜の他の場所に取付かうとしたなら、どれ程の危難に遭遇したか知れない。私のやまはまんまと外れたが(後に八峰まで歩いて了解した如く)、其が反て好い事になつた。

八月六日。早朝五龍岳に登つて、東谷(カハラゴヤ澤)の樣子を眺めてから引返して朝食を濟し、濡れたものゝ仕末をして晝寢をする。午後一時頃出發。五龍山頂では霧の爲何も見えない。風は越中側から吹いて來る。十五分休憩して下りに向ふ。下りは中々惡い。下り切つて一峯に差しかゝると傾斜緩になつて稍安定を感ずる。之から幾つかの小峯を上下し乍ら高度は次第に減ずる。

小ギレットと稱する所(有名なる八峰のギャップ附屬のものと異る)を通り過ぎて、泊場所に着いた。此先にも泊場はあるが、此處に一泊する事にする。四時半頃であつたらう。靜馬は去年此處から鹿島川の二股に下りたのだといふことである。夜になると月が出たが忽ちまた隱れてしまつた。蝙蝠と思はる動物の飛ぶのを見た。寢たのは九時頃である。

八月七日。午前八時頃出發して偃松と石に包まれた尾根を上り、凡十五分程で第二の泊場に出た。東側は霧か深い。間もなく八峯小ギレットの手前に着いて、荷を下ろしてキレットの見物に行き、引返して下りに向つた。

三　八峰より東谷へ

もう十時を餘程過ぎたかと思はれる。愈々石の谷を下るとざら〳〵と崩れて全く氣味が惡い。右手に少々藪があるので成るべく其を傳つて行く。凡二百米も下つて其ナギは涸澤の形に狹まつた。最早

靴では足許が危いので草鞋に穿きかえる。小さな懸崖を下つて間も無く雪渓に移る。此邊が八峯迂廻路の最低所で、小さい枝澤が岩壁のかげから幾つとなく忍び寄つて來る。雪渓は左程急ではないが、周圍の狀態が安心出來ない上に、片方に傾斜してゐるので歩きづらい。加之八月に入つた事とてがばと割れてトンネルを成してゐる所もある。用心深い靜馬は幾重にも注意を與へ乍ら私達を導いた。雪渓が盡きると小流となつて岩から岩へと跳び下りる。左右は綠の尾根が何時のまにかひし〳〵と迫つて來て、豫期してゐた恐怖を目のあたり見るのかと思ふと、俄然其處に第一の瀧が現れた。「來たな」と私は誰にいふともなく云つた。

瀧は水も有るか無しかの細いものであるが、其懸崖は高さ四五間もあらう。綱を掛けるにも便りがない。瀧壺は貧弱であるが、其から水條は一段を經て直ちに直下し、終に其儘鹿島槍側の赤瓦の澤に到るあたり迄、姿を見せないのは、如何に深く如何に急轉して、山腹を走り下る事か。第二第三と益々大くなる瀑布の連續が當然聯想された。其處で私達は方針を變へて別方面を探る事に決した。

再び八峯ギャップ迂廻路の最低所に戻つて、南側に上ると人の踏んだ跡がある。白槍、唐槍の森中に一條の小徑が尾根の方へ消えてゆく。其口に野營の跡があつて、傍の木に知名の登山家の姓名が見える。一服すると靜馬は南方に傾斜を辿んで偵察に行く。其影が木立に隱れてしまふと、殘つた者は木に登つたり、彼方此方歩いたりして樣子を見る。東谷奥の河原がちらと見える。上方には例の大ギレトの頭が重りあつて高聳し、私達を威嚇する。じめ〳〵したヒユームスの臭に耐えられなくて頻りに煙草をふかしてゐると、凡三十分の後に靜馬が歸つて來た。「どうだ」と聞くと、極めて自信あるらしく餘り多くは語らないで、も少し南へ移つて成るべくキレトの澤を避けなければ危險だといふ。また一服すると、一同はやをら立ち上つて、南方鹿島槍側へ、左を山にして密林を横切つた。直きに一つの涸澤を越えて藪をがさ〳〵やつて行くと、復たも石の涸澤に出る。之を少し下つて林叢の間に

潜りこむ。其處はシラベ、タウヒ、ミヤマハンノキ等の間に、珍しくも低く移住したハヒマツがによき〳〵と立つて、丁度東北地方の山の様だ。ハヒマツは中々深いが、さう長い距離ではないので墜落を免れる。すると尾根は急に木が疎になつて左寄りに下つて行く。しゝの道らしい跡を辿つて左側に下ると直ちに草生の急傾斜となつた。ミヤマハンノキ林の間凡五間の幅を以て一二町が程、咲く花は立山ウツボグサ、ウスユキサウ、アキノキリンサウ、ナツユキサウ、ヤグルマサウ、Aconitum sp. 及び薊の一種等である。實はあはれなお花畑だが、今迄磊砢たる岩石と闇黒な針葉樹林のみ見慣れて來た眼には非常に優美なものであつた。此草地の左上には高さ五六十尺の幕(石壁)がはだかつてゐる。草地を殆ど滑り下りて立木の間に荷を置くと、又も先達の二人は偵察に出かけた。

最う峯から谷へかけて凡三分の二も下つたであらうと思はれた。けれど先に見て引き返したあの連續する瀧の相貌が、なほも色々新奇の想像を生んで、こゝの地盤の力なさ以上に心の落付が保てない。幕の上は繁りに茂つて、峯の上は元より仰がれず、只正面にどつかと坐した鹿島槍の牛首山尾根が、總じて赤く或は白く兀げたなゝのナギを垂れて、其足許に何事かありさうな氣配を示す。二人が歸つて來て下の様子を報告すると、勿論異議はなく、再び「東谷へ」といふ唯一の希望を以て出發する。

草地の下は惟しげな一つの石の谿となつて居た。下りかける所が、土も石も草の根も、皆ぼろ〳〵と崩れて仕末が惡い。一人々々離れて、よくやる様に、細心の注意を拂つて下らなければならない。兎に角之を下りておづ〳〵と石溪にかゝる。總じて岩石は堅いが、急さも急なり、がら〳〵の石塊があつたり、苔が生へて居たりして、樂ではない。行けども〳〵同じ調子なので聊か氣が緩んで來た。すると急に異様な音が發して誰か顚倒した、起きやう〳〵ともがく內早くも二三間ごろ〳〵ころがつてやつと頭を上にして岩角に獅噛み付く。其が一番元氣な勇吉だつたのではつと思つたが、幸ひ擦り傷も無い。「大丈夫か」と覗くのを「何の〳〵」と例の調子であるのは嬉しい。だが餘り疲勞してはと

少し下つて左に切れて灌木の間に荷を下ろさした。午後三時頃であらう。異郷を探る旅の心は、安らかな宿りへ、谷間の水へと急がれるが、一時の休みにも上方を仰ぎ、「これだけ來たのだ」と自ら慰めなければならない。

石の澗谷はなほも遠く、急に續いた。ふと前面を見ると、この澤の先は一段と急になつて最早本谷に落ちこむらしく、雪渓がちらりと見える。石から石へと踏み下つて、時には草地をまいて進む事もある。小さな瀧は數へも切れぬ。そろ〳〵水が湧いてゐる。最後の崖を下りて、もう本谷に近いと思ふ頃、ふと見れば私達の運命も終に恐しい斷谷に陷らうとしたのである。

私達の足下の澤は目前數十間の處でぐたりと折れ落ちる。先に見た雪渓は實は森に包まれた澤の一つ向ふにある。日がかげつて寂然とした山の空氣は、其處にざ……ざ……ざ……と鳴る水音に震へて、私の神經に氣味の悪い誘惑の響を傳へた。誘惑が次第に意識に上ると、復も此が翼なき者の立ち得る最後の場所ではないかと苦悶した。靜馬と勇吉はとうに何處へか斥候に出かけて、殘る内山も澤を下つてゐる。そこで私も身輕に岩を跳び、傍の藪に忍び入つた、密かに瀧の上に立つて見ると、驚いた事には、足下五六十間の處に黒ずんだ岩片の散亂した稍平な雪渓があつて、其れから極めて低い尾根を一つ越えると、其處に上て見た雪渓が白蛇の如くのたうつてゐる。尚ほ近くの雪渓には一つの澤が四五十尺の二段の瀧となつてどう〳〵と落ち込む。その岩の色が丁度特種の火山地方に見る谷の様に眞赤だ。今迄視界の狹い、危かしい石の溪を下りて來て、此の光景が展開した爲、身體の節々がづきん〳〵するやうな一種の痙攣を覺えた。けれども最早谷の見える處迄來た、水音の高く聞える處迄下りたといふ事は、近き瞬間的の未來を想像せしむるより寧ろ、靜に頭を振り上げて、自ら轉ぶが如く下りた跡を無量の感慨を以て慕ひ眺める動作を生んだのであつた。

荷を置いた所へ戻つて一行が勢揃ひすると、日は餘程傾いて長い休も出來ないので、聽て右手のヤ

プを抜けて暫く西南に延びた脊尾根を傳ふ事にする。藪をくゞり笹の莖を平にし、散々な思ひで栂の森に移ると、其尾根は單に左手の本谷と右手の澤の間の障壁に過ぎないので、足場の惡い事夥しい。岩塊を鋭く積み上げた上にふわりと蘚苔の毛氈を掛けた樣なもので、その毛氈たるやうつかりすると股まで落ちこむから堪らない。あっと驚いて栂の枝をつかむと、此が又白枯れに枯れてゐてぽきっと折れる。幾らテルペンの香が好きだといつて、かう矢鱈に虐待されては嫌になつてしまふ。

尾根は益〻脊骨を發揮して兩側は峭壁となる。右手の澤が見えて、其處に電光形の瀧が飛沫を散らす。更に下ると大きな岩塊が尾根を横領して、其先が三間程斷絶した處に來た。靜馬は例によつて先を見に行く。折から駒鳥が美しく囀づる。見上げると八峯續きの亂杭齒の樣な奇怪な姿が、太い落葉松の枝間に望まれた。

私達はもう尾根を見限つて谷へ直下する事になつた。谷に面した山腹に一本の枯れたカンバがある、其れを目あてに猿の樣に、手は木から木へと傳つて下りる。樺の下は豪い崖になつてゐるので、之を右にしてスゲの類ばかり生えた草地の凹みを下る。其れが又怪しくなると二人の先達は又も先を見に行く。もう河原迄彼是二十間許だ。彼等が歸ると私のアルペン・シュトックを借せと云つて、二人は草地の急傾斜に斜に段々を付けて呉れる。凡半町許の處だが草の根がずる〳〵抜けて極の惡場だが、まア無事で之も通り越す。四人の顔は緊張し切つて、さしもの難所も滑つたりしなかつた。靜馬は煙草入れを落したとかでむづかしい顔をして居る。それでも若い者の足に一々眼をとめては、「氣付けて呉れよう」と注意を懈らない。

私達は其草地から石の壘壁を越えて、終に東谷最奥の磧に駈け下りた。谷から谷へ、あの鹿島川最後の夜から數へて今日は四日目になる。唯だ谷といふ者に親しみたい爲に、地表の搖ぐ不安な暗黑な八峯山腹をわざと撰んで、絶間なく苦しい體驗の幾時間を經て、此處に來た。四人の眼は夕べの光に輝

いて、熊の様な顔にも安堵の微笑が漂つた。

時刻は大約五時半と覺える。もう夜營の準備に取りかゝらねばならない。其處で數町下の平さうな所を目懸けて谷を下る。下りた邊は丁度上で見た兩雪溪の落ち合ふ附近で、雪は消えて間も無いが、露はの積の大岩は皆不安定に足をぐらつかせる。此の傾斜は十度程と思へる。野營地は處々探した擧句積の中のミヤマハンノキの林の中と決めて、一服する暇もなく、石を起し木を伐り米を研ぎにかゝる。嬉しい宿りの用意だが、此谷間の夕べは殊更幸福を感じた。

氣が落付くと私は一人仕事場から離れて、一つの岩に腰かけ、谿の景觀と峯の仰望を心ゆく迄眺めた。谿は凡一町程の幅で、岩の大なるは徑一間にも及ぶものがある。皆未だ荒砥にもかけられない鋭いまゝの物が、一様に蓋ふて、南側に行寄る水は懐しい音を立てゝ落ちて行く。野營地の上流二三町の處から雪溪がS字形にうねり登る。其處に高さ二百尺ばかり何々ホルンとも名付くべき岩峰が全く山腹とは離れて屹立してゐる形が痛快だ。澤から峰へ眼を上ぐれば、夕映の鹿島槍が雄々しく立つてゐる。そゝり立つ八峯五龍一帶の或は眼を剝き、或は肩を怒らし、幾條にも割れ殘つた峯角の亂舞、其下に綠の衣剝げて露はなる大岩壁、又かのギャップの南と思はれる一つの澤に二條に連る高い瀑布、その瀧は二百尺もあるかと思はれる。遠目に確かな事は分らないが、思ひがけなく珍しいものを見た譯である。そして若し私達がキレトの澤下りを固執したならば、之に類した豪壯な瀑布に當つてどんな恐しい目に逢つた事かと今更慄然とした。泊場に歸ると靜馬は高く聳えた一の岩壁を指して、「あの上に俺が登つて谷の様子を見たのです」と赤黒い顔に得意の色を浮べる。一行を案内する時は難かしい顔をしてゐるが、野營地に着くときまつてにこ〳〵してゐるのが彼だ。

夕飯が出來た。谷の薪と干瓢を汁の實にしておいしく頂戴する。日はこの時暮れて、信州には月が出たのか、鹿島槍の上の浮雲は金色に色付いた。星もちら〳〵見えて來た。最早安眠の他に慾は無い。

天幕の中には木の若い枝を積んで、其上に薊や其他の草を敷いたので大變上等なベットになつた。けれども軈て草の葉からのそ〳〵尺取蟲が這ひ上り、又入口から小さな羽蟲が飛び込んで來て煩いので、無暗に蚊取香水を振りまくと、餘りの匂高さにこつちまで興奮して暫くは寢られないで困つた。

四　東谷（カハラゴヤ澤）

午前三時頃惡夢に目が覺めて再び横になつた。二度目に氣が付いた時は夜は白々と明けて、谷一杯に岳雀と駒鳥が轉り交はしてゐる。三十分位はうと〳〵して、起床。朝霧は深くないので、天幕も草も十分乾いてゐる。煙草をふかし乍ら振り仰ぐと、鹿島槍續きの尾根に日が照り初めて紅く、北の方五龍と相對して夕べにも勝る景色である。やがて日の光が射しこんで來る。空には一點の曇もない快晴で、當分天氣は定まつたものと見えた。

疲勞してぐつすり寢込んでゐた人夫達も起きて、飯を煮る。米は先日の暴風雨の際水漬（びた）しになつた爲三割方赤くなつてゐる。其儘では惡臭を發するが、好く洗つて炊くと幸ひ臭みが脱けたので、名物櫻飯だと笑つて口に入れた。食糧も草鞋もまだ十分あるので頗る氣が強い。

午前八時（？）出發。今日は八月の八日である。右岸を傳つて行く。北に廻つた谷を數町進むと、右手の山足からキレトの瀑が水量も可成豐かにとっとと流れ落ちる。河原は鹿島川の二三倍もあつて、亂石は泊場程ひどくも無く、割合に歩き易い。石は皆花崗岩の類で、此が山上から白く光つて誘惑したのだ。段々下つて行くと、落合ふ水は何れも口が瀧になつて居て登り難い。又谷は山足を廻つて西寄りに流れると、下に向つて谷の空は猫又、釜谷、仙人の山々や、大窓の頭に遮られる。遠い山は後の殘虐な姿に對しては其崎嶇たる脈も如何にも優婉に眺められる。又一つの少しく大きい澤が右から落ちて來る。此は五龍の南方から流下するものである。その澤を過ぎると今迄見えてゐた劔以北の山

山は見えなくなつて、眼は只河原の飛石のみに注がれる。川楊の傍に砂地があつて、其處にシナノナデシコが美しく咲いてゐた。この時空を仰ぐと少しく雲が出て、澤の奥には取りすました五龍と其南の嶺の何の化粧もせぬ素肌が見えた。

其から三四町行くと圖らずも山裾に添うて人の泊つた跡がある。是はと驚いたが、岩に落ちてゐた物は、正宗の四合罎と燃え殘りの木のみで、野陣場は凡一坪、一方を石で圍つて寢られる様にしてある。その焚木の炭の所に蘚が生てゐる程て、少くとも三年は立つらしいといふ靜馬達の鑑定である。が登山者て無い事は確かて、つまらない事だが大に安心した。同時に東谷即大町人の所謂カハラゴヤ澤北城人の所謂南ゴリユ澤は全然人の來ない處てはないといふ實證を得て、行先の暗雲が散じた様な安心と自信を抱いた。

泊場の跡から少し下ると又右から澤が入つて來る。澤の下部は岩石の押出しで、谷の磧も一町許ほど廣くなつてゐる。平らさも平らだ。日は餘程高く峯の上に登つて五體は稍熱して來る。なほ進むと右手に高さ數十米の白糸瀑又は白簾瀑とでも言ひたげな飛瀑が懸つてゐる。其を見て行けば今度は同じ側に立壁が現れる。左側にも小さなのがあつて、タルにでもなつてやしないかと思つたが、近づいて見ると至極無事だ。但し深い徒渉は嬉つて右側の大虎杖の中を分けた。此の崖は地形圖丈見ると一寸考へさせられるが、實際何の事は無い。野營地出發から彼是一時間程てある。

空は白雲が湧き立つたが、大部分は海の底の様に眞青だ。磧の砂地にシ、の足跡なども見られる。周圍は再び開闊となつて、瞳は深綠の山肘の上に重つた小窓の頭に吸ひ付けられる。右に注ぐ廊下式の一澤を過ぎ行けば、雪渓谷の位置は具合よくも劒の聖壇を遙拜する様になる。然し東谷は地圖で跡づけた程一本調子に黒部の巨壑に向つて邁進するのではない。磧の廣さ、小尾根の遠近、谿の方向、そんなものゝ瑣細な違ひから、不圖、豫想せざる雪の面を仰ぎ、峨々たる岩面を掠め見るのである。

又一つの澤が北側に現れると、谷は左へ廻りこむ。河原は以前にも增して廣やかになつて、暫らく四五町の間は蜿蜒と流れる。其先が聊か狹まつてゐるが、もう牛首山から來る大きい支流の落合であらうと思はれる。此邊が八峯の泊場から憧憬の眼を以て眺めた處である。山際に蔓延した森は闊葉針葉相半し、山毛欅、白樺、板谷楓等の梢には、山蟬の鳴き聲が姦しき迄に耳朶を擊つた。恐らく千古の秘密を藏したと豫想される黑部國有林は、未だ此處では陽の光明るく洩れて、人間の血の通ふ暖さがあつた。

最早十時を過ぎたであらう。背は流汗にしとゞ濡れて、長い休憩が戀しくなつた。廣河原は突然〳〵つと窮迫して來て、川の幅五六間となる。双方の賽の如き石の壁が右岸に打ち連る。左岸に移つて見ると、流は今迄になく激して、突出した岩の鼻を、一間計りのタルとなつて喚聲を擧げる。最初の瀑布と奔湍だ。對岸を何の氣なしに見ると、腹のデブ〳〵した割に足の細く尖つた一個の獸が立つてゐる。羚羊だ。此方も驚いたが、先方もキヨトンとした顏で人間を見つめてゐる。靜馬がヅドンと鐵砲の眞似をして嚇すと、羚羊は暫く考へた末、草のちよぼ〳〵生へた急斜面に駈け上つてしまつた。隨分年をとつた奴で十二三貫がものはあるだらうと云ふ。

タルは左岸のヤブから無事に通過して、一二町もすると左から大きな澤が落ち合つて來た。即ち牛首山と鹿島南槍の間から流れる谷で、地形圖に 1197 と水準を示したドウである。其處に五六人は入れる岩小屋が自然に出來てゐる。槍澤の赤澤小屋よりは圖ひのある丈好いと思ふが、濕氣があつて雨の日は悪いに違ひない。然し外では著くてぢつとして居られないから、中に入つて行厨に箸を付ける。今日はひどい目にも逢はなかつたが矢張町の飯よりは旨い。終つて草鞋を穿きかへる。大町を出てから此が三足目で、其中二日間は靴、一日半は嵐で滯在といふ譯だが、とまれ、黑部へ入つても不足の憂はない。

再び外に出て、屋根をなした岩上に上つた。大岩澤（澤に大岩横はり、岩小屋等もあるので、假に斯う命名して置く）は本流よりもずつと傾斜がついて綠の山腹に伸び上つて行く。其奥に二五二七米の地形圖の所謂牛首山が偃松の色鮮かに靜座してゐる。鹿島南槍は惜い哉その東谷に下した長大の尾根に遮られて見えない。此邊の谷の樹木は檜や水楢のさまで大木ならぬ闊葉樹が主なるもので、澤筋は例の川楊が一列に又は散在して立ち列んでゐる。草の繁みはクガイサウ、シナノナデシコの優しい花に綴られる。醂つて本流に對すれば直ぐ下で一段落ち込み、上空には劍直北の尖峰と三窓、小窓の頭及仙人山の一部が見えた。今迄徒渉は僅かに三四回のみであつたが、愈々黒部に近づいて來たといふことは總ての風物によつて暗示された。恐らく今日中に本流に接する事は出來ないであらうが、間もなく那落の底を狂奔する水を見得る事を想像するのが又樂しかつた。

ドウに着いたのが十一時頃で、中食の爲に凡四五十分も經過した。結束して立つと、一町計り下に至つて右岸に高さ二三間、長さ二十間程の岩壁が、之から下廊下の領分だぞと言はぬばかりに立ちはだかる。左岸を傳ふ事暫時、兩岸とも直立してゐる。今度は比較的歩み易い右岸に渡つて見ると、又惡い處が出るので左岸へ徒渉する。斯くして徒渉數回の後終に高さ十五間以上の小廊下となつた。其處で先達二人は、八峰から下る時試みた樣に、空身になつて偵察に出懸ける。此處は五萬の圖で見ると、凡東谷山の南西から一九〇〇、一七〇〇、一二〇〇と數字を記した側尾根の麓にあると思はれる。二人が歸つて其の短い距離なる事を報告すると、一行は右岸を搦んで大岩の上に出る。谷は此から右へ一寸曲つて再び左に廻つて行く。岩の下は二三間の垂直面になつてゐて、僅かに足懸り手懸りがあるばかりだ。始めて綱を取り出す。勇吉が金剛力に支へると靜馬、私、內山の順に下りる。最後の勇吉は下から足に手をあてがつてもらつて、無事に下りる。一同が揃ふと二三間幅の流を渡り切つて對岸に添うて下つた。一町ばかり斯うした廊下が續いた。それからも岩壁あり、タルあり、瀨あり、水

量も增して思ふ樣に徒渉も成り兼ねるので、右側の薄の中に分け入り、約十分の後、山葡萄の夥しい斜面を横切る。中には白樺の幹と言はず小枝と言はず、べつたりと搦み付いた美事なのがある。一粒つまんで舌に戴せると未だ酸味が强くて食べられない。けれどもその青い房々した實は見た丈でも立派な物である。

再び河原に下り立つた時は日は中天に炎々と輝いて、入道雲から反射する眩しい光は五體を臭い汗の氣て悉く取りまいた。もう二時頃である。綱を使ふ頃から此調子では谷は益々急に益々險惡になるであらうといふので、行々泊場を求めつゝ下つたが、私一人はそれは餘りに愼重に過ぎると思ふた。何しろ暑くて叶はない。冷い水を心地よく一二回徒渉して左岸を歩むと、五六町が程は無事なので、其先まで行つて樹蔭に一休みする。靜馬と勇吉は又もや活動を開始する、背後には鹿島の南槍が雄々しく聳えて、北槍と結ぶかの釣尾根も一部分手に取る樣に見えた。

やがて歸つて來た靜馬は、此下にもう一段平らな處があるといふので、私達は尙も前進を續行する。果して磧は可成り廣やかに水平に續いて、終始危惧の念に驅られた昨日とは異ひ、身も心も眠る樣に過ぎてしまふ。けれども其は間も無く山腰にしめられて、愈〻谷は深く急に落ちこむ氣配がして來た。流は磧と云ふよりも稍平かに石の重疊した段の左を小深く刳つて滔々と走る。左手の山の闊葉林の端に黑木がもや〳〵生へて、その尾根に寄りかゝるものゝ如く仙人山の大峭壁が目前に迫つて來る。地圖にY字形に水條の描れた仙人山の澤の窪があり〳〵と眼底に映る。懷しい黑部川は其下に碧玉の深潭を湛え、白龍の舞ふ如く水沫を飛ばして瀧と落ちるのであらう。もう直ぐ其處だ〳〵然し、後門の狼（八峯）は追駈けては來ないが、正に虎穴に入らんとする。無心の山蟬がブナの森に鳴く音も、やたけに逸る心の緒を搖り動かして止まない。「下廊下へ!!」其夢が現實に開きかゝる時、「此處らて泊りませう」と先達の深切な聲が聞えた。

静馬のいふには、此から下る程惡場になるのは火を睹るより明かである、寧ろゆつくりと此處へ泊つて明日一杯にも黒部の岸に出た方が得策である。其れもさうだ。食糧は十分にあるし、昨日難所を通過して今晩もう一夜静養する必要もある。五町や十町進んだ處で大した差はないと考へる。が、未だ物足りないので幕營の準備は後の者に任せて一人谷を下つて見ようと思ふ。泊場と決めたのは大虎杖の草藪の中で、其から林を抜け、小流を飛び越え、大岩の押出しを羊羹の如くとび〳〵に越えると、對岸一二町の下に白い大きいものが見える。凝視すると其は天幕だ。こんな處で自分達の持物以外に人臭い物を見ようとは豫期しなかつたが、若しや木暮さんの一行ではあるまいかと大聲に呼び乍ら、右岸に添うて駈けつける。澤には粗末ながら巧みに橋が架けてある。之を渡つて對岸の一段高い處にあるのが、道路普請等でよく使ふ普通の大天幕だ。側に竈を作り、焚物も置いてあるが、天幕の中にも附近にも猫一匹居ない。天幕は十人以上らくに寝られる廣さであるが、荷物などもろくに置いてない。勿論私達仲間の「他愛なく山を駈けづり谷の水にひたる爲の巡禮者」でない事は明かである。小林區の役人かしら、又は先日鐘釣に某會社の水力調査隊が入つて其内の一人は上流を探險するといつた様な記事を新聞で見たが、其等の人であらうか、不審は一方私の獨專といふ子供じみた野心を傷けると共に、誰かに逢つて谷の様子を聞きたいといふ希望をも生んだ。然し大町を出て一週日後になつても未だに淋しいと思ふ程大自然の威にひれ伏しては居なかつた。兎に角通知丈はして置かうと、ノートの紙を一枚破いて五六行の文字を認めた。此手紙を天幕の中に投げ込んで直ちに私達の陣屋に引返した。

踵つて見ると既に天幕はピンと張られて、忠實な彼等は丁々と木を伐つてゐる。私は息もつがず「からく〳〵だ」と話すと、皆も不思議がつて其の内静馬は出かけてゆく。凡一時間もして一寸小雨が降つたが直ぐ霽れて、其處へ静馬はのつそり現れる。「隨分長いから心配したぞ」と言ふと、「へえ、實は

橋のある所から北側の尾根へ上る切開があつて、それへついて行くとえらい所まで登つた。まだ〳〵高く上つて行く樣子だけどいゝ加減に歸つて來ました。さうとも〳〵黑部の谷も見えねえ位高い所だ。何でも此切開は猿飛の邊へ出ると思ふだが、のう」「ふーむ、してみると何の爲に來ただか」「山林の役人づら、國有林がどの位あるだが測量に來た」「さうづら」と三人は眞面目になつて彼等一流の辯で話しこむ。靜馬の手には毒々しい蝮が木の枝の楔に挾まれてゐる。之も其道てとつて來たのだといふ。其を殘酷にも皮を剝いて膽をとる。卵があるから雌だと當り前の事をいふ。內臟をすつかり搓りとつて白むけになつた奴が、火に炙されると恐しい事、能ふ限りのたうつて逃れやうとする。蛇といふ長蟲、元來人間の憎まれ者だが、皮を剝かれ腹わたをとられて迄も生に執着する根强さには並居る者皆感心した。

到着が三時半頃だつたから、夕飯を食べた後も夕日が赤々と射してゐた。夕暮に天幕に入る時頭を上げると、鹿島槍の上に變な雲が現れた。すると一閃の紫電が眼をくらまして、遠雷の響が太鼓の如く聞えて來る。昨日よりもなほ低い所で暖いのは結構だが、其代り尺取蟲や羽蟲が猛烈に襲來するので、例によつて三越の蚊除け香水を振りまく。思はず知らず小田原提灯にひつかゝると、忽ち火を呼んでぱつと燃え上がつた。驚いてたゝき消す。紙はもうめら〳〵に燃えてしまつたが針金は何かの用になるだらうと取つて置く。時計を修繕しやうと努力したがやつぱり駄目だ。それも止めて毛布を引被ると、訪れるものは遠雷のどよめきと遙かの水音のみである。然し今夜も星がきらめく。さア寢る事だと思つたのが九時近くてあらう。

八月九日。昨日は誤つて早起したせいか、今朝は人夫達の起きたのも知らなかつた。愈〻今日は黑部入りとなる譯だが、尾根の旅と違つて何處か呑氣でやはらかい氣持がある。食事の際には日が既に山の端に上つた。櫻飯は今朝て蕊きて、米は殘り一斗もある。昨夜から火にあぶつてあつた蝮の肉を

分けて食つて、出發したのが八時半頃。日の出前の西南の雲は綿をちぎつて投げた様で、夕立の模様があるとの事であつたが、兎も角連日澄み渡つて英氣颯爽たるものがある。

三四町にして大天幕の傍に出る。今朝も人は居ないので、右手切開が十間餘り高所にあるのを眺めて、只管河身に隨つて下る。主に左岸を拾つて行くと、その下が直ちに小廊下となつて、一氣に進む事が出來ない。徒渉は膝上迄もあつて、水勢も可成り强く、注意に注意を重ねて行く。川幅は一間位の處もあれば、三間位になつた處もある。兩岸は花崗岩類の堅牢な急壁をなして、部分的ではあるが、次第に黒部式を發揮して來る。闊葉樹は髪の如く崖を掩ひ、淺い日射しが下草に燃え映る。所々岩登りをやらなければならないが、岩がしつかりしてゐるので平氣だ。其狹い谷が愈〻狹まつて何事かありさうに思はれると、先達の二人は例によつて先を見に行つた。二十分の後二人は戻る。一行は今度は主に右岸に添うて再び左岸に移る。此邊になると流も相當に深く、タルと釜とが連續するし、もう本氣で水底の一石毎に踏みしめなければならない。やがて川は一旦左に屈曲してS字狀に右にうねり、一つの大きなタルとなる。兩岸の絶壁は俄然百尺の高さに連り始まつて、正面の仙人山の大斜面も見る事は出來ない。無言で荷を下ろした靜馬は、岩を飛び下り、流を押し切つて先を見に行く。勇吉も續く。内山も我慢しきれず後を追ふ。私は岩上に座して、鬱蒼たる針葉樹の下に蛇身の如くうねり行く河を眺めやつた。其は三四十間進んで物凄いタルとなつて、其先は右に打ち返すのでもう分らない。丁度此處は左の山腹から今の今割れたばかりとも思はれる、ひどい澤が二條直下して合する處である。その左の澤は、正に八峯ギャップの様に凄慘たる掘れ溝になつて、岩の層理の一つ〳〵が如何に大きな運動量を示す事かと考へられた。然しその源頭の尾根は見上げる程高く、黒々と喬木が幕の上を飾つてゐる。本流の右手からも同じ様な澤が此は石の流を押し流して居る。

更に木を便りに高く登つて見ると、兩岸の角度は七十度に垂んとして、水は脚下に谷の空氣を卷き

込んで豪壯の共鳴を發する。屈曲する處必ず急湍、澱む處必ず深淵、其は私を脅威する谿谷の始めの貌であつた。もうぢつとしてられないので、三人が歸つて來ると靜馬を促して、身輕に右岸を傳ふ。徒渉も股迄あつてうつかりすると倒れさうになる。タルの手前から岩角に牛蝨（だに）の如く獅噛みついて、そろ〳〵と瀧を覗きにかゝる。二股に分れて二間ばかり崩れ落ちた水の塊は直ちに右手に反撥して轟然と落下する。もう其先は見えない。只轟轟の響が斷續して聞ゆる處、恐らく此からは晝なほ暗き森の中を深く〳〵何段となく連續急轉する東谷落口の瀧となるのであらう。靜馬も私も「豪い事だ」としばらくは呆然としてゐた。背後には殘つた二人が岩上に焚火してゐる。眞直に立ち昇つた火焔は恰かも山神の靈火の樣に思はれる。

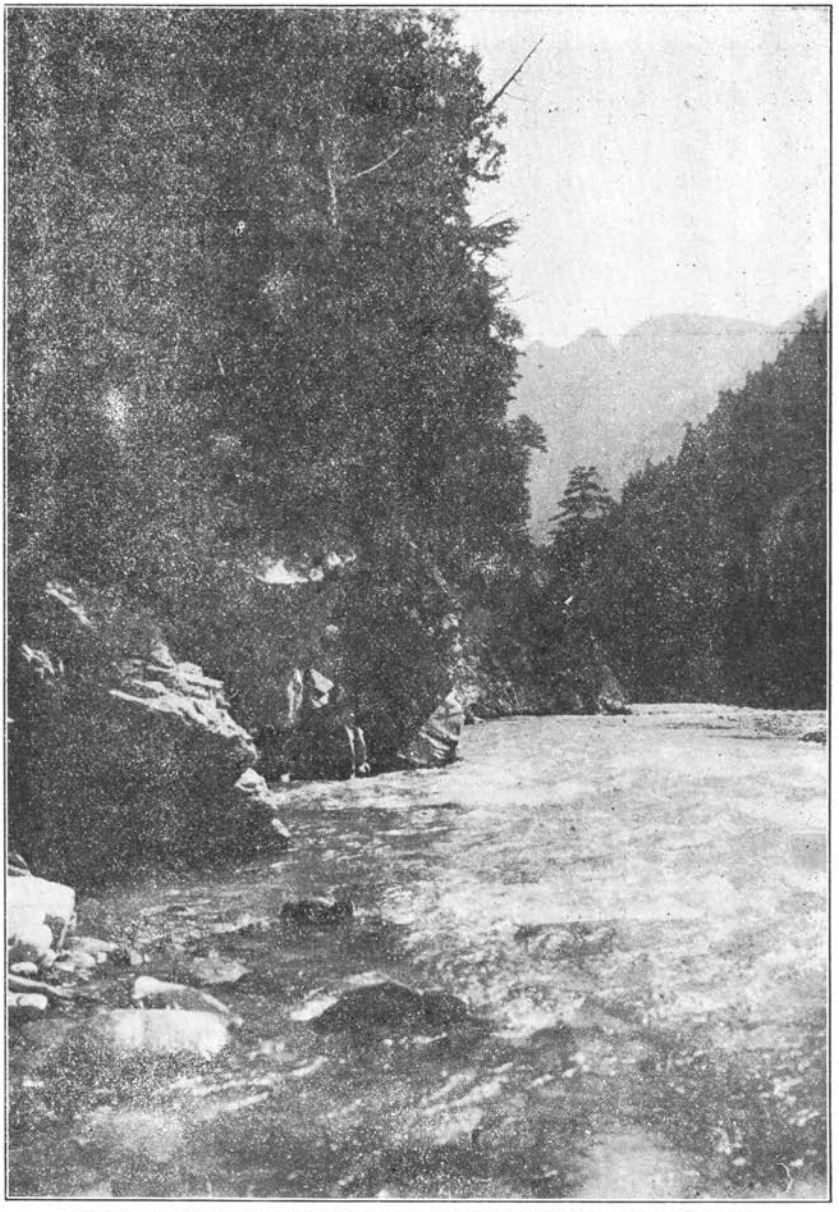
もう谷にはついて行けない。岩は堅いが、丁度黒部の谷がさうである樣に、水に磨かれた花崗岩は悉く丸味を持つて、綱を掛ける一突起すらないのである。何れの側にせよ、東谷の落口迄は、高く峯を登つて半日行程以上てある。地形圖て見ると、東谷落合に瀑布の記號があつて夫れから二三分東の處に澤の窪が讀まれるてあらう。丁度我々の當惑したのは此邊てあると思ふ。野營地は更に三四分右に一七七一・六米の三角點から上部のたるんだ尾根の直下する邊あたりてある。私は絶體に陸測五万分一圖の地勢表現を信じたいが、然しどうも此邊になると、私の感覺の誇張と聯想にもよるだらうが、隨分と分らない。（五萬分之一のスケールて然も等高線許りて絶壁に近い地勢を表はす事は不可能てあると思ふが）。そして黒部川の水面の標高と位置が詳細な點は實際に不明なのだから、此から本流迄距離如何といふ事も云ひたくないが、大體落口迄は三四町位のものではなからうかと思ふ。兎に角進むべき道は一つより無い。即ち左手の廊下について一旦尾根に登り、岩頭を辿んで行くばかりだ。もう大分時間を空費してしまつて空腹を感じたので中食を濟ます。愈〻東谷に分れる殘惜しさに、思切り澤山水を飲んだ。谷そのものの樣に皆の顏も靜かに引き締つて行つた。

五　下廊下（東谷下部より劒澤落合まで）

斯様な標題を掲げた處で、實は水面から遙か高い山腹をへつって歩いて、終に劒澤落合附近迄水に觸れ得なかつたのである。然し地形圖を見ても分る通り、雄大な鹿島槍の山足が仙人山のそれとかち合ふ處は、等高線のつまり方の特に甚だしい處で、其處をどうやらかうやら通過して劒澤落合に出られたと云ふ事は、私として先づ類例の無い事である。恐らく私は二度とあんな馬鹿げた苦しい旅をしやうと思ふまい。

東谷最後の休息地から谷を離れて、左側の急な澗澤を登る事となる。大岩の所から深い徒渉をやつて、對岸の崩れかゝつた草地を登り、右手の澤に移る。黒部の本流が見たい心が一杯だつたので、どういふ風に登つたか詳しい事は忘れてしまつたが、ノートを見ると「右澤より痩尾根一つ越してカラ澤の急を上り、右のブナの下に來る、約百五十米の上り」とある。何でも急な所で、必死になつて登つたのであつた。岩の割れ目を傳つたり、草の根に捕つて殆ど手足で掻き上つたりした事も記憶する。一息入れた後又も押上つて四抱へ位ある巨大なクロベの根元に立つた。尾根はまだ高い。丁度東谷落合に向つて、さしも長い鹿島槍の大尾根の末端が支離滅裂して崩落する處だから、何處が眞の郡境だか分らない。成るべく本流の方に向つて攀んで行くと、石楠の藪が巨石と黒木の抱き合つた切れ切れの尾根の下に現れる。其をやつとの事に分け上つてクロベ、ツガ等の生へた岩角に倚つて西に下瞰すると、初めて黒部の本流が見えた、その深い碧潭と白い瀦のしぶき。森と岩の底に輝く谷。

どれ程今迄其一瞥が待たれたであらう。見える處は三四町に過ぎないが、岩壁は賽の目に刻み上げ、或は赤く或は白く、其間を物凄い程微明な藍青色の水の帶が悠然と流れる。明るい谷だ。そして碛と名のつく處も作らない大量の水だ。「おーい黒部」と私は聲を張り上げた。人夫達も「先生、せめて滿



黒部川(中の谷の合流點より下流約八丁の所遠景は赤澤岳)伊藤孝一氏撮影

○大町より下廊下へ　沼井

足して下さい」と私を顧みた。兎も角見た丈で蟲が納まつた。東谷は此處からは到底見えない。も少し尾根を下つてと思つたが、下は恐しい一大岩壁になつてゐるらしい。崖は東谷に面した方が素晴らしい大さだ。翼が無ければてんで行かれない。

黒部に面した斜面は危險で歩けないので、も少し尾根を登る事とする。二十分ばかりして不圖先頭が立止つた。見るとクロベの大木で根元から餘程上部に何か刃物で切つた跡が殘つてゐる。跡は古い物と思はれる。昔積雪時に越中の者でも盜伐に入つたのかも知れない。兎に角こんな處迄人が入つてゐるのだ。人跡未到といふ言葉は色々の但書が無ければ安心して使へる文字では無いと思つた。

なほも登る。尾根は痩せ細つて所々に岩塊がある。元より深造岩の類で、隙間には小粒の水晶の結晶などがある。石楠の藪は思はぬ所に引懸つて偃松以上に厄介だ。其も時には歩き易い蘚（こけ）の道に變つて、ほの暗い立木の間を擦り抜けては心地よく脂の匂を嗅ぐ。

其内に乘越の様な處に來る。左側は東谷から私の登つた澤の右の窪の取つきである。近藤氏も此を通過された事は後で直接に聞いたが、私達は一の足跡すら發見し得なかつた。一度見ゑて隱れた黒部の本流は四五町も長く見える。東北の方には五龍岳が綠の裾まで露はしてゐる。海拔千二三百米の處である。腹も減つて來たので、恰好な休場を幸ひ中食の餘を食べる。之から上方は少しくナセになつて、四邊の樹はツガ、クロベ、ヒメコマツ等美事なのがある。總じて黒部谷はクロベ（ネズ）が多いので、ヒメコマツも亦少くない。先から梢は怪しい風音に鳴つてゐたが、ふつと吹き止むと日がかつと照つて、黒部川の水聲が幅廣く響いて來た。此處から少し登ると容易に又平らな處に來る。樹間を仰ぐと、痩尾根の右手一面に大岩壁があるので、もう尾根傳ひは止めて、今度は谷へ下る道を求めようと試みた。

大岩壁の下はしん〳〵と茂つた森となつて、定かに分らないが、南側の一尾根に到る間に例の隱れ

谷ても刳り作るらしい。一行は燕返しに方向を轉じて、尾根から灌木の茂みに身を投じた。勿論其は尾根傳ひよりらくな事ではない。草鞋は何時しか片方に捻れ曲つて來る。手は一刻も放して立つては居られない。さうして藪から藪へ、一の澗澤を渡つて目指した尾根に立つ。途中て見た黒部川には大井川奥の鳥森山に似た小中島があつて、川筋は其右手に廻る。山裾から再び現れる流は青黒い淵になつてはゐるが、遠目にも湧き返る水の生氣潑溂たる態は東谷の落合ふ爲であらう。尾根に立つて南面すると、其處にも黒部の碧流がちらとして、遙か彼方の劒澤と思はれる絶壑が、燦として陽に輝く仙人山側面の大峭壁の蔭に割れて見えた。

最早日は傾いて來た。今日の宿りは雲をつかむより的の無い話である。再び草鞋を締め直して、此尾根の側面を南下する。向ふに又一尾根が谷に落ちてゐる。草地を滑り、窪に近づくと此處にも水は無いが、ひよつとしたら本流に下りられるかも知れないと、暫くは汗みづくに穴つて木につかまり石を跳び下りて行く。もう先から百米は下りて來た。山毛欅の根元に跨つて一休すると、靜馬は尾根を越えて水を求めに行く。泊る處を捜すべき時刻だからである。斯様な所だと何時木のかげから岩塊が轉び出ないものでもない。人間の血を吸つた事の無い蚊の群が得たりと押し寄せて來る。木立にすかせば仙人山の凄絶極まる赤裸々の岩壁が、手の屆く様に近い。黒部川は樹に遮られて水音も遙かになつた。靜馬は歸つて來ると無言で荷を負ふて先に立つ。私も後の二人も押し默つて一尾根越えて澗澤に下る。この澤では仙人山の絶壁が前より廣く見渡される。中央に引掻いた様なカラ澤は、ポッンと殘雪らしいものがあるが、其上下は恐しい高い瀧で、水が眼に見える程あつたらさぞ壯觀であらうと思ふ。之から尚下り氣味に又一尾根越えると稍大きい石溪がある。散々に猿の眞似をして跳び下りると、之にも水は無い。折から日は暮れかゝつて、嫌な事にはポッ〳〵と雨が降つて來た。

此時程嫌になつた事は無い。今朝ふと見付けた怪しの雲は約束通り降らしたからだ。もうこの澤を

下るより他はない。黒部の本流迄は百米位と思はれるので（實際はもつとあつた様だ）、綱を出して、先づ足下の二間の棚を下りる。雨は本降りになつて、大粒では無いが見る〳〵内に襟元から濕つて行く。暫くがた〳〵になつて下ると、空瀧は二つも三つも續いて見える。厄介とは思つたが仕方がない。三間計りの綱を二重にして下ると、十間ばかりにして又高い瀧になる。之も無事に吊り下がつて一先づ休憩する。左右の山腹は一寸攀ぢ難い程に切迫して來る。雨は用捨なく強さを増して、とう〳〵夕立の本性をあらはす。

此雨では岩角も綱もつる〳〵と滑つて、本流の絶壁を冒險して下る事も決行し兼ねる、と云つて休んで居る所は極めて不安な様子だ。滴々の雨水がくつゝきあつて一水を成す時には其處此處の岩片が何時摩擦を減じて頭上にぐわらと飛來するかも圖られない。其處で頭が痛い迄に氣を配つて更に下つた。二度綱を使つたが、最後の瀧では雨が更に強く注ぐので滑る事甚しく、三間の急所が命の瀬戸際の様に思はれた。然しこの凹澤には岩角の堅いのや、倒木等があつて人一人支へるには十分であるのはせめてもの手頼りである。なほ下に豪い直立の瀧が現れたが、其處には大木の未だ朽ちないものが梯子の様に立てかゝつて居たので、綱も使はないで濟んだ。其が十間ばかりて再び高い崖となる。餘程下りては來たが、時は遲いし雨は土砂振りで、行先が果してどうなつて居るか知れない。丁度この棚の上が工合よく大岩石を負うて上方からの墜石を避けるに十分なので、泊る事とする。

こんな處こそ記念の撮影をして置きたかつた。天幕もどうやら張る事が出來て、勇吉は雨中に熱心になつて火を起す。内山と靜馬は焚物を集めたり、天幕を張り直したりする。不圖氣が付いて私は有りと有らゆる容器を出して、天幕から滴る水、苔蘚の飽和し切つて洩らす雫を氣永に集める。其が漸く一合から二合足らず溜つた時、夕立は上つて、火は岩頭に勢よく燃え出した。其處でずぶ濡れの衣を乾して、明日はどうしたものだか、此處はどの邊だか評議した。仙人山の上には雲が紅く色付いて

明日も好晴なる事を豫想せしめた。谷の奥では孤獨を歌ふ木兎(?)の聲がホッ〳〵と聞えた。雨は全く止んで、仙人山の峭壁を前にした猫額大の岩上は早くも闇に包まれて來る。夕食は辛じて集め得た二合の雨水を湧かして蕎麥かきを作つて嘗めた。靜馬自前の六十尺許の補助綱が其を預けた內山の荷の中にないので、年若な彼は頻りに氣を揉んで、明日あさてもさがして來るといふのを、何だ、つまらない事で大事な身體をこわすなと元氣を付けてやる。月が出たらしく、峯は明るく浮き出たが、黑部の水音を近く耳にしながら終に好きな茶も煮られぬといふ、極めてうら寂しい一夜であつた。

八月十日の曙の色は、谷底の岩の上にも音づれて來る。天幕を出て見ると、よくもこんな所に泊れたものだと思ふ。涸澤の幅は三間にも足りない。五體を休めた岩面は天幕一つがせい〳〵で、それも圓錐形の天幕なら全く張場に困つて仕舞ふ。つく〳〵と屋根形切妻の小型が大切に思はれた。前面仙人山の尾根には既に朝日が照つて、空は一抹の雲も無い。涸澤は遙か尾根の頂から一直線に下りて來る。石には皆蘚が生へて、不斷水のない澤だといふ事が分かる。綱は盛に使つたが、八峯の樣に地盤が脆弱ではなくて、足下の不安の念は更に無かつた。たゞ愈〻本流に臨む處が廊下の名に負かず垂直な又寧ろ刳れた岩面に終るであらうとの心配のみがあつた。序でに此澤の位置を地形圖で示すと、東谷劒澤兩落合の中間から少しく南方によつて明かに認める事が出來る其の窪である。

出發したのは仙人の尾根の下まで日の射す頃で、午前七時と見積る。直ぐ左(南)の藪の急傾斜を押し上つて、斜に本流に向つて山腹をまいて行けば、川音近く聽く處に一の切開が見える。どうも昨日からの天幕といひこの切開といひ、最近誰か入つてゐるに違ひないので、其を傳つて下ると、中々通り一邊の切開ではない。急な處は段々にならしてあつて少くとも十日か二十日前に作つたものらしいけれど此が二十米計りにして盡きてしまつた。確かに何處へか續く筈だが搜しても分らない。(後できくと此は東谷から劒澤落合へ山越えに來る道の途中から分れてゐるもので、實は此方を始め切り下げ

て行つた處下が惡いので中止したのださうだ。)其處で左方に搦んで急壁を下ると、ミネカヘデの多い林を拔けて、花崗岩の白く光つた一つの石溪を得た。此處にも人の來た樣な形跡は無いが、何にせ水を水をといふ欲求が烈しいので近寄ると、ちよろ〳〵と鼠の尾にも似たる小流が岩の隙を狙つて落ちる、勿化の幸と荷を下ろして朝飯をたく事になつた。

澤の幅は泊つた所と同じく二三間あるが全體の規模はずつと小さく見える。上下には矢張タルがあつて、黑部迄は三十間位のものかと思はれる。空腹なので覗きにも行かない。日は嚇々と照る。宵からやけに煙草をふかしたので舌は熱を持つて、水で洗つても洗つてもざら〳〵する。飯が出來る迄長い事だ。ぢつとしてゐるのも馬鹿げて居るので、澤を下つて見る。前面の左は絶壁になつて居て一寸通れさうもないが、ひよつくり出て來た靜馬はさら〳〵と木の枝から枝へ身體を渡して巧みに下りてゆく。瀧の上に立つて見てゐるともう彼の姿は隱れてしまつた。谷の風は北東から吹いて來るが、仙人山の上の雲は南西から動いて行く。私も靜馬の後を追はうと思つて瀧の左から下りかけると、鹿の樣に靜馬が上つて來て、澤の落口は豪い崖にえぐれて居る、此方側の岸は見えない、中々綱も使へさうに思はれないが、黑部の流は其頂に立つて一寸石を投げても對岸に屆く位の幅だといふ。景色はどうだと聞くと、どうも水量の多いつたら無いと語る。彼も今飯をたいてゐる所は水面から三十間位の高さだと云つた。私一人で其處迄行くのは一寸躊躇された。其時煮えた煮えたといふ叫びが再び猛烈な食慾を刺戟したので、岩の上に戻らざるを得なかつた。

晩い朝御飯は內山の採つて來たカヘロッバ（ギバウシの一種）の味噌汁で大變旨かつた。段々腹が出來ると、そのカヘロッバの甘いぬる〳〵した汁が氣持惡くなる。さうすると取つて置きの澤庵を厚切にして御茶漬で流し込む。意地の汚い話だがほんとによく食べた。そしたらだるくなつてしまつたので、いゝ氣なもので日蔭にごろりとなる。

二度目にたいた飯がぷつ〳〵音を立てる時眼を醒ました。既に午前は餘す所二時間しかない。昨日と同じく夕立雲が來たが、今日は何でも劍澤、棒小屋澤の落口邊迄行つて、地圖にも見えるナセな所に泊れるだらうと高を括つて、場所柄にも似あはず再び桃源の夢を貪る。其れや是れやで、水無の野營のお蔭にとう〳〵今日は晝まで空費してしまつた。

正午の頃、蟬の聲姦しき山腹を分け上つた。今日の陽は特別に暑い。尾根は急にして小灌木の繁りは慄悍な抵抗をする。振り返ると飯場の澤の北尾根は到る處大岩が重り合つて、來た道のも少し上を通つたら、どんなに苦しんだ事かと思ふ。行々黒部の激流が見えて來た。幅は三四間、手に取る様に近い。對岸の仙人山の崖は一段と惡魔的な險惡な面を形作つて、剩さへ樹木は少く、到底へつる事は出來ないであらうと思はれる。實に根强く張つた森林があつてこそ今の今迄無事であつたのだ。

又一つの小尾根に出る。先から少し宛上り氣味に來たが、此處に立つて見ると延々二里にも餘る長大な岩小屋澤岳の支脈は、ばつたり缺け落ちて、頭上に戴く黒い密林、其下の何百尺の急壁は下に渦まく碧潭の物々しさを語る様である。その手前のナセ尾根も針葉の色濃く下つて來て、谷の流は落ち合ふ水のまざりあふ處にあるのか、東谷のあたりに見た色とは異つて、活潑に瀦をなし岸を擊つて居る。

小尾根から下りて山腹に一息つく。流汗瀧の如しと云ひたい。目的の地が見え初めて心のみがせかれる。もう平尾根の一つに入つて行くものと見えて、山腹の傾斜は足に痛く感じなくなつたが、ヤブは依然として蜘蛛の網より甚だしい。又一尾根を越えると、黒部川はさらにあり〳〵とタルのありか迄はつきりとする。少し進んだ處に又も例の怪しの切開が忽然と現れた。

此處に於て私達は異議なく切開を下る事とする。殆ど一直線に、凡そ五六町も（實際は其半分も無かつたらうと思ふが）駈け下りる。谷の響音は鼓膜を震動して遂に水に觸れ得る可能を信じさせる。

「今度はほんものずら」と人夫はいふ。磧の石が見え出して、左すると怪しい生物（いきもの）の形が目前に迫つて來る。其は人だ。正に人だ。草を刈る鎌の手を休めて、此間の羚羊の驚きよりは更に妙な、不審な顏を向けて立つて居る。前方を見ると岩角に大天幕が張られてある。「今日は」と草刈男に一言挨拶していきなり天幕に駈け寄つた。中には和服を着た八字髭の人が横臥してゐて、之も默つて私を見つめた。簡單に會釋して私の行路と目的と、又東谷の天幕の事等語ると、其人は「やア夫はえらい」と微笑に變つて、中に招じて呉れる。交換した名刺を見ると「古河合名會社櫻井清美」とある。噂に聞いた測量の人であつた。登山者の影すら見えぬ黑部上流の畔に、斯樣な人に逢はうとは思ひもよらなんだ事だ。

到着したのはまだ午後二時頃であつたと思ふ。鹿島槍、岩小屋澤岳、黑部別山、仙人山のひし〳〵と詰め寄せた一角、萬斛の雪溶水の、人をも山をも呑まんばかりに吠哮して疾走する峽流の傍に、安んじて足を投げ出し得る小さな避難所があつた。耳を擊ち眼に映ずる物は、只絶大な力を以て長驅する水流と、其れに呼應して震ふ岩壁と森林とのみである。人も草も空氣も、其猛威の內に包まれて、此世から遠く隔たつた一團の精力に他ならない。

最初に受けたショックは多分其程の物であつた。然も吾々がもし櫻井氏に先じて此地に下つたとしたならば、如何に隨喜の涙に濡れた眼は谷の魔力に魅せられて勝手なロマンスを作り上げたであらう。人は自然に一人對する時其心戀の如く、二人以上にして始めて理智的な批判に入る。たしかそんな事を吉江孤雁氏の著書に見た事がある。私と雇傭關係を結んだ靜馬達に對しては、其立場を分持つ事は出來なかつた。玆に櫻井氏と面會したと云ふ事は、私の燃えさかる好奇心を鎭め、盲目のアムビションを治するに特効があつた。己一人水に近づいた時は、恐らく谷の妖精が私の意識する暇あらせず不可思議の彩筆を振つたであらう。其丈私の現實は今複雜となり、ちぐはぐの心理が作用し、其結果筆の取り難い事となつた。

測量隊の一行は櫻井氏の他に人夫が八人程居た。皆珍しさうに集つて來て二人の對話を聞く。草刈男はこんな所へ來る人間は無い筈だがと驚いた事を話した。私が氣儘な山谷の巡禮者である事が了解すると、相手の人達も隔意なく質問に應じて呉れた。人夫は皆越中愛本村の者である。何日か此處に滯在して食糧が無くなつたから、愈〻明日は切開を傳つて下るといふ。あの切開は祖母谷から此迄一日行程であるといふ。水力測量は未だ十分に行はれたものでは無いらしいが、大約一秒間に八百八十立方尺流れる、三百あれば電力は十分に取れるんださうだ。水速は此附近で秒速八尺、水量は目下の所平時よりは多いといふ。水は劒澤落口の邊から引いて祖母谷の附近迄持つて行く見込だといふが、實際どういふ形式の下に運水するか、其點は不明であつた。人によると日本帝國の貧乏國なるのも忘れて頻りと風景絶體保存論を稱へるが、山岳を崩し、美しい森林を燒却しない限り、黑部川の樣な天然の大動力は大に利用したがいゝと思ふ。話に聞くと既に鐘釣附近は古河、三井、三共の會社で占有して、古河が最も奥にある所から今度の實測を始めたわけである。けれどもそれは一種の廣告に過ぎはしまいかと私は密かに恐れる。徹底した計畫のない事業の宣傳こそ山の神聖を汚す事大なるものがあらう。

未だ日は高かつたが、越中の人は此から先に良好な野營地の無い事を說いて、頻りに忠告するので、私達も今宵一夜賑やかな時を過さうといふ事になつた。そこで先づ身輕になつて劒澤落合あたり迄行つて見る事とする。私達の下りた處は劒澤落合の下流約五六町の處で（歩いて見ると十町位に感ずる）、ナセ尾根の北端の流に望む處にある。幸にも下廊下の凄絶さも此の小部分だけは東側が稍〻積らしくなつてゐて、天幕の張られた岩上から水面迄は三間位のものであらう。流の幅は五六間乃至十間。色濃籃に花崗の大塊に映じて、水の深さも知られず、深淵が其儘落下すると云つたらよからうか。天幕場から惡魔の行場の樣に亂雜に尖りあひ寄りつどふ岩壁の隙をねらつて、大分草鞋の泥の跡がつ

いてゐる。其が碆への通路である。碆口に下りると、其處には竈が二つもしつらへてあつて、逞しい赤銅の胸をあらはにした男が何か煮てゐる最中である。對岸には樹を二つ三つ束ねた橋が架してあるが、水量が增した爲か、川の中央の巨岩から對岸へ渡る處がタルの飛沫を蒙つて危險で通れさうもない。其先に二ヶ所ばかり平の小屋て見た樣な針金渡しがあるが、其一方は危險だから其內太いのに架けかへると云つてゐた。

碆から直ちに淺い然し冷い水を渡つて、磊々たる大岩の累壁に攀ぢ登つた。暫くすると左上からどえらい雜が振りかゝつて來る。地圖て見ると大した事は無い樣だが、どうして見上げる首が痛い位だ。その中腹をへつるとがら〳〵と石が流れて危險で仕樣がない。夫て又流の方に下ると、岩壁の夥しく浸蝕されたる間に一條の針金が十數間も下まで斜に張り渡してある。其を手繰つて再び流の傍に出る。見ると右岸百尺許の高所に森に搦まつて一條の赤旗が翩飜と風に靡いてゐる。其が劍澤を見る地點なのだ。しばらく岩壁登攀をやつてゆくとヤブがひどくなる。不圖振り返ると劍澤は傾ける陽に燦と輝いて黑部川に臨んだ。あつと言つて私は思はず手を放す處であつた。元よりほんの一部しか見えない。然しどうにもかうにもものがきの取れない惡場なので、止むを得ず元に戻つて、岩をとび〳〵南進する、その岩壁が一きわ急に取りつく事も出來ない斷崖となつた突端に、靜馬達は腰を下ろしてゐた。

劍澤の落合は對岸の岩の鼻が邪魔になつて見えないが、滔々と浪立ち溢るゝ本流は、岩小屋澤岳尾根の末端から廻つて劍澤を合し、一層精力に滿ちて押し流るゝものと見える。到底牛の渡しに見る樣な生優しいものではない。

暫くは恍惚と水の色調と音律に身を任してゐたが、野營の準備もあるので、も少し先へ又は對岸へも渡つて見たいのを我慢して、歸路につく。寢覺の床岩を數倍にも擴げた樣な白い丸みある岩の配置

と碧い渦流はやゝもすれば五尺の體を夢幻の内に引入れんとした。何處から落ちたものか一匹の大蟇がタルを越え岩にあたつて流れて來る。岸に上らんと四肢を彈いたが遂に及ばず、白い腹を上に向けて中央の大濤に卷き込まれてしまつた。

白い大天幕に添うて鶯色の隙間のない小天幕が張られた。食前の一浴を試みやうと下におりて、はる〳〵携へ來つた水泳着を身につけて、入江になつた淵の中にどつぷり漬る。見る〳〵數間流されて本流に押し遣られさうになる。懸命に片拔手を切つて石にとりつくと、夕の風に身體の組織は氷る樣に思はれた。越中の人夫は、黒部で泳がうといふには、手を水上に出しては駄目だ、水を抱く樣にして泳げばいゝとか言つてゐた。其の荒川に慣らされた彼等とても、櫻井氏が叱咤する迄は容易に跳び込み得なかつたさうだ。

夜が來ると流は一層物凄い怒號を擧げた。時を惜んで櫻井氏の馳走になるコヽア入粉ミルク等を飲み乍ら、谷の話や山越えの話に時は過ぎて、寢たのは九時頃であらう。

六　棒小屋澤溯行

夜中屢々溪聲に夢を破られた。其都度靜かに首を擡げると、陰森たる谷の氣が漲る内に、那落の底から響く怨恨の如く水音は心を壓して、今にも一沫の波頭に碎けかゝるかとも思はれる、そして氷冷の水が直ぐ指の先に觸るゝ樣にも覺えた。

起床して岩頭に立つと、今日も變らずのたうちまはる蛟龍は銀鱗を光らして、其の喩ふる物なき青玉の肌は明く輝く花崗の岩壁に擦り寄つて、所狹しと小瀑に飛下する。黒部川は全部瀧の連續といつてよい、いや瀑布とかタルとかいふ言葉もあてはまらない。昨日も言つた樣に、深淵が其儘に落下するのだ。然も其は大井川の樣に重々しく澱む事はない。飽く迄猪突、飽く迄明徹に大量の水を遠く日

本海へ吐くのである。ゲーテの詩も恐らく此處では生れないであらう。動的な、見れども見れども飽かぬ水そのものの姿だ。

古河測量隊の一行は朝とく鐘釣に向つて行つてしまつた。私共は分けてもらつた御飯と蕗の味噌汁を食べて、一時半も後れて出發した。既に日は谿間にも照つて、岩の峽に殘る一片の雪塊から蒸氣が立上る。食糧も安心する程十分に殘つては居ないので、最初の豫定通り棒小屋澤を上る事としたが、其落口の惡場、大瀧の連る深い隧道をどうして避けたものかが問題であつた、愛本の人達はよくは分らないが棒小屋澤落口から十町許り上流に落合ふ澤も惡いらしいから、ずつと其上を通つて行つたらよからうといつた　然し靜馬は昨日見た時赤旗の手前から林に包まれた崖を登つて成るべく本澤について行かうと云ふ。私も、多少の冒險はあつてもやはり飯のうまくたける、水と焚物の豐富な谷を訪れて行きたい。

其處で靜馬を先に立てて、積を少し行つてから、ナギを左に見て崖を攀ぢ登る。岩の根に搦みあつた樹木の枝は、黒部を覗く恐しさに長縮したのか、中々堅くて押し分けられない。手は脂ににた〳〵して、顏も幾回となく彈かれる。一間位の岩壁は右にも左にも頭上を壓して、その意地惡くも抵抗する木が無かつたなら、どうしても登れない箇處がある。斯くして僅々五十米の高距を得るに四五十分は優にかかつた。一息ついて後を見ると、黒部の奔端は冷笑のどよめき凄まじく、今にも落ちて來よと嚴命するかの如くである。劍澤の窪が見えて來たが何と深く割れたものであらう。黒部別山、仙人山の對峙する側面の絶壁は正に九十度に及ぶ處もあつて、身の毛のよだつ體の感を抱く。谷の空は又怪雲が簡ひ出したが、昨日は無事だつたので別に心配もしない。

又登攀を始める。ヤブは依然として繁茂してゐるが、其が命の綱である。二回休んでから禿げた額の下に出て右の方へ搦んで行く。其途端尖つた枝の折先で眼を擊つたので氣が轉倒してしまふ。先づ

負傷もなく十間許り進むと、再び劔澤はかつと開いて最下の瀑布、白馬の尾の如き貌は、直下の藍を湛えた壺にざんぶ〳〵と落下するのが見える。黑部の本流は劔澤落合の方にずつと迂回してゐるものらしく思はれる。次に中段の狹い、純白の飛瀑が見える。瀑布と瀑布の間は湖の如く廣まつて潭々(たん〳〵)と水を湛え、勢餘つて二ノ瀧に落下する壯觀は筆紙に盡し難い。仙人山の頂も此から見えた。

更に尾根の突端に這ひ上ると劔澤の殆ど總ては一目に集まる。其下部の水勢烈しき事と水量の多き事とは驚く可き程だ。櫻井氏の話に、黑部川の水量は其七分を上流より其三分を劔澤と棒小屋澤より齎すといふ事であつたが、劔澤の水はよし其量に於て本流に及ばずとも、其質たるや、あの天を劈く劔、別山一帶の大雪溪から滴り出して聊かの寸隙もなく階段的に飛射する、恐らくあの水を一掬したら百年も命が延びるであらうと思つた。

仙人山から落口近く劔澤に入る雪溪も小さくない。黑部別山と仙人山のさし挾んだ大障壁は鳥もとまり得ぬ程峻直に屹立する。仰げば三窓の雪溪いや高く、劔の本嶽は見えないが其右肩の兀突たる岩峯は遙かに我々を睨まえてゐる。

尾根は棒小屋澤の左に劔澤落合に向つて刃物の如く鋭角に切りさいなまれた遺物であつた。棒小屋澤は水聲も忍んで來る樣に恐しく深く隱れて居る。一刻も早く見なければ氣が濟まない。そこで黑部と劔澤に別を告けて尾根の頂を越えた。午前十時半頃と思ふ。

其からは主に闊葉樹で、ネズ、ツガなどの黑木も混つてゐる。下草の代りにひどい石楠の藪があつて、今朝から續けての勞働に五體は爆發しさうに暑い。其からホッツジの藪となつたが、此が又細い癖に無暗に彈いて仕末に終へない。又小休を試みて上り、棒小屋澤に面する側に下りて、岩壁の上、クロベ、ヒメコマツの大木の根元に跼まる。そして中食の箸をとつた。今迄このやうな烈しい運動をした事が無いのを思ひ浮べ、然も其が下廊下より拔け出る唯一の豫定線なる事を考へては、あの神祕

境が如何に固く門戸を閉してゐるかに驚嘆した。

食を終つて東を見ると、棒小屋澤本流と手許の支流を分つ尾根が見える、樹に攀ぢて小手を翳すと、本流の水は深綠の葉がくれにきらりと光つた。水の流るゝ處岸はV字狀に迫つて、矢張廊下の態をなして居る。まだ〳〵棒小屋澤の傳ひ難い事が瞭然である。對岸の尾根の先端は黒木の頭の、是も惡絶なる峻崖に連つて、全く人外境と思はれる。岩壁はイハタケでも生えてゐるのであらう、黒い肌を所所に示した。先に見た支流を分つ尾根は蓊然とブナの純林がはびこつて、熊の棲家でゞも有りさうに思はれた。

再び荷をしよつて、此側は下れないから、尾根に戻つてヤブを分ける。すると鞍部の様な所へ出た。支流の澤は此時見えて、本澤に落合ふ上に十間以上の高い瀧も見える。本流の一部には殘雪が白冷の光を投げる。少し進むと又鞍部めいた處に出たが、其からは地形圖の所謂西澤小澤持小屋澤の間の尾根が見えた。下瞰すると樹の間に河原が見えて大して危險らしくも感じないので、愈〻下る事と決した。駒鳥がしきりに旅情を誘うて、谷の水が又となく戀しい。

例によつて木にぶら下りながらどん〳〵滑り落ちる。百米位は瞬く間に過ぎて、終に棒小屋澤の上に立つた。其處はこの大岩に堰かれた水が滾々と溢れる一瀑の頭である。下流は直ちに瀧が連續して十四五間先は三段に落ちて左折するのでもう分らない。その角にどうと落下し轉々する有様は、此ぞ黒部に注ぐ數段又は一段に高い大瀧を暗示してゐるではないか。今下つた處は黒部川から恐らく五町に及ばぬ近距離にあつて、私達は再度幸運にも豆粒大の安全地に避近したわけである。上流は遠からず右方に屈曲してしまふ。一體に水量は東谷より少いが、絶壁は流石下廊下の中心とて、更に偉大に聳立する。先づ谷にも下りられたと萬歳を叫んで、安心の煙草をふかした。谷の入口から涼風がさっと吹き寄せて舞ひ上つた瀧のしぶきを上身に浴びる。

其から左方に岩を攀んで、流に下り立ち、左岸に渡つて少許、再び右岸に徒渉する。川は右方へ曲つて行く。徒渉股間に達する處もあつて凡十間ばかり邁進した、すると眼前に三段に連る瀧がわつとおめいて落ちかゝつた。瀧の高さは合せて五間位。まだ〳〵下廊下の領分を脱してゐない。すぐとその先が支流の落合ふ場所で、其を通過しなければどうも安心がならないと悟つた。

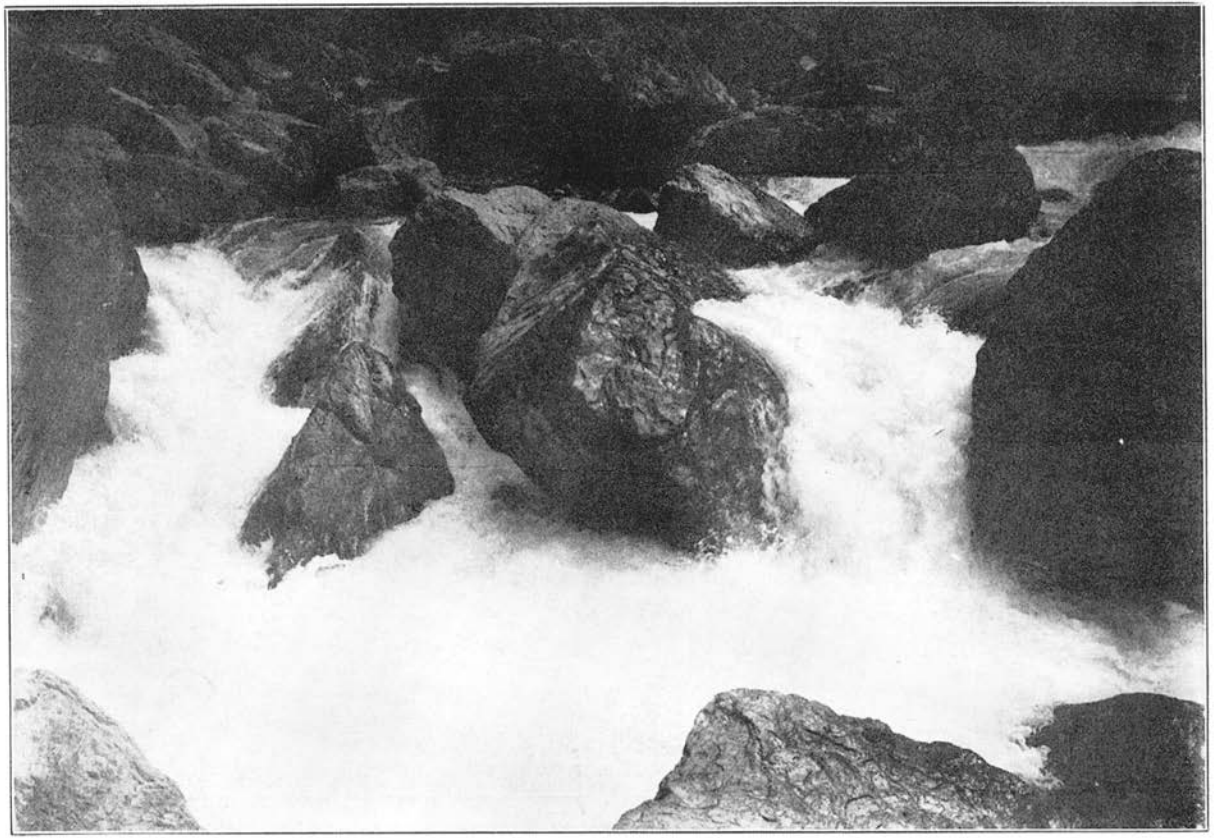
其處で左岸を少しへつって、適當の所から山腹を登つた。中々其登りも悪いので、やつと左へ切れて、水面上五十米許の處から山の鼻を廻りかける。支流の澤は高い瀧が三段に連つて大凡百二十尺もあらう。痞尾根の突端から山腹をへづつて暫くするといよ〳〵本流といふ處で、危い岩壁の上に出た。澤の流域はもう危なげないので下りる事に決めたが、綱を二重にしては到底も足りない、慥かカンバの類であつたと思ふ、其根元に十分まきつけて、一重にして投げると、百二十尺もあるものが先一間程足りない。だから凡百尺の崖と思はれる。傾斜は七十度位又は其にも足りない位であるが、蘚の水氣が、綱に觸れてぬる〳〵と滑る。靜馬、私、内山の順に下りて、最後の處は綱を放し様駈け下りてほつとする。勇吉はと見ると、結んだ綱を二重に直して握つて三分の一程下りて來たが、もうどつちも素手では下れないので、恐々足場を爪先にさぐつてゐる。靜馬は左手の危岩に裏からよぢ上つて大聲にどなる。私は氣味が悪くて見てゐられないので、流に足をひたして口笛を強くならして外方を見てゐた。けれど勇吉は無事に下りられたと見えて、「よかつたのう」といふ靜馬に對して「豪いぞ〳〵。俺川ン中へとびこんでしまはうかと思つた」と賑やかに私の傍にやつて來る。一同は祝福の水を飲んで、馬の様に長い息を吸ひこんだ。

此の處川幅は一二間の狹きに押し詰つて雙崖なほ小廊下の趣があるが、水量は驚く程でになく、傾斜も緩いので一寸安心が出來る。もう日暮に間もない、何とかこの閉ぢ籠めた屏風の中から緑の草敷く廣い河原に出て行きたい。異常な興奮に眼尻の上つた靜馬は、しつかと荷梯子をくゝりつけて、

「さア、氣付けて呉れよ」と先に立つ。瀬の音は冷く骨の髓迄泌みて、足は忙しなく右へ左へと渡る。一處胸迄つかりさうな深みがあつて辛じて、アルペン・シュトックを足場にして岩に取り付く。流は中々急である。丈も立たない深淵が到る處に口を開ける。水に親しみのない彼等の顔は不動明王の侍者の様な緊張を示して、可笑しいと笑ひてもしたらそれこそ渦の眞中に叩き込まれさうだ。尤も内山は大町から二三里東の山によつた處の者で、この旅行中時々水錬の話を持ちかけたが、其都度靜馬は今にも彼が水にとびこみでもするかの如く思つて淳々と其不心得を諭す様子が面白かつた。早く切り抜けたいといふ希望のみが心を占める。然し流は數町にして兩岸の絶壁見るからに凄まじく天を閉して、一つの谷一杯に落下する飛瀑に突きあたつた。瀑の上には殘雪がアーチ型に殘つて、岸と岸との間に危橋を渡してゐる。もうそれについて進む事は絶體に出來ない。そこで無言のまゝ、アルペン・シュトックのお蔭で上れたタルの上に戻つて、左岸（南西側）の砂地に荷を下ろした。

私達は初め餘りに早く下り過ぎたのだ。誰の顔にも血管は太く青く張り切つて、眼光炯々と岩壁を睨んだ。兼て棒小屋澤の下部が惡いといふ事は聞いてゐたが、成程其は死の谷であつた。私達は必死になつて彷徨した擧句、終にこの猫額大の砂上、水は足を洗ひ、頭上には何時落ちんやも圖られぬ破岩を戴いて一夜明かさねばならなくなつた。

やがて日はとつぷり暮れた。夕食は晝飯の殘と味噌汁ですまし、出來損ひの片栗を食べて天幕に入つた。用を足しに外へ出ると、淙々たる溪流は蝙蝠の羽翼のやうな形にかぎられた狹い空に對して、嘗て感じた事のない壓迫と、物の氣にとり憑かれた様な心持をば感じた。これ程狹い空を見た事もない、エメラルドに輝く星の數も指折り數へられる。毛布にくるまると、水音が耳についてしばらくは寢られない。何か鳥の啼く聲でも聞えはしないかと耳を聳だててゐる内、疲勞は全身に廻つて前後不覺に陷つてしまふ。



黒部川（御前澤と御山澤との間）　伊藤孝一氏撮影

八月十二日。私と內山はぐつすり寐られて氣持よかつたが、靜馬と勇吉は頭上の岩が心配で十分眠られなかつたさうだ。昨夕は奮發し切つた後であつたから恐しい饗に聞えたが、今朝は如何にも優しい川の流である。朝飯は片栗を混入して炊き上げたら味が頗る上等であつた。恐怖の谷にも、豐富な水と燃料とがある事は、晝間の奮闘を償ふに充分である。昨日迄三日間下廊下の附近をうろつきまはつて、貴い難行を積んだ代り、行程は一寸も捗つて居ない。食糧の關係上、明日は是非とも大町に歸らねばならぬ。其には今日は成るべく時間を節約して、尾根に上り、少くとも棒小屋澤の上部迄出る必要がある。もう散々な目にあつて、明い灯の色が戀しい。出發は午前七時時分、砂地の傍の澤を上る。澤といふよりやはり岩壁のひだといつた方がよい。足場はしつかりしてゐて石一つゆるがない。直ちに五十米も登つて、側へ草を分けて行く。再び窪に出て一休する。それから先は岩の間やつと人一人入れる位の狹さで、傾斜は身體を直立して指の先が岩面に屆く程のものだ。カラ澤を大分上つてから草の間を右に卷いて瘠尾根に獅噛みついた。石楠が忽ち包圍攻擊を始めて手も足ももぎ取られる樣だ。藪から稍平らな處へ出てほつと一息。百五十米は登つたであらう。時間は約一時間經過して居る。傍の梢（てあつたと思ふ）の幹に大きな鳥の巢を發見する。內山が木に登つてたゝき落すのを拾つて見ると、誰も何鳥が巢くつてゐたか判斷を下し得ないが、兎に角古い物であつた。

又ヤブに入る。昨日よりはらくだが、歸心の崩した時なので元氣が無い。稍上ると本尾根に達して信州境の山が穩やかな物腰（ものごし）で私と向きあつた。更に上ると背後から劍澤と、小窓、三窓の雪渓、それから久し振りて劍の尖頭が自ら足を停めさせる。北には白馬から西する清水平の續きの山が見え渡る。近くは例の瀧の荒澤が全豹を表はして、峻嶮な落ち込みがいとゞ凄まじく見える。

山が見えたので喜んだが、藪は更に根曲り笹が加つて一行の脛をはぢく。苦心慘憺の末やつと平らかな處へ來た。之を突破して少しく下れば、爺ケ岳の淡綠の肌と棒小屋澤中部から上の廣やかな河原

が展開した。大抵見當がついたので谷に下らうと一決して、山を左に搦み二三の小尾根と窪を越え下つて、狹からぬ草の蓬々と生へた涸澤の源頭に來た。谷の水から五十米許上方である。川は見えたが頻りに空腹を感じたので、どつかと岩の上に腰をおろさねばならなかつた。

中食を終るや直ちに岩壁を這ひ下りて、再び本流の水際に立つた。最早下廊下の區域は全く脫して河原は先へ〳〵と續く樣である。いやなヤブより飛石を傳ふ方が遙かにましだ。三四町にして右側の山側に泥塗れの小雪田を見る。左側からは山崩れして流に落ちこむ。雪の傍に軟かい蕗が群生してゐるので、今晩のお菜にと大分採集した。

水流の徒涉も容易になつたが、連日の過勞に膝關節ががく〳〵する。西澤小澤の分れ尾根が見えて來たので休みもせずに行くと、間もなく其合流點に達した。支流の水量は貧弱ではあるが、奥深く森に包まれてのび上つてゐる。

落合の直ぐ上に本流のタルがS字狀に三つ續いてゐる。局部的ではあるが一寸暗い峽をなして、其上は一枚岩が覆ふ。左側のヤブを分けてゆくと、邪魔になる木を伐つた跡があつて、近い事ではないが兎に角人が通過した證據は十分である。岩のはざまから直きに岩壁は打開いて前よりも廣い磧が續いた。三四町で左側の山の間から澤が流れて來る。地形圖にはこの澤に當る處に水條の記號がないが其水量から見て、當然入れてよいものであらうと思ふ。なほ十町ばかりはぐん〳〵とばして上流に進んだ。

谷そのものは至つて平凡だ。駄々廣いといふ丈で、流も小さいなら、石の奇もない。其處へ思出した樣に小岩壁が現れたが、此は難なく右手に登つて又河原に下りる。布引の頭の邊がよく見える。舊友にめぐり逢つた樣な喜ばしさが靜馬達の頬にも浮んだ。豫想外に歩き易いので今日は棒小屋乘越から出る澤のドウに泊らうと決する。大空は半ば雲におほはれたが、其は夏の晴空の常だ。溪は美しい

ブナの林に包まれて河原の石は徒らに白い。左手に林の圍む平らな押出しを見てゆくと、其隣に鹿島南槍から長驅する澤が潺湲たる音を立てゝ落ちあつて來た。水は但しひどく濁つて居て不思議に思へた。このあたりから再び布引の頭が眺められた。

終に乘越澤の合流點に來てしまつた。本流を十五六間行つた處に程好く茂つたヤマハンノキの林があつて、第一流の野營地だ。河原の緣に陣取つて天幕も綺麗に張る。積づたひは凡そ三時間以內のものであつたらう。五時半の頃とおぼえて、安樂な泊場には、木を伐る勇吉の唄がなごやかに反響して鳴り響いた。

河原は本流の先まだ可成り平らで、襟足おとなしい山にかくれてゆく。爺の峯は赤瓦が所々にあるが、總て今日迄荒々しい骨格のみを見續けて來た眼には、優美な京の東山に對する樣な心地がする。翡翠の色の肌には殘雪らしいものも見えない。下流に面すると仙人山と劍の一部が上空を占めてゐる。此の處川幅凡三十間であらう、但し流は一間にも及ばない。對岸に行つて山足の岩に腰かけて再び劍を見る。夕燒した西空には、其の嚴乎とした山容はなほ北にも及んで、小窓、三窓の頭もカン〳〵とたゝけば金音を發する樣だ。其內に日は三窓小窓の間に岩峯に入つて行く。黃昏前の陽の散光、やがて雲赤く全天に走つて、最後の晩餐を祝する如く見える。

歸ると焚火の上に蕗がぐつ〳〵煮え立つてゐる。十分にアクをとつて汁の實にする。殘つた物は明日の辨當のお菜に取つておく。尾根からは霧が下りて來てブナの林をやんはりと眞綿のやうにくるむ。シホカラが多い事は閉口だが、何しろ氣はのび〳〵した。

此旅行て最も贅澤な夕食が終る頃、赤雲は黃にぼかされ、其が淡々と消えて行つて、夜が來た。月の光は峰から射して來る。流石に夜氣は薄着の肌に迫つてゾク〳〵する。天幕に入つて取つて置きのウヰスキーを乾盃して、櫻井氏に分けてもらつた粉ミルクだの、大町仕込の肉桂、乾杏等を賞美した。

○大町より下廊下へ　沼井

其は樂しい晩であつたが、又曉の待たれる一夜でもあつた。

七　大町に歸る

八月十三日。起きて窓外に立つと、日は劒のあたりに射して、赤味さす卷層雲は形面白く空にあつた。谷の白樺にも日は照つて來る。歸る日の朝の長閑けさ。意氣揚々として朝飯を炊き、殘ンの焚木を山の如く積む。火は忽ち青空を嘗めて、爺のあたりに谷を見下す人もやと思ふ。米は二三合餘つた丈だ。大抵の物は消費してしまつたが、只食糧兼雨の日の附木の代りとして携帶したバタ一鑵と紫蘇の粉だけが殘つた。昨日とつた薫のいゝ蕗は味噌あへにしてお菜箱に詰めた。

午前九時頃出發、上天に雲がかゝつたが西の方劒の空は深碧だ。泊つた處は秋にしゝとりに來る處で、もうそれからは難所もあるまい、粼の旅は徹底的に水條ばかり傳へと、乘越の澤を踏み登つた。

十五度から三十度の傾斜である。二三町にして雪渓。右から小澤が落ちあふ。小さなタルがあるが黒部から來た吾々には朝飯前の仕事だ。しかし決していゝ場所ではない。徒渉する程の事もなく、四五町で岩影に休む。もう汗が背筋を流れて暑くるしい。遙か上方を見ると一つの大瀧が飛沫をあげてゐる。まはりの尾根は針葉の小樹林。岩は小さいが崩れやすい。澤の幅は三四間のものである。

岩影を出て少しく上れば又殘雪がある、其上は水が濁つてゐる。タルが一つ現れた。稍々危險の思ひをして這ひ上ると、休場で見た大瀧が眼前に迫つて來た。すでに百米以上も登つたであらう。棒小屋の谷を隔てゝ牛首山が見える。其峰は偃松、白檜の色が胸のあたりまで濃く、頭の近くからは美しい草地となつてゐる。瀧は高さ五六間で水さへ無ければ登れる位傾斜してゐる。其を左にからんで上ると、そろ〳〵お馴染の草花が現はれてくる。大サクラサウ、ヨツバシホガマ、タチフウロ等。一段上に出て右側を傳ふ。その上は少し平らとなつて雪渓が横はつてゐる。右から又も水が落ちて來る。

平は二三町も續いて又一つの瀧となつた。澤は二段となつて私達は右方の瀧を登る。高さ五六間、岩角が多いので濡鼠になつて攀ぢた。不動明王の瀧上りだといつて一同は笑ふ。

暫く衣を日に乾して出かけた。後には牛首山が見える。更に一つの瀧となつたが、此はわけはない、一枚岩の緩傾斜面を上つて、その上の小瀧から右にからむ。此邊から鹿島槍の上半部が眼に映ずる。牛首山は頭の上から爪先まで眺められた。小瀑の連續はしばらく續いて心持長いと思ふ頃、澤は更に二岐に分れる。右を取つても早源と覺える水の隱れる處に到つて、中食の爲に荷をおろした。布引の頭から鹿島槍まで雄渾な尾根の屈曲を見る。霧が少し出て來たが大した事はない。四邊は岳樺が行列して物も言はずに私達を覗きこむ。十時半から十一時頃の事である。

蕗の味噌漬で越中側最後の食事を濟した。汗が冷えて嚔が出る。三十分の後に立上つてカラ〳〵の細溪を天上に向ふ。左から澤の窪が落ちあふ。右手に上つて雪溪を踏み、穴のやうな所を通りぬけると、なつかしい草本帶がぱつと開けた。爺も見える。心は足よりも急いで草地の上りは苦しかつた。が、終に山岳巡禮の常道に辿り着いた嬉しさは疲勞を癒やす事が速い。私達は豫定の如く棒小屋乘越に立つたのである。

國境からは申す迄もなく劍、立山の大連嶺が望まれた。天上の樂園五色ヶ原の高原も見える。岩小屋澤岳は尾根續きに溫和に、五龍は鹿島槍の側尾根を越えて怪異な姿を顯はした。立山東面の內藏助平は笹の色もあざやかに望まれたが、タンボ澤の山腹の高原(此は先年冠松次郎氏に依つて探られた)は見えない。山に雲が行き過ぎると、私達は荷を背負ひ上げて、黑部の深谷に最後の別を告げた。幾度か峰の上に立つて翼無きを慨いた私は、斯くして鹿島川を振り出しに谷から谷へとさまよつて來た。そして今は未知なりし境地から再び人里へ下つて行く。

○大町より下廊下へ　沼非

附記　行程摘要

八月二日。午前九時大町出發、立山釼行鵜殿氏、立山釼白馬行の四高教授某英人、白澤より爺鹿島槍行の宮川氏等も同じく出發、鹿島溪谷に入り林道を傳ひて鹿島川に注ぐ小なる澤の傍、林中に野營、到着午後五時、夕立あり、此地點ツメタ澤より凡二里。

三日。野營地出發午前八時四十分、林道は十町餘にして盡き、之より溪中屢々徒渉を以て進む、廣河原（圖上川の甚だ屈曲せる處）より二股まで壁とタル少からず、右岸林中を進み二股に到り（凡三時頃）岩上に野營と決す、此日急流に墜落して時計を破損し、爾後總て正確なる時間記錄を取る能はず、復た夕立あり。

四日。午前八時半、右股を上り雪溪を蹈みて五龍岳に登る、雪溪思ひの外長く且其上端は甚だ急にして狹し、此日霧かゝり咫尺を辨ぜず、初め五龍の南方に出でんとせるが方向を失し北方小鞍部に出づ、この上りに迷ひて却つて容易なりしを幸ひとす、尾根着凡午後三時半、將に天候險惡ならんとし急ぎ天幕を張る、普通ならば泊り得べき地點に非ず、果して風雨烈しくなる。

五日。朝に至るも止まず、正に暴風雨なり、正午の頃最も甚しく天幕の支柱屢々倒されんとす。

六日。午前三時頃風雨止み蒼天に星斗を見る、約四十時間目に陽光を拜し、火をたき食をとるを得たる也、午前中は乾燥と休息に費し午後より五龍に登り、南下して八峯手前の泊場に到る、午後四時頃、野營、東谷平らかに見ゆ。

七日。天氣晴朗、午前八時頃出發、八峯ギャップの頭まで辿り、少しく引返して普通縱走大迂回路の下端に下り、之より尙八峯の澤を下らんとして數丈の瀑布（水殆無）連續せるに出會ひ失敗、再び縱走路の下端に戻り、鹿島槍側密林の痩尾根を搦みつゝ下る往々草生の急斜にかゝれば地質脆弱甚だ危險を感ず、午後五時半頃漸くにして東谷最奥の河原に下るを得たり、凡一八四〇米の地、溪中野營。

八日。午前八時頃出發、東谷を下り、黒部本流に落合ふ所より七八丁上部に野營、此迄は先づ容易也、野營地の數丁下に古河測量隊の天幕發見、但無人也。

九日。測量の天幕より尙數町下れば谷は愈々深く狹く瀧は瀧に連り到底下るを得ず、左岸カラ澤を上り黒部本谷より凡四百米の高距に達し、之より徐々に下りつゝ急斜せる密林の山腹を歩く、相對する仙人山の崖物凄し、再三本流に下らんとして能はず、水面上凡五六十乃至百米の地をへつり進む、既に日暮に近くなれば萬一を案じて一のカラ澤を下り、尙本流を覗くに至らずして岩上に野營す、此澤にて最も盛に榾を使用す、水無し、夕立を集め辛じて二合を得たるのみ。

十日。早朝出發し一尾根を越ゆれば漸く水を得、朝食と休憩に時を費し午前十時頃に至る。之より益々谷に近きつゝ進むに一の切開を得たり、怪みつゝ下れば偶然本流の傍古河測量隊の野營地に到る、技師櫻井氏並人夫の一行亦大に驚嘆し余等一行を歡迎す、時に

午後二時頃、之より進むも良好なる野營地無かる可ければ、此處に一泊と決し天幕を張る、黒部の水は脚下に流る、右岸を傳ひ劒澤落合を見に行く、三窓の頭を仰ぎ、其壯觀言語に絶す。

十一日。櫻井氏一行祖母谷に下る、余等は午前八時頃劒澤落合の對岸より絶壁を攀ぢ凡二百米の高度を得るに數時間を費す、之より一旦棒小屋澤に下れば急流と瀑布身を沮み溯るべくも非ず、對岸の山腹をへつり復た危險を冒して澤に下る、溯行二三町にして復た行き詰り、止むを得ず少しく戻りて猫額大の砂地に天幕を張る、午後五時頃。

十二日。前日の失策に鑑み一旦南方なる岩小屋澤尾根に上り暫くして澤に下れば既に下廊下の範圍を脱して河原廣く平らかに渓水の徒渉容易也、午後四時頃持小屋澤上流二股の河原に達し最後の露營を張る、夜靴盃を上げ互に無事なりしを喜ぶ。

十三日。右股の澤を上りつめ棒小屋澤乗越より左下して扇澤を下り常道大町に歸る、大町着午後九時。

大武川より三峰川まで

柳直次郎

大正六年七月二十一日。再度甲州方面へと志して、例の夜行列車十一時二十分梅田驛發に乘込むべく驅着けると、偶然にも停車場で登山姿の朝輝記太留氏と、山口末次郎氏に邂逅する。兩氏は鹿島槍の方面へ登攀との事で、竹下英一氏や外に四五名の見送がある。私とは北と南との宗旨ちがいで、落着く先は異つてゐるが、獨旅と覺念してゐた私には、汽車中實に得易からぬ好侶伴であつた。

鹽尻驛で兩氏と別れて午後四時過豫定の如く日野春驛に着く。去年見馴れた驛頭には又一年振りの懐かしさがある。構外へ出ても豫期した柳澤からの迎の者が見えぬので、前の茶店で馬を僱つて貰つて荷物を托し、自分は徒歩で柳澤へと向ふ。途中は例の燒土の如き街道や、西日の射返す河原の中を、四時過ぎと云ふても日永の頃、鳴き盛る蟬の聲に追はれて、柳澤の小池屋へ着いたのは夫でも六

時を過ぎてゐた。店での話には春吉の子供等が、馬を連れて迎へに驛へ出てゐた筈だといふ。一方は田舍の子供の呑氣と、此方は氣が急いた爲め、雙方で氣が付かなかつたらしい。夫にしても餘り迂闊だつたと自から苦笑を禁じ得なかつた。小池屋には幸ひ主人も店に居たので、再會の挨拶もそこそこにして過般來の手紙で交渉した經過を聞き、又顏馴染の家內の心置きなき待遇も嬉しく、穢くろしい低い二階も舊知の心地して、導かるゝまゝに旅裝を解き、例の露天の据風呂に汗を流すと、早速野菜と鏘詰ものゝ夕飯をすまし、愈々明日からの日程を熟議する爲に春吉を呼寄せる。彼は昨今砂防工事の方へ行つて居たのであるが、健康が思はしくないので、歸宅休養中にて頗る意氣銷沈の體である。今度は到底もお供は出來まいと云ふ樣な心細い挨拶で、無理に強ゆるも氣の毒とは思つたが、他に適任者が無い爲め、折角の企圖を水泡にするも遺憾であるし、餘り無理をせぬ事として懇に賴んで見ると、春吉の末弟を差加へる事にして、兎も角兄弟同志で引請けて呉れたので一安心する。春吉には食料品の取纏を一任し、自分は荷物丈の整理をして、枕に就たのはもうかれこれ十一時過ぎ、低い窓から見ゆる四日程の月影の消えた後は、朧氣の山姿ながらも舊知に逢ふ懷かしさに、旅と云ふ事も忘れて、朝までは夢も見ぬ程に熟睡した。

大武川の赤薙澤まで

七月二十三日。柳澤を出離れて、大武川の右岸に沿ふた小徑に差懸つたのは午前六時頃で、行方の翠巒は黑戶續きの山々、見上ぐる奥は朝與から地藏邊りへ延く山脈の、いづれも波瀾重疊の形勢をなして、大武川への千谷萬谿をなしてゐる。自分等のこれから辿るべき深谷赤薙澤は、今の私にとつては大なる謎で、今日まで少しも參考となるべき記錄や跋涉談を見聞した事がない。唯春吉が先導すると云ふ丈である。樂みとも苦みとも、亦不安とも豫測し難い謎である。碧空は澄渡つて一片の雲もない。

大武川の河原には、昨夜知らぬ間に降つたらしい夕立の名殘を止めて、八千草に置く露は玉と輝く、岩間に咲く薄紅梅の河原撫子の可憐さ、遠い彼方の森蔭に高鳴く小鳥の聲、山へ行く身とは思へぬ程の靜的な情景である。

石空川の合流點を過ぎた頃には、もう河原の砂礫には日射しが照りつけて、徐々小暑くなつて來る。大薮温泉を左手の山裾に見て、大武川の本流を右に渡り、雜木交りの松林を通抜けると、本流の左岸を奥へ通ずる路がある。其路を少し許り行くと、大な岩を切割つた如き崖の下に出て、左へ橋を渡つて又河原へ下り立つと、右から大きな澤が落合つて來る。駒ヶ嶽方面から出る篠澤などがあり、是處で大武川の本流に落合ふが、今は左程水量も豐富てないから、極めて平凡で一向に落合らしい感がない。夫でも一朝大荒に際會したならば、其慓絶蓋し豫想外であらうと思はれる。

路は流を離れて暫くは山の根寄を通じ、次第に山間に吸込まれて、稍狹まりつゝある谷を左へ左へと進む。密叢の矮林は河岸を蔽ひ、本流は微かに水の音を洩らしてゐる。路は平坦な白砂に通じて歩み心地が至極良い、然しまだ山懷が廣く、日光を遮ぎる程に迫つてもゐず、又森林もないので、眞向にうける朝の日も中々に暑く、額に汗の滲むを覺ゆるけれども、別に文句を云ふ程の苦痛てはない。

春吉は先程河原で、砂防係りの役人らしいのに出遇つて、頻りに話合つてゐるので一足先きに來たが、待合せの爲め是處で一息する。日蔭の草原に仰臥して無心の碧空を眺めてゐると、次第に眠くなつて來る。其中大きな聲が聞えたので、フト氣が付いて見ると春吉が何時か歸て來て兄弟が話してゐる。自分はうとうと眠りかけてゐたので、其話の聲が耳に入つたらしい、何か砂防の役人に陳辨でも仕て來たのかと思ふと、素直な男丈に氣の毒な感じもする。

其處から二三町も行くと、谷は急に右折して小丘を抱いて二つに別れる。本流は右方の谷を奔下し

て、路は左方の礪落たる崩石の累斜面を可なり急な勾配で、小丘の頂上に通じてゐる。この雜木林の小丘は砂防工事の小屋のある所で、左方の谷は小丘の殆んど上まで續いて終點は左方の一小峯の尾根からの小瀑布に終つてゐる。小暗き雜木林を抜け、茂つた露の下草を踏分けて、本流の谷へ出抜けると、谿谷の趣が全然一變する。兩岸は著しく迫つて鬱葱たる樹林を裝ひ、溪水は激流奔湍の勢をなして、碧布の巨岩に白花を散してゐる。最早此處から河原の徒渉は絶望なので、春吉は眞先に右岸の一角を目懸けて、驀地に攀上つて往つたが、樣子如何にと踟躇する自分等を手招する、續いて進めば尾根の中腹へと出づる。其處には落葉堆高く、青苔露滑かな一路、微かに木下闇を通してゐる。一昂一低の足元危げに約一時間も辿れば、路はだらだらと河原に導かれたまゝ盡きてゐる。此邊から谷の姿は稍や穩になつて來た。暫く河原の右岸を傳つて往く裡に、何時しか谷の樣が明るく眩ゆい程に打開けて。廣々として河原となる。大武川の廣河原、それは自分等の假に呼んだ名稱であるが、場所に相應しい名稱だから其儘呼ぶことゝする。兩岸の山容水態極めて平凡て何等の奇趣もない、左方遙に鳳凰山の尖頭、摩天の勇姿がこの谷の威容を保つてゐる。

廣河原を約半時間位進むと、河原が急に低下し、對岸は著しく土砂が押出されて、上手へかけて小山の如く堆積してゐる。路は丸木橋によつて右岸より左岸に通じ、丸木橋の下は河床の最凹處で、幅約四五間位、水勢頗る急であるから、增水の時は通行危險な事は無論である。

對岸に渡つて川楊の涼しい下蔭で一息する。纔て此處を越ゆると廣河原は素の谿谷となり、漸次急峻の度を增して、自分は多く兩岸に除路を探つて前進する。其間の谷へは左方から山神の澤や二の澤と云ふのが落合つてゐるのだが、自分等は特に注意を惹かないで通過した。十一時過ぎには愈ゝ目差す赤薙澤の落合の下に行當つた。

此處は谷が袋の底の如くに、狹り來つた最後の行詰りて、兩岸は屏風の如く聳立して、鬱茂たる森

林が蓋ひ被つてゐる。右方は仙水峠から來る本流、左方正面は赤薙澤で、四五丈の飛瀑となつて岩壁を奔下してゐる。恰も關門を此處に構へて、其神秘を永久に知らしめじとするかの如くに、行手を塞いでゐるから、これから奥の形勢は無論豫測し得ないのである。右方本流は稍水量が少ない樣に見えるので、其下の岩壁に足懸を索めて、岩角裂皺を踏締めて、幾度も飛沫の洗禮を受け、魚貫の姿で辛くも瀑の一角に匍上つた。其處から見上ぐる右方の本流は非常な傾斜をなして、遙かの上から落下してゐるが、幸に此處でも水量が極く少ないので、左程の危險も感ぜずして通過した。水量の豐富な時は此處の通過は餘程注意を要すると思ふ。

赤薙澤の瀑の上を左岸に路がある。元來大武川は仙水峠から來る方が本流で仙水澤とも云つてゐるが、此處では赤薙澤の水量が遙に勝れてゐる。春吉の語る處によれば、本流は瀑が多いので通過は容易でない、けれども興味は言語に絶してゐるさうである。かの奇拔な名のヒョングリの瀑なども其一に數ふべきものであるが、今は瀑壺が淺く埋もれて、落下する水勢を反撥せしむる力がなく、最早舊時の奇趣を見る事は出來ないさうである。

さて赤薙澤の本舞臺は此處から初まる。一町許行くと左岸に岩小屋がある。岩壁の下が刳れて、五六人位は裕に容る事が出來るし、又附近に清洌なる岩清水が湧出してゐるから、一夜の宿營地としては至極良好の場所である。時計を見ると十一時過ぎ、それで岩小屋の前に焚火をして緩々と晝飯に取掛る、煙が岩壁を傳ふて立昇るのを眺めてゐるとうとうと眠くなる、春吉の掬んで來た清水を、試に口に含めば清冷まづ齒に滲んで、全身の汗が一時に引込んで仕舞ふ。

此岩小屋の上から澤を離れて早川尾根を登る路がある。さして峻路でもないとの事であるから、自分等のやうに赤薙澤から野呂川の廣河原へ出るよりも、早川尾根を迂廻する方が、餘程平易で危險と云ふ憂はなからうが、時間の經濟は果して何方が利益であるかは問題であらう。

晝飯を了つて煙草を喫まぬ春吉は、すぐ焚火の前を離れて出發の準備をする。左岸の山腹を縫ふて稍急峻な森林中に蟄進する、と早や赤薙澤の水聲は足下より聽ゆる。其處には路が微かに續いてゐる、然し行先は決して平穩ではない、崖崩れや押出しやらで、路は消えたりする。木の根草の葉に手懸り足溜を求めて、蟹の這ふ如く横樣に傳ゆくと、地盤は概ね柔い腐蝕土や、締りのない堆石の累積であるから、さらさらと音をたてゝ崩落つる。はつと思はず冷汗を流す事もある。又其先には二間許りも陷落した崖から崖へ、朽かけた丸木が二本並べて懸渡してあるのが、反て危險なので足を踏出せない樣な箇所もある。此樣な難場を導く春吉の苦勞は大抵ではないが、跡に引添ふてをづ〳〵進む自分等も餘り氣樂ではなかつた。然し踏まれた痕跡が明瞭にあるので、迷ふと云ふ憂は差當つてないと思ふので安心が出來る。一時間程も此狀態が續くと到頭路は澤の中へ消込んで仕舞つたが、幸に溪流が平穩であるから徒涉には差支ない。約一丁位は岩から岩へ、洲から淺瀨へと同じやうな事を繰返して行くうちに、右岸の崖へ攀ぢて山腹を通ずる一路へと出る。何分にも明るい河原から、幽鬱な森中へ突入するので全で闇夜を行く心地がする。一時は視覺を失つたかの如くに足許が危なかつた。然るに此木下闇の一路が、今度は急に明くなつたと思ふと、恐しき岩壁の一端で又路は消えてしまつた。覗いて見ると下は絶壁の高さ五間餘もあつて、此處で進路は斷ち切られてゐる。絶壁の眞下は白龍の如き奔流が、一條の虹を立てゝ唸つてゐる物凄さに、進退全く谷まるなどゝいふ洒落どころではない。赤薙澤の難場は此處からであると春吉は眞面目に脅す樣な口振を見せるので、夫は面白いと負惜みを云つても、心中には頗る慴えてゐるのを隱しおほすわけにはゆかぬ。春吉は荷物を下して岩角を物色し初めたが、絶對に危險でないと云ふ箇所は見當らないから、少しでも足懸りをたよりにして下る事にせねば、到底引返すより外に道はない。先づ春吉は蛙の如く岩角にへばり付いてずり下りながら、少しづゝ足場を作る事にして、第一歩を踏出すと二間程はわけなく滑り落ちて、危ふく岩角に踏み止ま

る。其下には立木の切倒されたのが、梯子の如くに寄掛けてあるのが見える、誰かゞ足懸りとしたものとも思はれるが、最近には無論通過したものがない筈であるから、餘程古くなつていゝ加減に腐蝕してゐるかも知れぬ恐もある。何分外に仕様がないから夫を手寄りにして、漸く春吉は下まで降り立つた、其次は自分の番である。春吉の足跡を辿りながら相變らず蛙の眞似をすると、今度は幸に滑り落ちもせず、無事に木の梯子まで這ひ付いて一息する。其立木の梯子を見ると、半ば朽ちてゐるらしく安心は出來ないが、全然是を手寄りにせぬとすれば下る譯にはゆかぬ。此様な時には身輕なものゝ一得で、辛くも無事に梯子下りの一藝がすむ。春吉の殘した荷物と、春吉の弟の荷物を繩で下して、最後に下つた春吉の弟が梯子の半頃まで來ると、果して上の細い部分が折れて了つた。然し皆が何等の怪我もなかつたので、やれやれと安堵の胸を撫でる。

今下つた處は上から見えた悽まじい奔流の稍上手で、澤が此處で二段となつてゐる。頭の上には岩壁の階段が連續して二間程の高さがあり、所々隙間から上段の溪流が奔下して、小瀑布をかけてゐるから是を越ゆるに又一苦勞である。早速左端の水量の少ない岸壁へ、例の折れ殘つた梯子を立寄せて、今度は下からこれを攀上るのであるが、距離が短かいから二三度水の洗禮を受けたのみで、難なく岩階の上に出る。此處で更にあつと許り驚愕の目を見張つて立竦んだ、それは第二の大瀑布に行き當つたからである。正面の大瀑布は即ち赤薙澤の本流で、左から來る澤は鳳凰下邊りから源を發するらしいが、春吉も名を知らないと云ふ、見上ぐるばかり急峻な傾斜をなしてゐる。此場の光景は恰も瓶を二つに割つて立てた如き大削壁が、抱圍の狀態で前途を遮斷してゐる。左方は今辿り來つた木下路に續く岩壁の一部で、鬱蒼たる針葉樹の大森林が鳳凰下から來る今の無名の澤に接續して、正面の削壁が其澤の左岸迄延び來つてゐるから、此方面からは到底登るべき見込はない。正面の瀑から右方へは是も削壁の一部が手を擴げたる如くに聳立してゐるから、何れの方面からするも登攀不可能を思は

しめる。唯右方の岩壁が稍薙の如き斜面を見せて、今自分等の立てゐる岩階の處まで來て少し氣勢を緩めてゐる。然し削壁の上部は密林が蔽ひ被さつて、路は果して何邊に通じてゐるか分明でない。春吉は此岩壁を登つて正面瀑の上へ出るのだと云ふが、岩階から其岩壁の斜面までは彼是七八尺位の岩襖で、なか〳〵容易に取付けさうにもない。又例の梯子を引上げて、辛くも岩襖の下方の少し平坦な處まで這上る。夫れからは三人共殆ど四這の姿を笑ふ餘裕もない程の緊張氣味で、岩皺に鎚つて十數間もある急斜面を上部の林中目懸けて突入する。春吉は此澤第一の難場なりと云つたが、今登りきつた上方から覗ふと實際目が眩みさうである。荷を下して一息した。路は林中を通じて瀑の上を廻ることになるので、全て瓶の縁を傳ふ感じがする。隨つて足の裏の縺ばゆさを覺えつゝも無我夢中に進んで、本流の手前の小さい淵澤の落口まで行く、此處は例の削壁の絶點で、此處を越せばもなし崖路でも危險と云ふ箇處はない。

大武川の本流仙水澤は、水量は赤薙澤に及ばん樣に思はれるが險峻の度に於て勝つてゐる。勿論自分は仙水澤を通過した經驗がないので、確としたことは云へないが、春吉の言によつても尙又仙水澤の合流點から見た形勢から推しても斷定は出來ると思ふ。然し赤薙澤の方へは獵師を除いて、奥まで入つたものは稀有との事であるから、確實な記錄もないやうに思ふ。尤も踏んだ路らしい跡は隨處に殘つてゐるから、獵師ばかり通過したものとも斷定は出來ぬ。適當の案內者があれば一度は通過する價値はあると思ふ、唯水量の多い時は所々に瀑が多いから、澤と崖路の接續點を見出す事が聊か困難と推量する。

時計を見れば午後二時少し過ぎてゐる。本澤の合流點から約二時間を費してゐるのを見ると、かなり暇どつた譯だが、これは比較的困難な箇所が多かつたせいであらう。此處を出抜けると又河原へ降り立つ。傾斜は稍緩く山懷は少し寬になつて、澤の徒涉も格別困難を感ぜず足取も樂に、一時間程で

袋澤の落合へ出た。此處で澤が二つに分れて眞上より來るのが袋澤、春吉は奥澤と云ふてゐた。右から來るのは奥澤より少し小さいやうに見えるが、是が本澤であると云ふた樣に記憶してゐる。自然の形勢からは奥澤は廣くもあり、大分奥行も深くゴーロ澤の頭の背面位まで入つてゐると思はれるし、赤薙の本谷と見て差支ない樣にもある。然し右方は頗る急峻で、磊砢たる巨岩に小飛瀑を懸けて水量も頗る豐富である。此澤の奥は野呂川の廣河原乘越の背面、早川尾根の頭から接續する山脈の鞍部まで食入つてゐる。

此合流點から自分等は廣河原の乘越へ出て、野呂川へ下る豫定なのである。これから尾根へ登れば水を得る便宜がないので、時間は未だ四時位なもので大分早いが此處で露營と決し、先づ右方本澤の入口に懸る瀑を除けて、左方の支脈を少し登つて瀑の上へ出て、澤を一町程上つて左岸の岩蔭に恰好の場所を求め得て一休の後に、石を取除けたり土を均したりして岩小屋を造くる。炊事にかゝるまでに茶を煮たり菓子を出したりして、今日の經過を何れとなく語り合ふ。

赤薙澤より大樺池まで

二十四日。午前六時半に結束して出發。澤を左へ渡つて昨日の支脈へ取つき、雜木の密生した中を出抜けると直ぐ急峻な登りとなる。朝涼に引緊つた心持で遮二無二押上らんと苛つて見ても、傾斜は次第に度を增して來るので一向に捗取らぬ。反つて汗が際限なく流れる。今日の行程は別に急ぐ程でもないので、遂には良い氣になつて初の氣勢にも似ず數々息を入れる。針葉樹の生茂つた日影も漏れぬやうな林中で、途と云ふてはないから足場の良い處を選んでは登る。見晴らしもなにもなく唯赤薙澤の水聲の次第に遠くなるのを聽きながら、約二時間ばかりも費して尾根らしい處へ出る。赤薙の頭までは登らずに今度は左方へ搦んで行くと、栂や檜の矮林に雜木が交つた恐しく歩きにくい茂みへ入込

む。前面の稍平かな尾根へと突進するまでは、全て偃松の中を游ぐ様で一町足らずの間を、縺れ廻つた揚句に漸く目差す尾根へ出る。其處が意外にも廣河原の乘越て、出て見れば何んだか今更馬鹿にせられた様な氣がする。然し出發してからは殆んど三時間もかゝつてゐるから、今乘越へ來たからとて別に不思議もない、是で自分が計畫した赤薙澤探見の一幕が終つた事になる。

廣河原の乘越は、早川尾根の頭からゴーロ澤の頭へ通ずる尾根の低下した處で、野呂川から大武川の赤薙澤へ乘越す唯一の通路に當つてゐる。春吉の語る所では今は通行する者は無論ないし、案内者も道筋を心得たものはないと云つても良い位であるといふ。自分は試に此處を選んで見た。柳澤から駒岳を越えずに北岳へ登山する者は、一度は通つて見ても良い處である。

毛氈の如き柔い青草が一面に生茂つて休み心地が良い、樹立を透せば眞正面は北岳の雄姿が目覺むるばかりに聳立してゐる。少し右寄りには仙丈岳の巨頭が見えるし、暗い様な木立の中から出て來た自分は、まのあたりの風物が全で一變した感じもする。けれども德本峠から穗高を望んだ程の豪壯な心地になれないのは少し物足らぬが、樹の間を透して暑からぬ程に照す天日を浴びて、そよ吹く軟風を青草の衾に飽まで貪つて、際涯なき蒼空を仰ぎながらも眼前に蜿蜒と續く大山脈に目を移すと、魂は飄々と羽化し去つて、一切の煩惱は何時しか離脫して仕まふ。良い氣持だなどゝ思つてゐる裡に、うつ〳〵眠つて呼起されても知らずにゐた。

前途遼遠なりいざ出發と重い腰を上げて、廣河原を目差して慕地に馳せ下る。勾配は可なり急峻なので足の運びは速いが、生茂つた針葉樹林に朽木が縱橫に倒れてゐるし、其下に青苔を帶びて滑かな岩角が其處にも此處にもある。幾度か倒れ木を乘越し又岩角に滑つては嫌と云ふ程尻餅をつく、何分にも今朝から三時間以上も費し、勢力を傾倒し盡して登り來つたものを、約壹時間半位で廣河原へ馳下つたのだから、尻餅位は我慢せずばなるまいと諦める。まだ河原に下りつかぬ少し上の方に焚火の

跡がある。なんとなく可懐しい。此處から廣河原まで二町許りもあらう、野呂川の奔流は音ばかり聽えて姿はまだ目に入らぬ。

野呂川へ出たのは十時過ぎてある。廣い河原を川に沿ふて大樺澤の方へ下る少し手前の對岸に小屋が見える。去年は此邊に小屋らしいものゝ影もなかつたので、なほ遙か下流の鐵砲の跡で一夜を明した。春吉の弟の談によると本月の初め頃に、外國人が二人程と案内者が滯留してゐたのを見たと云ふから小屋は多分其時に出來たものであるらしく、北岳登山者には誠に結構なる賜物である。此小屋を對岸に見て稍下流に大きな木を切倒して、枝も其儘に流れに架渡して橋が出來てゐる。是も誰かの殘した恩惠の一つで、今の自分等には世界最新式の鐵橋などよりも、遙に有意義で慥に實際的であると思つた。是を渡つて河原を少し下れば此處にも小屋の跡がある。もう廢頽して夏草が丈を沒するばかりに生茂つて、容易に足も踏入れ難く見える。此處を通過すれば大樺澤の落口で、本年は谷間に殘雪が多い爲か、落口は奔騰の勢凄じく滔々と鳴轟いてゐる。

まだ十一時を過ぎてはゐないが此處で晝食をとる。手に掬へば指も墜つる如く冷たい雪融の水に咽喉を鳴らして、小兒の頭ほどもある握飯を噛る。今日少し疲勞したせいかどうも食慾がないので、半分ばかり漸くにして平げる。然し澤の水に冷して置いた林檎が、何んとも云へぬ美味なので是は心も殘さず噛る。上から照る日射はもうなかなか暑いが、澤を渡つて來る風は冷たい程涼しいので、落着いた腰は急に上らない。誰かゞ其裡に出發すると云ふだらうといゝ氣になつてゐると、正直な春吉はあまり遲くならん中に出懸ませうと先づ立上つたので、自分もいさぎよく尻を上げる。

大樺澤の落口を岩間傳ひに少し上手に溯つて、今度は水聲を左に澤を離れて、朽ちかゝつた危き丸木橋を渡ると、雜木やら根曲り竹の密生した藪がある。其處を出抜けると直ぐに磧の如き稍平坦な處で、路は左方に通つて暫く行くと深林帶となる。更に右方に引込れて傾斜の度が增して來る處を、夫

からは左へ右へ木立の裡に殘る足跡を探つて約三十分程上ると、左方に廢朽した神社の建物が殘つてゐる。是は名取氏の白峰神社建立の跡で、路は此邊から頗る急峻となつて一歩に一喘、重い足はなかなか捗取らぬ。腰を下して憩ふと立つのが嫌になるから、全で蟲の這ふよりもなほ遲く、而し春吉は一本も立てぬから休まず追ふて行く。夫でも小一時間も登り詰れば稍平坦な切開いた處に出る。其處は雨乞平とか云ふて材木を運び出したサデの跡が殘つてゐる處で、路は此處で消えてゐるから少からず間誤つく、先づ一休して春吉は其邊の樣子を見に行く。暫くしてこのサデを渡つて行けば其終點から路は續いてゐる由を見きはめて來たので安心する。サデは可なり長く續いて其上を歩んでも危險のない程に殘存し、其終點から山腹を右へと路は立派に拓けてゐる。右へ搦んだ稍平坦な小路は蛇の如く紆つて何處までも續く、一時間餘も進んだと思ふ頃に、一の小澤が右手から流れて大樺澤へ落ちてゐる。大樺澤の落口を離れてから此處までは水を得る便宜がないので、乾涸びた咽喉を濕して又も前途を急ぐ、夫から大樺池の畔へ出たのは約三十分程も過ぎてゐた。

今迄の森林帶を出離れると、夏草の一面に生茂つた平原が其處に展開して來る。左は谷に面した絶壁で、上は岳樺が區切よく生連つてゐるし、右は尾根の方へ稍延びて、大樺池は其の叢の中にある。周圍一町にも足らぬ小池で、水の色も濁つてうす汚く、何等神秘的の感も起らぬ、北アルプスに見る双六池の如き懷かしみは更にない、實際平凡至極のものであるが、夫でも何等か信仰的な由來でもあるのか、周圍の木に紙幣などが結付けられてある。

まだ午後三十分で大分早いが、豫定の宿營地でもあり、折柄北岳の頂上を右へ外れて一抹の夕立雲が次第に眞上に擴がつて、雷は雷鳴さへ遠く近くに轟き、何となく形勢頗る不穩なので、一刻も早く宿營の準備を要するから、春吉は池の手前の大樹の下に小屋掛をする。附近には野營の跡もある平坦な草付の處で、宿營地としては絶好の場所である。直ぐ下に水もあり、南西北の三方は風をふさぎ、

多人數の團體でも決して都合の悪い處ではない。

近づくと思つた夕立も他方へ外れたし、雷鳴も遠くから威嚇するのみて、其裡に小屋も出來て荷物を運び入れたり、汗の下衣や窮屈な洋服をネルの單衣に被替へて、悠々と焚火の前に車座となり、茶を煮たり汁粉を作つたりする。暮靄の立罩むる頃には夕飯も終つて、山々は次第に太古の如き靜寂さとなり、空には雲間もる星の影さへ二三ッ見え初めて來た。自分等は明日の行程を談じながら、焚火の燃さかる蔭にそろそろ寢仕度をする。

北岳より大横川の源頭まで

二十五日の曉天は昨夜に引きかへて朗らかに晴れ亘つてゐる。午前六時半には早や出發の用意が調つて、春吉は名殘の茶を啜つてゐる。露繁き夏草の生茂つた中を掻き分けて行くと、裾の方は雨にても逢つた樣にびつしよりと濕る。池の周圍を廻つて右方の急斜面を眞向に登る。柔い青草に埋もれた路の底には鋭い岩角が顯はれてゐるので、足の指を打つけたりして惱されるのみてなく、傾斜が急な上に頗る歩きにくい。夫でも正面に見える大岩の根までは一氣に攀ぢ登つて一息入れる。朝涼にも關らず汗ばんで呼吸も多少はずむで來た。岩を左へ廻つて岳樺の密生した樹帶に沿ふて、漸次に右上を望んで進むと急峻の度は一層增して來る。樹帶を出抜ける頃から背後より照りつける日射が强烈になつて、夫を避ける蔭が全くないから、燒けつく樣に熱い。然し足許を見ると美しい高山植物が、黄紫紅白、とりどりに咲亂れてまだ乾ぬ朝露の濡色を其儘に、日光に輝いてゐる。夫を踏みつけて行くのはいかにも殘虐な氣もするが、是をよけて進む程の餘裕がない。黑百合の花を一つ手折つて胸にとさす、自分は此花の魔性めかしき色が、山の神秘を語つてゐる如くに思はれて好きてある。漸く右上の偃松の蔭へ辿り着くまでには可なりの苦痛を覺えさせられた。其處て荷を卸して緩くり腰を据ゑる。

何處ともなく一陣の凉風が偃松を亘つて來るので、ほてつた汗の顔には快く感ずる。今迄は餘處を顧みる餘裕もなかつたが、此處に休んで初めて北正面に鳳凰山脈一帶の大觀が目に入る。ことに其賽の河原邊りの白砂が雪の如く眩ゆく見える。野呂川の溪谷を中心として白峯山脈と地藏一帶の山脈との對立は、黒部川を挾んでゐる北アルプス程の偉觀は見出し得ない事を遺憾とする。

偃松帶を右に見て少し登ると北岳頂上への尾根へ出るのである。此邊は廣闊なる高原狀をなして、所謂お花畠とても云ひさうな處である。左上を指して登れば低い偃松が波の如く連つてゐるが、切開けがあるから極めて容易に尾根の上へ出る。是からが絶頂への上りとなるので、しかも絶頂は直ぐ鼻の先に見えてゐるから足の進みも自づと早くなる。今朝の天氣が又一變しだして來た、氣がゝりの夕立雲が頻繁に徂徠するし、時々遠雷の音も聞ゆる。降込られては一大事と一向に前途を急ぐ、九時には難なく頂上小祠の前に立つた。曇つた空には期待した展望も得られず、僅に駒岳の雄姿が隱見してゐるのみである。空模樣が氣になるので腰を据える間もなく出發する。北岳の頂上は實際平凡であると罵る。

北岳から間岳への山稜が長く續いてゐるが、其先は天梯の如くに蜿蜒たる登りとなつて間岳の頂上まで延いてゐる。愈々北岳南の逆落的の傾斜面へ第一歩を着けると、足の下から墜石が音を立てゝなだれて行く、それを踏〻ながら眞一文字に馳下る。滑る、尻餅をつくと散々の體で、それでも三人は別に怪我もなく鞍部まで降着いて一息する。是からは例の急峻な天梯を登るので、聊か悄氣ざるを得ないが、奮勵一番、疲れ果てた膝栗毛に鞭を加へて登る。荒川の右俣左俣あたりの尾根を過ぎて、今一息と前途を見渡しても、間岳の頂上はそれとも見え分らぬ程に山稜が延びてゐる。時は恰度十一時、疲れのせいで空腹なのか、空腹でないのか自分でも解らぬ。然し春吉等は晝食するので、自分も相伴をするが、例の偉大なる握飯は半分以上も殘る。北岳から約二時間を費

してまだ間岳へは登り着かない、春吉は仙丈から尾根通を鹽見へは往つたが、間岳から其尾根通りへ出るのは、今度初めてゞあるから、今夜の宿營地は未だ見當がついてゐない。何は兎もあれ間岳までは早く到達する必要があるので、特別急行で驀進する事に協議する。殊に是からは一滴の水を得る處もないからと、春吉の弟を尾根の左方に見ゆる雪田まで雪を取りに遣つて、桐油紙に包んで是を背負つて行く事にする。岩階の如き尾根を縫ふて躍進を初める。漸く四五町も來たと思ふ頃、間岳の頂上邊りに一朶の黒雲が立ち舞ふと見る間に、雷鳴轟き銀線の如き雨がさつと注ぎ落つる。一瞬は一瞬より猛烈となりまさるので、三人は眞近き岩蔭目懸けて馳上り、目白押の如くに居竦まつて、莫蓙合羽など手近のものを頭から被つて、申合せたかの様に怨めしげに空を見上げる。霹靂の音は次第に近づき來つて、降りしきる雨脚に氣勢を添へ、岩を傳ふ雨滴は隙間を浸して、頭から襟に、襟から背へと流れ込む。今度は雨が霙と變じて礫の如く、目と云はず鼻と云はず面を叩く、瞬時の變化は驚くべき氣象の降下となつて、奇寒ひしと身に迫つて戰慄が止らぬ。春吉等は最早堪りかねて、降頻る中に胴着などを取出して重ね着をする。一時間程を不安な恐慌の裡に過すと、雷鳴も次第に遠ざかり、雨も小歇みとなつたので、漸く岩陰を匍ひ出して身仕度を調へる。今の霙は新雪の様に降溜つて、其邊は白銀の世界となつてゐる。頂上近くカール形の凹地に來た頃には、雷も聞えず雨も名殘なく晴れてはゐたが、濃霧が襲來して農鳥への尾根も、仙丈荒川は勿論間岳から分脈する尾根さへ見分られぬ。寒さに咽喉の渇きなどは疾くの昔に忘れてゐるのみならず、此處の窪地には多量の殘雪もある。重いのに御苦勞様にも背負つて來た雪を今更捨場もない始末で、稀に氣をきかせると此様なぶまをする。遮二無二絶頂へ辿り着いたのは午後一時半過。此處は三方から來る尾根の集中點で、南は遙に農鳥の長大なる尾根が天際に連亙してゐるし、北は今通つて來た北岳への尾根續き、西が今自分等の目指す尾根であるが、其尾根が又二分してゐる様で、何方が正當のものか其先の連續點が霧のために判明しな

い。

最初は農鳥の雄姿さへ見分け得ぬ程の濃霧で、尾根の形勢などは無論分る筈がない、可なりに迷つた擧句霧の切れ間から西の左の尾根は、其先が谷に落ち込んでゐる短かい尾根である事や、其右方の尾根を慥と見定める迄には大分時間を徒費した。

初の程は頗る平凡な尾根と見くびつて往くと、突然霧の晴間に大きな岩山が現れて來る。一見越られさうにも思はれないので、三人は顔を見合せて佇立してゐたが、今度は霧が次第に薄らいで雨となつて來たので、前途は爲に明るくなつて見定がきく樣になる。此岩山は其上を通過する事の出來ないだけは判明したので、左方の谷へ少し下つて通路を見出すべく春吉を先に岩稜を傳ひ初める。巨大な岩壁が先から先へと續いてゐるので、今度は後へ戻つて大廻りをなし、短い偃松の間から谷へ下つて更に岩稜を物色して登り初める。其中に雨は强く降つて來たので又岩陰へ逃込む。幸ひ十分許りで小歇みとなつたので、其處から十間許りも岩稜を上下し、岩山の中腹を右へ捲んで、丈の短い偃松の急斜地へ入ると、雨が又氣勢を增して來る。偃松の中を濡れながら滑つてゆく樣な處で、足掛りの惡い嶮岨は左から足を出せば右の足が出し得ない樣な處もある。夫でも時間にすれば二十分程で此岩山の中腹を廻り終はつた。今度は是迄の嶮惡を忘れたかの如き平穩な尾根が左へ續いてゐる。

此尾根は恰度高原の如く展開してゐて、偃松の波が遠くまで續いてゐるのが見える。下は小さな岩片の堆積した所や、さらさらした砂地で、高山植物の花が點々咲いてゐる。雨は上つて霧が全く晴れると、農鳥の雄姿が目醒る許りに現れて來る。何と云ふ立派な尾根だらう、恐らく北アルプスでも是程長大な尾根は見出し得ないと思ふ。暫く休んで見てゐると一番上から二つ目の隆起點邊から、黑い豆程の物が三つ許り動き出すのが見える。動く動かぬと三人が押問答しながら、なほ克く凝視してゐると果して動く、今度は三人が聲を合せ帽子を打振つて呶鳴ると、山彦かあらぬか聲が聞えて來る。時

は最早三時過ぎであるから、其動くのが若し降る人とすれば到底間の岳までは行き得ないて、何れ尾根の何處かで露宿するのであらう、この天氣では大に困るだらうと同情し、又降り出さぬ裡にと出發する。

此方の下りもなかなか長い、假松の切開に連られて次第に低下して往くと、大横川方面の絶壁の上に出る。右方は恐ろしく薙落ちてゐるが、其薙の上を假松に縋りながら辛くも通る。しかし切株が縦横に交錯して足を引きかけたり跳飛したりするので、可なり歩き惡い。假松が盡きて路は岳樺の林中を通じて左へ續く。小歇になつたと思つた雨がしとしと降出して來た、岳樺を出抜けると柔い草付の斜面で眞一文字の下りとなつてゐる。雨にぬれた路は足場が惡く、春吉が先頭で轉げると、後に續く二人も申合せた様に滑り轉げる。生茂つた草の丈は高く、下半身は濡れに濡れて滴が垂れさう、足は千鈞の重りを付けた如く、疲勞困頓全く物を云ふのも嫌な位であつた。此處を過ぎると馬の背のやうな處へ出る。時計を見れば五時を過ぎてゐる。雨と疲勞でもう前進を續ける勇氣もない、誰が云ひ出すともなく野營地の物色を初める。此邊は澤が見えても水が遠い、今少し水の便利のよい處でないと困るので、春吉は頻りに其邊を見廻してゐたが、前面の尾根の中腹に小屋らしい跡があるのを見つけ出したので、弟を探見に遣る間を立ちながら休憩する。雨は又小歇となつて來たが、濡れてゐる身體はぞくぞく寒さが襲つて小顫する。

春吉は焚火をしやうと努力するがなか〳〵燃つきさうにもない、其中に奇異なる蟲合戰を見出したので大に興味を催す。蚯蚓を追かくる蟲の形體が是迄あまり見た事のないもので、形は大きな口を付けたる蚯蚓に似てゐる、色は黒味が勝つてゐて環狀理紋がない。逃げやうとする蚯蚓を其口ばかりの様な蟲が追廻してゆき、所きらはず其大きな口を以て吸ひ付き、一呑に嚥下せんとするが、獲物が餘り大きいから自由にならんので、其鬪爭の有様が非常に滑稽に見える。二人は不思議なものを見付け

たといふ顔をして見詰めてゐると、其處へ弟が適當な場處があると報告に來たので立上る。專門の學者には大に研究の價値のあるものかも知れぬ。

馬の背を越ゆれば所謂三國岳から安部荒倉へ續く尾根の鞍部である。濡れた草の裡を左へ二町許り上つた所に果して小屋の跡がある。然し小屋は柱ばかりを殘して崩壞してゐるから、其儘では使用出來ないが、直ぐ附近に清水が湧出してゐるから宿營には好適地である。春吉兄弟は荷を卸すと直ぐ小屋の修理に取掛る。天幕を携帶しない爲に行先て此樣な厄介な手數を要するのであるが、實際彼等は親切で勞を吝まぬ點は、ある處で見る大先達連が眞似も出來ない美點で感服の外はない。兩人は暫くの間上手から木を運んだり、小屋の殘骸を拾集めたり、これに絡まる針金を丹念に解かしたりして、稍完全に近い小屋を構へて、剝いだ木の皮で急造屋根や床が出來る。其裡に火は盛に燃えてくる、銘々が濡れた衣類を周圍に吊しかけ、三人は一先づ其小屋へ轉込んで疲れきつた身體を横たへた。さすがに執念深かつた雨も名殘なく晴れたらしく、農鳥の上あたりには星の影が一つ二つ輝き初めて、四邊は徐々に夜の世界となつた。今夜は飯の出來も非常に良く、鑵詰の牛肉を叩き込んだ味噌汁の味も良い、豆の鑵詰も出して見たが、空腹には何れも太牢の味を思はしめる。搖らめく蠟燭の火影に寐轉びながら、今日の出來事や去年春吉と仙丈へ往つた追懷談なども出て、語り盡きぬ裡に何時かは睡魔の手に導かれて寢入つて仕まつた。半夜燒火の側へ延した足先が、あまり熱いので夢を驚かした外には、何も知らずに曉方まで熟睡した。

安倍荒倉より南荒川まで

二十六日。午前六時三十分出發。朝の天氣は申分ないが、毎日の日和癖て午後には屹度夕立に出遇ふ。夫が必ず其日の難場て出遇ふやうな嫌な廻合せになる。今日は安倍荒倉から鹽見岳を越えて南荒

間ノ岳北方の高所より北望（右は白峰北岳　左は甲斐駒ケ岳）　　淺井東一氏撮影

川まで出る豫定であるが、工合良く行けば三峰川の出合の小屋で寢る事が出來るかも知れぬと、獲らぬ狸の皮算用で、前途を樂觀して仕度が調ふと直ぐ出發する。小屋から尾根へ通ずる小徑があるので、右手に搦んで密林の中を何處までも行く。今考へると先きの小屋の跡は、測量部の人が永く宿泊してゐたものであらうと思はれる。頽廢してはゐたが便所などの設備の跡もあつたし、又今歩んで居る樣な路も小屋から續いてゐる。是から尾根の上の國境線の切開けまでは迷はずに出られる。恰度尾根の上へ登り着いた處は、地圖に二六九二米とある安倍荒倉の北方で、左は偃松が生茂り、右方の北荒川の谷は物凄い程に薙落ちてゐる。路は其薙と偃松の接續點にあるので、僅に偃松の根によつて繋ぎ止められてゐる樣な危難な處もある。此邊に立つて右手を見ると木曾駒の雄姿や、遙のスカイラインに御嶽から乘鞍岳らしいのが漂渺として浮ぶが如く現れて、殊に御嶽は雪の輝きに銀色を見せてゐる。北アルプスの連峰は全く影を見せない、間近の白峰一帶も霧の間に隱見して何れも全幅を現さない、唯だ農鳥だけは一大城壁の如く、蜿蜒として天際に續いてゐる。路は一昂一低で殆んど等高線をゆく樣な氣がする。安倍荒倉は氣が付かずに過ぎて仕舞つた。

偃松の切開や小森林が續いて、路は重に偃松の中を通つてゆく。東俣の谷は何處までも左手に見えて、二六六七米突とある邊の東俣へ大薙のある處で路が消えてゐる。上へ廻れば偃松が生茂つてゐるから薙の緣を搦んで向へ渡る。此邊で東俣が脚下に廣河原の如く見えてゐるが、それから末も次第に廣大になつてゐる樣である。北荒川岳(伊那荒倉)の上りになる餘程手前から尾根は低下して、偃松が姿を隱すと深い林になる。何んても確かと場所の記憶はないが、北荒川から此尾根へ登り得る路があるらしい、其處には露營した跡があつて、大井川の東俣へ乘越したらしい形跡も見えた、露營の跡には味噌を入れたらしい小桶や鑵詰の空鑵が殘つてゐた、或は鹽見岳北荒川岳から仙丈岳あたりへ縱走したものかも知れぬが、自分等より先に其處を通過したものがある。北荒川岳は此方から見ると、背

面を偃松に蔽はれてなだらかに東俣へ延びてゐる。路は偃松の中の切明に通じて、二六九七米の三角點より南へ出るので、三角點は知らずに通り過ぎ、慘酷な程に刳取られた絶壁の線に沿ふて暫く行く中に何時しか曇つた空は又雨催ひとなつて、はらはらと降つて來たが、終に沛然たる驟雨となつて勢猛烈に降り頻つたが、幸ひ雷鳴を聞かないから濡れながら悠々として登る。

北荒川岳の南方の隆起へ登り着いたのは十時過ぎて、この登りだけで慥に三十分以上は費してゐる。頂上は割合に平凡であつた。少時休憩して直ぐ出發する。

此處から鹽見嶽へは、恰度北岳から間岳へ連接する山稜を稍小規模にした様なもので、急峻なリッヂが長く續いてゐる。北荒川岳を越えた處から右手の南荒川の谷へ降り得るが、なかなか難路であるらしい。鹽見嶽への登りにかゝる頃には雨は全く晴れて、可なり熱い程の日が照りつけてゐた。蝙蝠岳へ通ずる嶮峻なリッヂを越えて、其結合點を過ぎてから東南を顧ると、蝙蝠岳は一大城壁の如く連亘して、大井川の東俣と西俣の中間へ突出してゐる。其處から少し登ると鹽見嶽の東峰に達するが、此處には三角標石はなく標杭が立てゝあつた、其乾割れた間に名刺が一葉挾んである、慶應義塾の山岳會の人のものであつた、自分も同様に名刺を殘して直ぐ西に見える本峰へ向ふ。七八分位で到達したと記憶してゐるが、それでも其間は一たん低下して更に登りとなつてゐる。頂上の三角點へ着いたのは十二時少し前で、北荒川岳の南の隆起からは彼是一時間半以上を費した譯だ。此處からも亦尾根が分岐して大井川西俣の中俣と北俣の間へ突出してゐる。今自分等は三千五十米突近い頂上に立てゐるが、今日迄に北岳の三千百九十二米突を手初めとして、間岳の三千百八十九米突と都合三千米突以上の三峰を上下する事になる。自分等は別に專門的に研究する科學の知識もないから、畢竟するにピーク、ハンターで滿足すれば良いのである。雨は名殘なく晴れてはゐるが、期待した赤石方面の展望が雲のために全くない、唯大井川と荒川の谿谷が、深い木立の裡に隱見して居るばかりである。

三角點の附近で晝食を執る。風は少々寒いが日當りがいゝのでゆつくりと寛ろぐ。標石の傍には石を載せた空鑵に名刺が例によつて詰込んである。今は一々記憶に存してゐないが、最近のものでは二三日前に通過されて北岳へ向ふと書いてあつたのを見た。

一時過ぎ迄も休んでゐたけれども、遠方の雲は晴れないので出發する。今度は鹽見嶽の南面の中俣へ面した尾根の一端で、垂直に見ゆる樣な懸崖を傳ふて下る事にする。この鹽見嶽から本谷山へ續く尾根は、此處で斷絶する如き形勢で決裂して、其底が前面の岩山に續いてゐる。それで此處を下るには中俣への尾根を偃松の裡へ出るか、今自分等が企てゝ居る其懸崖を無理に降るか、何れにするも前面に見ゆる岩山に到達せねばならぬのである。

急峻な傾斜の上に足掛りの堆石がざらざらと崩れ落つるので、一再ならず膽を冷しながらずり降りる。其底まで降り着いて見上ぐると、二十間位も屹立した絶壁で、よく怪我なしに通過し得た事を祝福する。それから其底部を右へ廻つて見上げるとこれは又上部が出張つて底部に至る程凹んでゐるから、登るも降るも全て手寄りがない、今自分等の通過した處も降るには半ずり落ちて、怪我のない樣にと注意すれば好い譯であるが、到底登るには足掛りが惡いから無理であらうとも思はれる。皆揃つて岩山へ續く尾根まで出て一息する。直ぐ下の岩に雷鳥が一羽ゐた、追ふと逃げるが暫くすると又同じ元の處へ戻つて來る。何でも其邊に巢があるに違いないと探して見たが容易に見當らないので中止する。

二時過ぎまで遊ぶ、少し緩りし過ぎた樣で前途が氣遣はれぬでもない、前面の岩山に取付く爲に背面の丈の低い偃松に縋つて岩稜を傳ふ。偃松を出抜れば直ぐ岩山の上へ出る。それからの下りは別に危險はない、先年山岳誌上で武田先生と梅澤先生が霧のために此處で困られた事を拜見した樣に思ふが、霧でもあれば鹽見嶽への登り口や、又北荒川岳へのリッヂは非常に困難を感ぜられたであらうと推察するのである。自分等は岩山の頂點まで出て、それから岩稜を傳ふて降り、幾處か偃松に縋つた

りして足を運ぶ様な處もあつたが、注意して通れば別に危險な箇所はない。其處を通過すれば傾斜の度が稍緩くなつて、偃松が一面に擴がつてくる。所々に切開けがあるから左程困難でもないが、時には腰位まで沒す様な處もある。難なく其處を降りきつて、稍平坦な尾根て一息する。都合ては本谷山から大黒澤へ出やうと云ふ計畫もしたが、到底今から其様な時間はあるまいし、それに例の夕立雲が又立騒いて來たので、手近の南荒川の奥澤へ降る事にして出發する。

鹽見嶽からの降りがすむと偃松の小さい平の尾根が、前面の二六七〇米突の邊迄續いて居る。自分は直ぐ右の方へきれて路らしい跡を辿つて、急斜な白樺の林中へ突入する。何分にも下は草深く岩滑かで歩き惡い、其上に木の枝に引懸つたり撥ね飛されたりして、一間位は譯もなく轉落する。今度は左手へ空澤が見えたのでこれが樂だらうと取ついて見ると、これも中々急峻て緊りのない足許の石は、踏むにつれて崩れ落ちるので頗る危險である。又元の林中へ逆戻りをして行詰つた邊から、今度は右手に水音がするので其澤へ出ると、比較的傾斜が緩いのでそれを降る事にする。然し奥澤へ出る邊りから岩が大きくなり、水量が增して頗る艱むだ。其裡に先の夕立雲が蔽ひ被さつて來て銀線の如き雨が、音を立てゝ降り注ぐので、岩と云ふ岩は足溜もなく滑るから、奥澤の下りて二度ばかり倒れる。奥澤から眞上に鹽見嶽が見えるが其處は急峻な薙となつてゐる。奥澤にはまだ雪が殘つてゐて、右岸に幅二間程の廣さで一町許りも續いてゐる。時間はもう五時を過ぎてゐるので、何程焦つても兩荒川の落合までは到底も明るい中には六ヶ敷と思はれるから、南荒川の奥の南北の澤の落合まで出て、右方の林中に野營地を定めて又小屋掛をする。雨はまだ止まないが小屋が完全に出來たので、濡れる心配は更にない。荷物などの跡仕末をして炊事の終つた頃は、それでも全く暗くなつて、林中は文目も分らぬ烏羽玉の夜の世界てあつた。燃料を山程も積み上げて火を燒き付ける。谷間の深林中てあるから風も當らず暖かて、まづ好適の露營地と云ふよもよい。明日は鹽平まで出れば人家もあるし、市野

瀬迄は往き得ないとしても露營の必要はないから、鑵詰類は全部始末する事にして、唯だ果物の一鑵を殘して置く。祕藏のウヰスキーを取出して今日まで無事なりしを祝福する。

南荒川より鹽平まで

二十七日。昨夜來の雨は名殘もなく晴れて、深林中までも朝らしい明るさがさして來る。名も知らぬ小鳥が囀つてゐる。午前七時過ぎに結束して出發し、北荒川の落合までは磧を通つたり林中を過ぎたりするが、なかなか急ではあるけれども左程危險の箇所はない。中に岩魚もこれからは上る事が出來ないと云ふ小さな瀧があつて、魚留の岩と呼ぶ樣な所もある。北荒川の落合まで一時間半を要した。それから三峰川本流への落合へ來たのは十時過ぎで、可なり悠々として歩いた譯だ。此處に立派な小屋のある事は聞いてはゐたが、自分等の見たのは新らしく出來たもので、製材の爲であるらしいが、小屋は二間に二間半位もあり、土間と板間を仕切つて、平常は五六人位宿泊するらしい調度も備へてあつた。以前の小屋は是より少し上の小高い處で、今も殘つてゐるが殆ど廢滅に歸してゐる。此處から三峰川の本流を約一里程溯ると、尾根通を東風卷谷へ降る途がある。距離に於いては本流を下るよりも、鹽平へは近いさうであるが、自分等は三峰川大曲りの難場を見る爲めに本流を下る。本流は荒川よりも廣く水量も多いが、傾斜が緩いから下流には左程の難場もあるべくは思はれぬ。この合流點は廣河原をなして、山間の溪谷にあり得ない程の平和の氣分を漂はしてゐる。春吉は釣道具を取出し其邊から竿を見付け出して、汀の石を掘起して餌蟲を捕へて二三疋紙に包み、餌を付けたる針を流して、岩魚の潛みさうな岩蔭の深みなどを注意して下ると、急湍の底に岩魚の游ぐ影は見えても針にはかゝらぬ。大黑澤の手前の小澤を越ゆる頃から、谷は西の方へ大曲りになつてゐるが、其先の小黑澤の合流する處あたりから大曲りの難所の神子の淵が初まる。其處で荒川の小屋へ行く杣が三四人休んの合流する處あたりから大曲りの難所の神子の淵が初まる。其處で荒川の小屋へ行く杣が三四人休ん

てゐるのに逢ふたので、下流の様子を委敷聞いて見る。それから右手の薙の如き處を通つて、大きな岩の處で自分等が迷つてゐると、後から呼ぶものがあるので振返つて見る。小黒澤のあたりから山へ入る杣らしいのが、左岸へと手眞似で敎えてゐる様なので、此方でも左手を指せば首肯して見せる。此處は右手の岸は切立た絶壁の下で行止となり、左手からも岩壁が押迫つてゐて、縮められた水勢は奔湍矢を射る如くて、高廻りするにも除路は無論見えず、全く自分等は進行を停止された有様で躊躇してゐたゝめてある。それで後へ戻つて更に左から出直して見ても、矢張この急湍を越えなければ前途へ進み得ぬのである　徒渉する決心してさて前に逢ふた杣達の此處を通過した跡でもと探つたけれども見當らない。彼是して十一時頃になるので早晝を食つて其上での事として落ついて休む。又空が怪しくなつて今にも雨が來そうになる、此上雨に降られては全く悲慘な譯だからと思切つて腰を上げ、愈徒渉の段取となる。瀦踏みとして春吉の弟が先づ渡ると、奔流の勢は丈の低い春吉の弟の股の邊まで脅す、辛うじて彼岸に着き荷物を卸して、此方の様子を見守つてゐる。今度は春吉に手を持つて貰つて自分が踏込んだが、あまり春吉の弟とは優劣のない自分は、矢張股の邊まで襲ひ來る水勢に、やゝともすれば押流されさうになる。水底には格別邪魔になる様な石がないのが僥倖で漸く安全に徒渉を終つてホット一息する。今迄我慢しきつてゐた様な空が、最早持切れなくなつた如く、沛然として夕立が降つて來た。遠雷の音さへ聞えるので、岩陰に雨宿りして晴間を待つ。徒渉點は幅四五間位しかないと思はれる位である。此處が奥の神子と云ふのであらうと思つて春吉に尋ねたが、春吉も神子の區別に就いては明瞭に知つてゐなかつた。

雨が間もなく小降となつたので、其處の岩陰を離れて河原に下り立つ、路は重に左岸を通じて高廻の箇所が頗る多い。除路には崩れかゝつた様な危險な場所もあつて、數々行惱むだ、又河原では身長よりも高い巨岩が幾重にも立塞つて、這上つても飛下る事の出來ない様な處もあるが、其様な箇所に

は大抵流木などが引かゝつてゐて兎に角通過は出來る。其外深潭を下に見ながら除路を通る樣な處は幾度もあつた。何分其樣な工合で水量の多い時には、通過は到底も不可能と云つてもよからう。當時の日記に詳細の記載がないので、場所などについて今では充分記憶に存してゐない所のあるのは遺憾である。荒川の落合の小屋場から難場を通過し終るまでに、二時間半以上も費したと思ふ。其處を過ぐれば全く平凡な河原で、河幅もずつと廣くなり石も小さく、水流も寬かになつて歩行も至極樂になる。これから路は河原から林中へ、林中から河原へと續いて平坦なもので、自然足の運びも輕くなる。此邊の林中には木賊が非常に多く、處によると一二町も群落をなして簇生してゐるのを見る。

東風卷谷は荒川の落合の上手から尾根越に通ずる路の出口で、此邊からは河幅は尙一層廣くなつて稍左へ曲つてゐる。左方の岸には古びた二階建に接續した平家造が見える。是は小瀨戸の湯場だと云ふ、湯の煙か炊煙かゞ薄く立上つてゐる。自分等は右方の河原を通つて湯場の對岸位の處で河原を離れると、製板所の前へ出る。伊那製材會社とかの製作所で、この谷で最奥の製板小屋で、工場の外に可なり完備した小屋が七八軒もある。男は山へでも入つたか影も見えなかつたが、女子供が十五六人も珍らしさうに自分等一行を見てゐる。其處から路は河原を離れて右方の山腹に通じて漸次に上りとなる。製板所を越えた處に右から小澤が落ちてゐるが、其の澤の名も判然とは記憶しない。それから平瀨へ出るまでに一二箇所製板小屋も見受けたが、平瀨は此谷の常住部落としての最奥のものであらう、畠などが可なり開けてゐたので驚きもした。其處から橋を渡つて左へ移れば市野瀨へ往く道であるが、自分等は右岸の細路を鹽平指して急ぐ。初めは直ぐ市野瀨へ向ふ豫定であつたが、もう五時に近くなつてゐるから、明るい中に市野瀨迄は無理だとすれば、鹽平で宿りを索むるより外はないから兎も角も鹽平まで出た上で、時間の餘裕があれば市野瀨まで飛ばすと云ふ計畫で急ぐ。然し鹽平から市野瀨までは三時間はかゝると云ふから、九時過にもなる恐があるので少し困る。然し鹽平には宿屋

はないから、頼んでも泊る家がなければ是非ないが、前に春吉の弟が頼んで泊めて貰つた家があると云ふのを心頼に、三人が談合しながらひたすらに足を速める。山間僻地である此邊で水田を見るのを珍らしく思ふ。稻の生立もなかなか見事で、清洌な谷水が淙々として流込んで、何處ともなく涼しい風が稻葉を渡つて來る。鹽平近く右手から大きな澤が出てゐる。其手前の尾根は大横川からの枘路がある處で、飽きはてる様な長い尾根であると春吉は話した。小高い土手の上て一休みすると、鹽平の村はもう眞正面の山裾に散見する。こゝからは隨分高みで、彼處まで登るには大骨折だと悲觀する。然し夕風が身に泌入るばかりに覺ゆるので立上る。此澤を越えて右方の峠へ上れば鹽平への正路てあるのを、眞一文字に河原を鹽平の直下まで往つて、小流を飛越えて畠の中の小路をひた上りに登る。恐しく傾斜が急なので大に苦しむ、然し峠路を迂廻するよりも三分の一以上も近いから、直ぐに人家のある處へ出る。春吉の弟が知てゐると云ふ家を捜したが直ぐは知れなかつた。ふと路の傍の小流て鍬を洗つてゐる男に尋ねると、それが主人であると云ふ奇遇て、六つ箇敷さうな泊の交渉も難なく落着して、六疊の小座敷へ通されたのは六時少し過ぎ。汗染みた肌着を脱捨てゝ井戸端て水浴と洗濯をやる。水は左程冷くはないが、流石に嵐氣身に泌みて覺えず戰慄する。夜食は葱汁に鹽鯖の水煮、胡瓜もみに醤油をかけたのが山盛り程皿に入れてある。飯も黒いが大して不味い事もない。是迄山では新鮮の野菜は口に入らないから、胡瓜の味は實に天下一品だと賞味する。

何ても無事で目出度と云ふので、例のウヰスキーを飲む。元來酒趣を解せない春吉はえらい酒だと顔をしかめる。自分も醉つた勢で少しかび臭い蒲團の裡に潜り込み、曉方までは夢も見ぬ位に安眠した。

二十八日は市野瀬高遠を經て、伊那に出で、辰野驛を經て上諏訪温泉に下車、同夜直ちに出發大月驛に向ひ。二十九日拂曉大月驛より馬車にて吉田に着き、それより富士裾野を馬車にて半週し、御殿場驛に出て、汽車にて下阪、三十日無事歸宅、此旅行を終る。

雜錄

○大門山

一

大門山と奈良ヶ嶽とは、金澤市内で見得る山で一番高い山だ。越中の立山は、極くよく晴れた日には、かすかに見えるけれども、餘程注意しないと見えない。

四高のグラウンドに立つて見る時あのゴシック式の屋根の上に少し左肩をそびやかして表はれてゐるのが大門山である。晩秋の寒い日、『おや、雪が……』と思はず、見つめる初雪は、その大門の頂に降る雪である。

奈良ヶ嶽、赤摩木古、高三郎、大門、大倉、醫王山の一帶に雪が降り積つた冬の晴れた日は、まぶしい程鮮かな壯嚴な景色である。殊にその月夜の晩などは、大理石の彫刻のやうに、ある凄味を添へて浮き上るが、然し又天地の間にあの駘蕩たる春風が眠たさうに吹くともなく吹く四月下旬のよく晴れた日、蛙聲が陽炎を通して響く小立野の郊外に立つて、奈良、大門などが眞白な大きな殘雪を帶びて、蒼穹にクッキリ盛り上つてゐるのを見た者は、此の時が一年中で金澤の一番美しい眺めである事を信ずるであらう。後谷へ行く途中、小倉邊から見る春の大門も非常にアットラクティヴである。自分は五月の初め高畠先生と、小原で大門を見た時、『先生、あの山へ是非一度登りませうね』と云つた。

二千七百米の白山が、脈をなして北に走るにつれ、だんだん高度を減じ、甑嶺山の附近の山稜の中には、一千七百米以下にまで下る所もあるが、笈嶽に至つて一度び一千八百米以上の高度を示す。がそれから再び高度を減じて、横谷、板谷の峠の所に行くと三百米位にまで降つてしまう。それから、もう一度隆起して醫王山となるのであるが、もう一千米には遠く届かない。

この白山々脈の内五千尺級に、最後のふん張り

を示すのが、實にこの大門山である。大門は高さ一千五百七十一米六。加賀と越中との境にあつて犀川の上流をなし、北谷は小矢部川となつて北流し、高岡市の附近で射水川と合する。南谷は白川谷となつて、峽流堺川をなして東流し、西赤尾の上流で庄川に合する。

登山熱勃興以來、人々は高い峯、高い峯と群集するが、そして其の自然を破壞して行くのであるが——此の大門のやうな山には、殆ど登山するものが無く、反つて原始のまゝに保存されてゐる。

大門の登山路としては、加賀側には倉谷からの路と、越中側には下小屋からの路と、二つあるのであるが、倉谷からの路は、十數年前に開かれた路で、今は雜木の繁生の爲め、通過不可能になつてゐる。殊に明治四十二年の十月、吾々の先輩二名が、この大門、奈良の方面で行衞不明になつてから、倉谷の人々は此の方面の登山中止を勸告するばかりでなく、山案內を拒絕する。だから大門登山を企てる者は、越中側の下小屋から行かねばならぬ。自分が此の山に登つたのは、大正八年の七月である。

二

七月七日八日の兩日は非常な雨だつた。が九日にはすばらしい天氣になつた。其日數人の友達と大野にボートを漕ぎに行つたが、河北潟からの激流は滔々としてゐて、とてもボートを出して遊ぶわけには行かなかつた。それで空しく歸つたが、翌日大門へ登らうといふ相談が出來た。同級の吉田と高杉の三人で、翌朝の八時に金澤を出發することにした。

十日の日もいゝ天氣だつた。小立野も過ぎ、館、銚子口の邊へ行つた時、もう隨分暑つく、いくら拭いても拭いても汗は止めどなく流れた。

淺野川の上流はあつけない程貧相になりて、單なる小川の相貌を呈してゐるに過ぎなかつた。湯涌街道は何時通つても單調で長いのである。板谷の峠を七分ばかり登つた所に樋で清水が引いてあつてぽちや〳〵落ちてゐた。まだ正午前だつたけれども、そこで三人して辨當を開いた。汗でぐつしより濡れたシャツを干してゐる間に、キヤラ

メルやドロップをしやぶって休んだ。

峠を越えて降りになると、谷からスウと涼しい風が吹いて來た。横谷を通つたのは午後一時半。山は到る所青々として夏の粧ひをしてゐた。更に上つて小矢部川の谷を見おろした時は、只わけもなく嬉しかつた。葛折の坂道を走り下つて、小矢部川の橋の上に立つた時、刀利の村は、平和な天地であると思つた。そのある家を訪ねて『お湯を一杯下さいませんか』と願つたら、おばあさんが簀をたくり上げて、湯呑茶椀でお茶をくれた。どういふ譯で簀の影から姿を現はさないのか分からないが、面白い所だと思つた。おぢいさんは家の前の胡瓜畑に何か野良仕事をしてゐた。軒端には黒いゼンマイが藁むしろの上に干されてあつた。刀利を去つたのは三時近くてあつた。

三

瀧谷の邊りからだん〳〵景色が面白くなつて行つた。道は右岸であるが、中ノ河内の大門橋を渡ると左岸になる。此の大門橋の上流から小矢部川は、貌を急に變へて全くの峽流となる。轟々といふ流れの響き、兩岸の絶壁、實際黒部川を小さくした樣である。越中生れの吉田は『流石に越中の川は違ふ』といふ。兩岸とも鬱蒼として如何にも夏の山らしく青々としてゐた。殊に二三日前の豪雨の爲め、方々に水の豊かな瀧が懸つてゐた。吾々は此峽谷を樂しみながら、ぶら〳〵歩いて行つた。この邊の何處かに、確かムシトリスミレが生えてゐる筈だ。途中の斷崖で大きな石を落して見たが、それは實に物凄い音を立てゝ谷底の川に落ちた。そしてその石は落ちしなに崖の大きな樹の皮をいやといふ程むいて行つた。

下小屋に近づくと谷はなるくなつて、畑なども あつた。尚ほ行つたら腰にかぶをぶら下げた女達が畑に仕事をしてゐた。かぶといふのは、藁のやうなものをまるけて、それに火をつけ、ぶす〳〵燻すものである。それはこのやうな山地には、ブトが非常に澤山ゐるのでそれをよける爲である。岩魚釣りに行く子供に會つてから直ぐ下小屋の村に着いた。六時半であつた。

前に水車のある家へ行つて『今夜泊めて下さい』

と願つたら、氣の好さそうなおばあさんが『おぞい家ぢやけれども、それでよかつたら這入りまっしやい』と云つた。

この邊は五箇莊と餘程似寄つた建築である。茅葺の屋根は東西の二面で、部厚で急傾斜である。そして南北の二側は二三階になつて高い所に明い窓がある。冬季に丈餘の雪が降る相だからであらう。夕飯には葱汁に岩魚のお菜をつけてくれた。

食後爐ばたに話してゐると、近所のおぢゞが來た。そして熊狩の話をした。初めは『てめい達にわかるかいっ』と云つて話さうとしなかつたのだが、眇の片一方でにらみ付けるやうな顏付をしながら、隨分面白い話をした。其の間、こゝの家の――此の家は谷口といふ姓であるが――おばあさんが爐の火をつゝ突きながら、南無阿彌陀佛の名號を唱へてゐた。其の語尾がだん〳〵小さく細くなつて行く。『ナムマンダアブツ、ナンマンダブツ、ウン〳〵、ウンウンウン』と聞える。それが若い時からの習慣と見え、立ち上つて室の暗い隅へ行く時でも、火箸で火を突く時でも、欠伸をした後でも、常に蜂の羽ばたきのやうな『ウン〳〵ウンウンウンッ』と云ふ物に包まれたやうな響きを、鼻の奥から出す。お伽噺にある山奥のおばあさんを眼のあたり見るやうな氣がした。吾々は九時過ぎに其の家の座敷にねたが、何だか堅い布團であつた。夜はしいんとして眞暗であつた。ねむくなりかけた頃に、チク〳〵手足が痒い。春中が痒い。どうも寢付かれない。外の二人も寢られない樣子だ。

それから蠟燭をつけて一々布團の上を調べて見たけれども何もゐない。すつかり目が覺めて了つた。が仕方がないのでねた。暫らくすると又ちく〳〵と何かに喰はれる。殆ど一晩中半睡狀態で過ごした。吉田は夜中にむつくり起き上つて、布團を振り廻したりしてゐた。

四

まだ暗い內に、此の家のおばあさんが起きて『ナムマンダアブツ、ナンマンダブツ』と初めた。もう寢られない。が眠いので床の中に痒い目をしながらも寢てゐた。すると『お前達もう起きらっせや

い』と起しに來た。腫れぼつたい眼をしながら、三人とも仕方なしに起きた。

顏を洗つて來たらもう飯は出來てゐた。茶碗に盛られた飯の上には眞黒に胡麻が振りかけてあつた。所がお膳に向つたら、その胡麻が一齊に飛び上つた。胡麻だと思つたのは蠅だつた。飯を代へると黄色に粟が少しづゝ混じつてゐた。

吾々が握り飯を持つて下小屋のこの家を出たのは七時半であつた。案內に來たのは宇野德藏といふ十六歲の少年であつた。腰に鎌を差してゐた。

夏の山は恐ろしい程草深かつた。身を沒するやうな草を分けて行つた。陸地測量部の人に、山の信仰から容易に案內しなかつたといふ不動瀑を過ぎて、ブナオ峠に差しかゝると、草苺が路の兩側に花園のやうに一面に赤く熟してゐた。案內の少年は勿論の事、三人とも何もかも忘れて苺を採つて食べた。葡萄棚の下で房々とした葡萄を一粒づつ採つては口に入れる子供のやうに、吾々は互に口も利かないで食べてゐた。いくら食べても盡きない樂園の實である。自分は失はれた子供心の淡い樂しい幻を懷しんだ。

ブナオ峠に着いたのは九時十分。途中にキヌガササウの大きなのが澤山生えてゐた。桂と西赤尾への路が夫から下つてゐた。

大きな椈の木が多い。ブナオ峠といふのは椈が多い峰といふ意味であらう。椈の多い尾根即ち椈尾であらう。だからブナオではなくブオヲであらうと思はれる。然し陸地測量部の地圖にはブナオ峠と書いてある。

此の峠の上から大獅子山、猿ヶ山の方へも林道がついてゐる。又タカンボーなどもよく見えた。この峠の上で二十分ばかり休んでから大門の方へ登り出した。

ブナオ峠から大門の方へ行く路が三つある。右は多津子、月ヶ原の方へ行く路。左は赤摩木古の方へ行く路。そしてその中央が大門への路である。とにかくブナオ峠から尾根ばかり傳つて行けば大門の頂上に行く。小林區のつけた林道は、登攀を非常に容易ならしめる。

路は比較的樂であるが、景色は決して平凡では

ない。山又山の飛驒、越中の界、殊に五箇ノ莊の桃源の境をほのかに窺ふ事が出來る。境川の峽谷はオゾーゾとタカンボーとの間に深く切れ込んでゐる。そして其の上流に越中桂、飛驒加須良の小平原が、如何にも桃源の境らしく、又神仙の域らしく、吾々の視線を引いた。あの山中の別天地に自分は幾年憧れてゐることだらう。

その桂村が今見えてゐるではないか、自分は耳をすましたならば、鷄の聲も聞えはすまいかと思つた。

路は兩側がそげて馬の脊のやうな感じである。樹は栂が一番多い。周圍一丈もあるやうな大樹が枯れて朽てゐるのなどもあつた。十一時雪を見た。『あゝあそこに雪がある』と一人が叫んだ。赤靡木古と大門との間の谷に、殘雪が白く見えたのである。夏の山に雪を見ることは、實際いつもながら歸省して健やかな母の顏を見るやうに、非常になつかしい事だ。

五

薄赤味を帶びた餘り見た事のない百合が咲いてゐる邊から、赤靡木古の方へ行く林道はあるが、大門の頂への路はなかつた。荷物を置いてわきへそれ、ガサ〳〵頂上目がけて行き出した。もう五千尺の高さに達してゐる。なつかしい白樺が貧弱ながら生えてゐた。自分はいつでも白樺を見ると初めて奥山へ來たやうな氣がする。それから行かうとしたら非常な密林になつてしまつた。雜木の間に篠竹が一ぱい繁茂してゐた。

折も惡しく飛驒の方に見えた雲が濛々とやつて來た。そして今まで照つてゐた太陽もすうつと影つてしまつた。身の廻りは漠々たる雲。すると昨夜熊狩のおぢゞの忠告が、鋭利な刃物を眼前にチラつかせられたやうに、ひやりと思ひ浮んだ。それは昔（明治四十二年の事だ）金澤の學生二人（吾々の先輩の事だ）が奈良ヶ岳で死んで、エライ騷ぎになつた事がある。おめい達もためろつて（氣をつけての意）行かっしやいといふ忠告である。奈良ヶ岳と云へば直ぐ隣りの山だ。が今更引き返すのも非常に殘念だ。自分は木に登つてしばらく形勢を見てゐた。すると雲が急に薄くなつて、高三

郎の山腹のすばらしく大きな岩壁がすうと現はれ、ついて奈良ヶ岳の山の皺に殘雪が物凄く見えた。と思ふと又直ぐ凡てが漠々たる雲にかくれてしまつた。

しばらくの協議の結果、頂上まで行くことに決した。それから極めて用意周到に道しるべを作りながら、其の密林を進んだ。持つてゐる紙が全部無くなつた時、やゝ歩きよい所に出た。昔の路らしい處である。其處も道しるべに少年の案内者が持つてゐた鎌で、木の皮をけづらせ、自分達もナイフで木の皮をけづりながら行つた。

漸く頂上らしい所へ出た。草の一ぱい生えた不得要領な頂上である。不恰好な虐げられたやうないぢけた白樺なども生えてゐた。『犀川の上流に菊ヶ岳といふ山があつて、野菊が叢生してゐる。其の花露が滴り流れて犀川になる。故に犀川を一名菊水といふ。』と金城圖誌に書いてある。菊ヶ岳と云ふのは恐くは大門か高三郎を指すのであらう。この菊ヶ岳の野菊と云ふのは、あの秋更けて犀川の上流を散策する時、兩岸に咲き亂れてゐる淡紫の野菊を見て、この川の水源地の山にも、さぞ澤山咲いてゐる事であらうといふ詩的空想から、山の名まで菊ヶ岳と云つたのであらう。が然しこの山の頂上には、野菊は勿論の事、美しい花の咲きそうな植物は見當らなかつた。

三角點を搜しあてゝ其處へ行つたものゝ、雲の爲に何も見えなかつた。十二時十分。そこで飯を食つた。

午後一時に頂上を出發した。大門の頂上へ來たといふ印に名刺を三角點に張りつけて置いた。

歸りには道しるべを便りに、三十分で荷物を置いた所へ着いた。それからさつき見えた雪の所へ行つて、其の殘雪を食つた。もう死ぬ氣づかひはないと思はれたから暢氣に遊んでゐた。二時廿分にブナオ峠の方へ降り出した。下りは走つたので三時には峠へ着くことが出來た。タオルに雪を包んだのを持ちながら、

下小屋で泊ると昨夜のやうに又蚤に喰はれるから、いくら遲くなつてもいゝから、金澤まで歸らうといふので急いで歩いた。下小屋に着いたのは

五時過ぎ。空腹で歩けなくなるといけないと云ふので、夕飯を食はせて貰ふ事にした。所が山へ行つてゐる家の人を迎ひに子供が行つて、しばらく待つた結果が、朝飯の殘りが一膳づゝしか無いといふみじめな結果になつた。それで吾々が愈々下小屋を出發したのは六時近くであつた。

それから走るのゝ次の速さで歩き出して—寧ろ走つたと云つた方が實際に近いが—八時には板谷に着いた。この村のある家へ這入つて夕飯を食はせて貰つた。そして歸る時自分達が置いた僅かな金が多すぎると云つて、向では非常に恐縮してゐた。腹が出來ると歩く事よりも、眠い方が主になつた。昨夜の睡眠不足に今日の疲勞。一寸道ばたに休むと直ぐ眠る。蚊に喰はれて又歩き出す。三人とも金澤に近づくにつれ、ひよろ〳〵して來た。夜もだん〳〵更けて行く。地べたに莫蓙を敷いて横になると、すぐグウと眠つてしまう。すると蚊がブーンと來てチクッと喰ふと又歩き出す。そのやうにして金澤へ着いたのは二時半であつた。

下小屋で夜寢られなかつたのは、歸つてから洋服と襯衣に着いてゐた小動物によつて虱であつた事を知つた。（廣瀨壽雄）

○七倉岳と不動堀澤岳

七倉岳といふのは、北葛乘越を隔てゝ蓮華岳の南に聳立する高距二五五一米突と測られた一峰の名である。此山は又北葛ノ頭或は乘鞍岳なる別稱を有してゐる。故に七倉・北葛・乘鞍なる三の名稱は、同一の山に與へられた異名に外ならざることは疑を容れる餘地がない。然るに近頃になつて此山を單に北葛岳と稱し、其正名ともいふ可き七倉岳なる稱呼を反て此山の西南に在る頂上の南北に長い、そして南端に二四五三・五米突の三角點を有する不動堀澤岳に冠して、それを七倉岳と呼ぶ人があるのは、如何なる理由に據つたものかは知らないが、自分には首肯し難く思はれるのである。

曾て本誌第六年第一號の附錄として、中村清太郎氏が日本北アルプス一部應測圖を作成した。其時三角點の位置は測量部の網圖から寫し取つたのであるが、二四五三米突の測點に「七倉」と記し

てあつた爲に、網圖の測點の名は符號同樣に用ゐられてあるものなることを當時は知らなかつたのと、此附近の山峰を熟知した人がまた無かつたことと等の源因から、それを大町邊からよく見える實際の七倉岳の三角點であると思つて、其三角點を七倉岳とし、別名なる北葛ノ頭及乘鞍岳の文字を括弧の中に記入して置いたのである。果せる哉此山脈を最初に縱走された榎谷氏から、臆測圖の七倉岳は實際よりも位置が南に寄り過ぎてゐるといふ至當の說が出て、大分議論のあつたことは、本誌第七年第二第三號を讀んだ人の知つてゐる通りである。然し五萬分の一圖が出版されて見ると、七倉岳には三角點はなく、且つ二四五三米突の三角點は、七倉岳の西南にある不動堀澤岳の長い頂上の而も南端にあることが分つたので、臆測圖の七倉岳は實は其西南に在る不動堀澤岳（此山も不動堀澤ノ頭と呼ぶか又は岳と呼ぶかに就て議論はあつたが、私は岳と呼ぶことに就て異論はない）の南肩であり、七倉岳は圖に記入してないことになつて、論爭の源因も自ら判明したのである。針ノ木峠の頂上から南望すると、間近く正面に不動堀澤岳が、大町あたりから見る七倉岳のやうに尖つて屹立し、其左に七倉乘越の鞍部が物凄いガレを懸け、更に左の方に七倉岳が頂上の三小隆起を見せて、東西に稍長く聳えてゐる。されば北葛岳なる名を以て七倉岳を呼ぶ場合があつても、夫が爲に七倉岳なる名を不動堀深岳に冠して差支ないといふ理由は少しもない。

此等の混み入つた譯を知らないで、碧梧桐氏の一行が此處を通過した時、輕卒にも七倉岳を呼ぶに其別稱たる北葛岳を以てし、動すことの出來ない七倉岳の名を無鐵砲にも不動堀澤岳にあてがひ、其間の七倉乘越を勝手に葛倉キレトなどゝ呼んだのが基となつて、何にも知らぬ其後の人夫などが其儘誤りを傳へたものかと想れる。後の登山者はよろしく其誤を正してやるべきが當然であつて其誤を踏襲すべきものではないであらう。

要するに不動堀澤岳を若し相當の理由あれば他の名で呼ぶことは差支ないとしても、之を七倉岳と稱することは斷じて不當であると信ずる（本幕）

○河の右岸左岸に就て

記行文を書く時に、河を上下した場合、誰しも左岸右岸の文字を使用する必要が生ずるものである。尤も右側或は左側、又は左の方とか右の方とか書く際には、それが河を下つた時でも若しくは遡つた時でも、作者の進んでゐる方向の、即ち向つて左又は右なることは勿論であるが、左岸右岸となると、河を上るのと下るのとでは正反對の結果を生ずる。如何なる理由に據りてかは自分は知らないが、河の左岸右岸は、上流を背にし下流に面して立つた時、左が左岸右が右岸と定めることになつてゐる。原稿を起草せらるゝ際、若し右岸左岸の文字を使用する場合には、其點に留意されんことを希望する。

又瀑と瀧の字も、區別して用ゐた方が便利のやうに思はれる。一般に落口から直に飛下するものは瀑の字を用ゐ、岩面に沿ふて瀉下するものは瀧の字を用ゐるのが正當のやうである。奥上州の藤原では前者をセンと稱し、後者をタキと呼んでゐる。兎に角此二字を斯く區別して用ゐるならば、一々説明を下さずとも、讀下一番、直に如何なる形のタキであるかを知り、溪谷の模樣なども想像されて面白いことゝ思ふ。

序に山の表裏ということも、それが登山者の無い或は極めて少ない山であれば、容易に決定し難いことで、これに就ては曾て本誌上に論ぜられたことがある。寄稿家諸君の中には、自分の登つた方を表とし、これに反對の方を裏とせられてゐる人もあるが、これは寧ろ南面とか西面とか、方位を以て示した方が間違がなくして分り易くはあるまいか。(木暮)

雜報

○樽前山爆發す

十七日午後六時二十分北海道樽前山爆發し、四五里の地方にまで降灰あり、爆發前後五分間の地震あり、十八日に至るも噴煙歇まず、新たに湖畔に噴火口現出せるもの〻如し。(室蘭特電)

○富士登山者三名行方不明

富士山上は二十三日午後より天候險惡の模樣なりしが、二十四日午後一時頃より風力加はり、三合目以上は風速二十七米突の強風となり、同朝大宮口より登山せる關西地方よりの三名は、七八合目附近にて行方不明となりたるより極力捜索中、同夜來暴風雨に變じ、山中砂礫を卷きあげ危險極まり無く、突風石室を襲ひ、豪雨は瀑布の如く轟々として流下し、飛散せる砂礫の音響と和して物凄さ言はん方無く、各石室には溢れんばかりに入り込みて雜踏したる登山者は終夜マンヂリともせず、食糧さへ刻々缺乏を告げ來るより、相擁して只管無事を祈るうち、二十五日朝來風やゝ風ぎたるより、遲難者は危險を冒して石室を飛び出し、腹匍ひとなりて下山する者多かりしが、午後一時頃より又復東風の暴風雨となり、小雨さへ加はり刻々危險加はるより、山麓の大宮、吉原御殿場各警察署にては、巡査を登山せしめ、消防夫青年團と協力して救護に力めつゝあり、尙山上の天候險惡打續かば、食糧全く缺乏すべく、頗る憂慮に堪へざるものあり、登山口各旅館にも登山者充滿し、頗る混雜を極め、全山雲に蔽はれ、天候恢復の見込立たず。(靜岡電話)

○富士山の强風雨

富士山は二十七日午後零時半頃强風雨となり、同朝登山の途に就ける人々は石室に避難し、或は下山するもの多し。(御殿場電話)

登山者捜索　佐世保市鹽瀆町當時名古屋高等工業學校生徒藤村蕉(二十)外二名は、廿三日富士登山し、未だ歸宅せざるに就き、捜査方二十七日佐世保署より本縣に依賴ありたり。(御殿場電話)

吹落された登山客　二十五日午後二時頃富士登山中暴風雨の爲め吹飛ばされ、行方不明となりたる三名に就ては、目下御殿場署に於て取調中なるが、右は東京府下南葛飾郡南綾瀨村字柳原中山爲五郎(五三)同中山左衛門(五三)同中山鐵五郎(五十)らしく、鄉里へ照會中なり。(御殿場電話)(以上大正九年七月發行東京朝日新聞)

○白山登山者暴風雨中遭難

金澤市地黃煎町青年團員三十名は三日金澤を發し、白山登山の途に就き、四日朝頂上に達したる折柄、俄然暴風雨襲來したるより、一行は急遽下山したるが、一行中中村榮造(二四)は死亡し、外三名は行方不明となりたるより、急を報じ、五日約百名の捜索團は同地に急行せり。(金澤特電)(大正九年八月六日東京朝日新聞)

○會員通信

△スキーよりは去三日歸り、八日に又もリュックサックをかつぎて飛び出し申候。其日おそく出發せる爲吉田に泊り、次の日船津より河口湖を渡り、大石村より黑嶽へ登り候。こゝは一等△點有之候へども、餘り景處からず（山頂森林ある爲）、之より西大石峠迄尾根を傳ひ南下して西ノ湖村に一泊、翌日は平凡に（尤もちよい〳〵寄道して）駿州上井出村に出で泊、次の日歸京致し候。御坂山脈は大石峠附近以東は概して歩き易く、十二ヶ岳連峯は今尙密林有之樣子。かの三峠山は中々惑じよき山と思ひ候。生憎富士すら朝の內晴れをるのみにて展望は落第に御座候。もし天氣よくば本栖湖より龍ヶ岳の邊に登らんと思ひ候も、それも空しく、唯此邊の大體の樣子を知り得たるに滿足致し候（大正九年四月十五日沼井鐵太郎）

△十八日一高の連中、山口君等と瀧子山、大谷ヶ丸方面へ出かけ、久振にて面白い山あるきいたし候、其後武田さんも同方面へ出懸けられたらしく、賑しきことに有之候。（九年四月二十七日森喬）

△四月三十日から靖國神社の休み等を利用して、武州御嶽から入つて、大嶽山、鋸山下を通り、御前山、三頭山（ミツカヘ）に登り、小菅川を遡つて大菩薩から嶽峨鹽溫泉に出て、日川の流れを聞き乍ら浴みしました。大嶽から御前に行く道の灌木の枝には閉口しました。顏や手の先を大分掻かれました。武田博士の四條畷の說を想ひ出して同感に耐えませんでした。全日程四日間（一高、五十嵐芳雄岩崎秀之）

△拜啓。拙稿「石狩川上流の旅日記より」中、五二頁の行程表に北見峠より三里とあるは一里、六九頁三行同七行同八行同十行に東岳とあるは本岳、同頁十行北岳とあるは東岳とそれ〳〵御訂正願上候。又六八頁揷畫の註に「リ北岳」とあるは東岳の誤記に有之候間、何卒正誤なし被下度候（竹內亮）

△本會々員寫眞名簿編輯の件に就き會員諸兄に御伺申上候。近く會員章變更と共に會員章番號の割當も完成せらる。この機に際して全會員の寫眞を本會に集錄せられんことを望む。本會より各會員に會員章を貸與すると共に、會員名簿に各會員の寫眞を保有せられ、以て會員章番號と該當會員との承認を神聖にせられ、且つ會に於て會員名簿を繙かば全會員の風丰に接するの便あるが爲に番號と該當會員との寫眞を對照し置かるゝの必要ありと思ふ。寫眞は成るべく登山姿を撮影したる半身像とし、大さは適當に協定せられなばよろしからん（五月廿四日　會員　山本武男）

△豫てより本年は道志山塊の研究を企て居り候處春期は兎角天候思はしからずして跋涉の機もなく過し候ひしが初夏も已に半ならんとする六月初旬例の健脚松本善二君の同行を得て南都留に遊び候。七日夜十一時新橋驛にて勞揃ひも簡單に同九分發の下り列車に乘じて駿河に向ふ。快晴にて風凉しく二十一日の月は中天に懸りて車窓よりの眺め殊に佳。半醒半眠の中に午前二時駿河驛に到着。直に結束して明神峠に向ふ。上野に近づく頃東天漸く白み東に塔ノ岳以北の巨塊現はれ淡黑色の富岳は前面に屹立して壯美を極む。上野より露に濡るゝ雜草を分けて國境に辿り着き峠道を西

に進む。午時許にて世附川の上流を右に下瞰しつゝ三國峠に向ふ。甲斐に入りてより下ること數丁にして山中湖を距て赤石山系の尤物雪に輝くを遠望して嘆美の聲を禁ずること能はず右手の童山に駈上りて眺望を擅にしたる爲め意外に時を費して八時頃平野の部落に入りて休憩。平野より內野峠を經て內野に越えんとしたれど、豫て國志にて見たる石割權現に參詣せんものと道志道より分れ鳥居をくゞり平野の上水道に沿ひて北し二ノ鳥居にて川を渡り參路を辿りて奥ノ院に着。時に十時。岩は閃綠岩の大塊にて國志に高さ一丈餘長二丈許とあれど實際は夫よりも更に大なるに驚嘆致し候。石割神社より石割山(又權現山)の山頂一四一三米に攀上り炎天下に休憩。眺望甚佳なれば東京より散策地へ但し出發は夜行にて)としては適當ならんと存じ候。石割山より山稜を東北に傳へば御正體山に達す可く西北に辿れば鹿留山に到る筈なれば、路を後者にとつて尾根通りを進む。先づ一擧に二百米を下りそれより昇降を反覆して鹿留山南面直下に着きたるは午後二時に近く炎天に喉渇し腹饑して甚しく困憊したれど小憩の後勇氣を恢復し巉岩の間を攀ぢ倒木の下をくゞりて終に最高點一六四〇餘米に着時に午後二時四十分。此處にて大休憩をなし自園より携へ來れる苺に渇を醫し巨岩の蔭に横臥して綿の如く疲勞したる身體を休ますること時許。時に陰雲三峠山の巓を蔽ふを見急遽東端の三角點(一六二三米)を訪ひ午後四時結束して絕巓を辭して西に向ふ。三四の小峠を上下して後終に一五九七米の三角點に達す。初めは此處より山稜を北に傳ふ計畫なりしも時已に遲きの故に放棄して西に下り小明見の一部落小原に下る。此處にて十時間目にて水にありつき一と息入れて直に向原に到り雜貨店主の好意にて焚きたての米飯にて夕食をなして蘇生の思あり。一倍せる勇氣と涼しき夕風に乘じ桂川に沿ひて小沼に達し旅舍に入りたるは八時頃にて候ひし。九日午前五時小沼を發し都留の名山三ツ峠山(又三嶺山)に上らんと下暮地に向ふ。幸にして西桂村青年團長前田巖氏自ら嚮導の勞を取られたれば好都合なりしこと此上なし。山麓達磨石を見て大曲りにかゝれば三峠の三峰前面に屹立して一行を威壓せんとす。八時二十分石割權現に達して休憩の後間もなく所謂百地巖に到る。八十八軀の石佛を列べ中央に石碑あり。進むこと少許にして岩屋の觀音に詣で山腹を横にからみて十時三十分三峠權現祠に着す。祠は八棟造りにて壯嚴稱に見る處なれども風雨に損傷せるは惜む可し。祠背の細徑を攀づれば有名なる御船石にして岩上より富岳を望むの景最雄大なり。再び祠側より山腹を行きて不動の瀑に到りて休憩、清水に渇を醫し行厨を繙き休憩數十分の後最高點に向ひて出發。此邊甲斐駒ケ岳の地獄谷に似而も岩石の種類を異にするのみ。絕頂は樹木少く眺望極めて廣闊よく南北アルプスの大部分八ケ岳、天子山塊の北部、御坂山塊秩父諸山、道志山塊、丹澤山塊の山岳一望の下にあり而も是等の諸山に冠するに扶桑第一の富岳の全容を以てす、其景の壯絕なる到底禿筆の盡す處に非ず。午後一時頂上を發し南に山稜を傳ひ終に白絲瀑に下り上暮地を經て小沼に歸着し此處に前田氏と別れて縣道を谷村に出でゝ宿泊。十日快晴に乘じ道志山塊の最高峰御正躰山に登らんと六時五十分谷村を出發し一時間許にして栃苗代に到つて休憩。八時半出發し佛ケ澤に沿ひて上り數十年來踏む人稀に落葉堆き蹇路

を辿りて十一時半奥の院御正體大權現祠に到達。夫より山稜を上下して零時半最高點一六八二米の一等三角點に着。側に宮川某氏五月某日登山云々と樹幹に刻みあるを見る。頂上は小平地をなし四周に樹木茂り眺望として只漠々たる雲あるのみにて何等の景なきに落胆すること不少。中食の東後面ズサ山の澤に下り終に道坂路に出でゝ谷村に歸着。直に馬車鐵道に乘じて大月に到り終列車にて歸京致し候。（武田久吉）

△拜啓。七月廿五日午後一時二十二分の苦小牧發列車にて錦多布着錦多布澤の上流より樽前山東峯を目標に森林中を上り、午後七時約八百米のツネ（尾根）磊々たる爛砂の間に火もたかず月光下に夜營　翌廿六日午前三時夜營地を發し、四時東峯最高點に着、去る七月廿二日夜の爆裂跡を遠望し、オポップ空澤より錦多布へ下山、汽車にて歸苦致し候。徑路降灰厚く全身灰にまみれ候も、下山の際は錦多布に近づく迄殆んど降灰の跡を認めざる程に候ひき。これで樽前登山も第七回目に有之、大分地理も承知致し候。猶、社臺川よりの登路、シンヤモナイ登路の外、容易に人の近き得ざるフウプンヌプリ登山とを重要なる計畫に數へ居り候。（九年七月二十七日　竹内亮）

△拜啓。當地昨日より快晴となり登山者多く有之候。小生共の大池調査隊一行約十五名、十二日白馬雪渓より登山乘鞍大池に幕營致し候。幸にして好晴の時多く、該湖最初の舟遊成功を極め申候。十五日下山。

本年山麓新田の青年會員に依り、同地より池畔に至る道開け、吾々初下山仕候。劒岳のに近き急峻な雪渓約十町程有之、舟過つて人夫三人と共に墜落致し候も幸にして無事。これより下も處女林を穿ちて雜木林下に笹多く通過困難。途中神の田圃なる湯原あり田代の地形を成し居り候。大池にはブランクトン多く候。魚類皆無。（九年七月十七日對山館にて田中薫）

△小生去る七月十九日栃尾又發足、銀山平、中ノ岐を遡行し、平ケ岳に登り、夫より白澤山、大白澤山を縦走して猫又川を下り、尾瀬平より至佛岳に登り、尾瀬沼の勝を探り、燧岳會津駒ケ岳に登山致し、檜枝岐より新しく開きし木賊峠を越え、再び銀山平に入り當地へ無事歸着致し候。（九年七月二十九日栃尾又にて宮川久雄）

○拜呈。名山巡禮の目的にて去十八日出發、翌十九日長野市より戸隱中社に至り、久山邸に宿泊。二十日裏山を經て五地藏に一泊。二十一日高妻に登り中社に下山。二十二日荒倉山の紅葉の岩屋見物。二十三日柏原道の大橋より杉野澤に至る峠（一五七〇米、頂に七ツ池あり、風色絶佳）を越え、少しく下りたる處より黒姫の登りにかゝり候處、藪甚しく登攀困難を極め、辛くも火口壁の西端に登りつき、それより引きつゞき藪くゞりを行ひつゝ火口壁をめぐり、中社より七時間半にして漸く絶頂着、妙高火山霊諸山の眺望壯快を極め候。下山は長原の一杯水茶店方面へ下り候、夕刻當地到着仕候（七月二十三日信州柏原驛にて辻本満丸）

△小生去る七日友人信濃山岳會員二名と松本發信濃鐵道柏矢町驛下車、南安曇郡西穂高村牧より烏川一の澤を溯り、常念小屋泊、翌日横尾二の俣、槍澤を經て坊主小屋泊。翌日今日迄人跡未踏と稱せられつゝあり一北鎌尾根を槍の絶頂より高瀬の渓谷に向ひ降

下、尾根傳ひに縦走、最後の高峯より右方に切れ、斷崖を降り、午後十時半天上澤の奥貧乏澤附近に着、同夜は其處に露營。翌日は雨中を高瀬源流に沿ひて降り、同夜はカラ谷の尻（湯俣、水俣の出會）に露營致し候。

高瀬川は去月末の大暴風雨に慘害甚しく、想像以上にて、同日も徒渉十數回、水深胸部に及びしかば、出合の一里手前よりは徒渉を斷念し、岩壁尾根を登降せしも、雨中の事とて展望更に効かず、流石の喜作も方向を取違ひて彷徨する事約三時間、漸くにして露營地に到達致し候（平素の高瀬川は水深左程ならず、徒渉容易の由。當日は時期尚早く雨中なり爲と思はる）出合附近も同樣慘狀を呈し、沿岸幅約三拾間許り流失。小屋などは全部跡形も無之候。終夜降雨の爲め一睡も貪り得ず、翌日小降りを持ちて前進せんとせしも容易に靜まらず、案外に食糧を要し、殘り尠くなりし爲め、意を決して出發、雨中高瀬に沿ひて傳兵衞小屋の釣橋附近迄赴きしも、橋墜落して大町へ出づるを得ず、止むなく引返して東澤を渉り、中房川源流を下りて中房温泉に出で、一兩日休養の上十四日歸宅致し候。

出合よりヲサビ澤に至る沿岸は崩落個所夥しく、雨中水嵩增して石の流るゝ音高く、悽愴の感に打たれ申候。

案内は南安曇郡西穗高村の小林喜作と申す者を依頼致候。同人は地方にて山の神と稱せらるゝ程山には頗る明るき者にて候。外に人夫一名伴ひ候。（九、七、一八　土橋莊三）

△七月八日有明驛に下車致候處、本年は殘雪頗る多く、カンジキを準備せざれば、常念連山雪渓の攀登困難なりとの注意ありしも午後の三時温泉に向つて出發、午後九時到着仕候。約五時間の快眠を貪りて、翌朝早發直に燕岳の攀登に取掛り申候。小屋場東方三角點には未だ殘雪多く有之、雪を咬みつゝ小屋場に向ひ候に、雨到りて前途氣遣しく相成、頂上を極めて仙人小屋場にて天幕露營を致候。偃松を焚き雪を解して炊事致候も、暗雲低迷して何となく不安の念に驅られ候處、食後沛然として驟雨來り天幕を洩れシートを浸し候て、漸く二三時間の安眠を得申候。十日曇の海より上る日出を拜し、鐵詰を溫めて朝食を喫し候は午前五時。槍の雄姿は西南の天に群峯を拔いて兀立し、神氣頓に爽然たるを覺え候。蛙岩を過ぎ爲右衞門岩を經て、切通岩にかゝる迄の山上より、西南の天を展望すれば、扇形に展開されたる雪の連山の眺望頗雄大にして爽快極りなく、低回數度去るに忍びざるもの有之候。大天井岳を過る頃より風雨漸く激しく、本夜の宿營地常念岳迄は前途尙遼遠なるに、寒氣身に泌み空腹を覺え、殊に同行の1君は雪渓橫斷の際轉落し、辛じて數間下の岩角に掛りて生を全ふする等益〻氣分を緊張せしめ候。二俣小屋附近に到りしに、終に暴風雨と化し遲々として前進捗らず、防水外套も浸潤して肌着までも全くズブ濡れとなり、疲勞又加り來て、此時こそは眞に大自然界の不可抗力を痛切に感得致候。山中での高等ホテルとでも申すべき常念坊に辿り着き爐火を盛にして濡衣を乾し居り候處へ、九州大學中山博士の一行來り會し、室中俄に賑々しく相成、半煮飯に腹を滿し、猛り狂ふ風雨の音を耳にしつゝ午後七時就寢致候。明くる朝も風雨の猛威は靜まるべくもあらず、陋屋内に一日滯在と決し候。中山博士の歐洲アルプス談あり、爐を圍んで山に關する珍

談奇話を交すあり、燒印を押す者、トランプを弄る者等、荒れ狂ふ風雨の中に談笑娯樂の一日を過し候。翌十二日に至り風雨の勢も漸く衰へ候事とて、吾等五人の岳友連は斷然上高地への縱走と決し、午前五時風雨を衝いて二俣谷に向つて出發致候。先月の荒れに崩壞せる山谷は、到る處に慘憺たる跡を殘し居り候。二俣池も決潰し元の河原と相成り居り候。股を沒する寒流を右に渡り左に横切り、崩壞面の綱渡り等の曲藝を演じつゝ、午後三時上高地温泉に着致候て五千尺に入り申候。仰げば明神奥穗高の連岳は屏風うるはしく吾人を迎ふる如く、清冽骨に徹する梓川の寒流は直下に迫り、楊柳は綠に空翠滴らんとし、實に神仙境の感有之候。翌日九大一行と燒岳に攀登致候處、途中大正池も先月荒の爲決潰し、大河原と化し居り候て、白樺の枯木のみ淋しく立つも憐れに見受けられ候。即日上高地に引返し候て、翌日德本峠を超えて島々に出で松本に歸着、淺間温泉に浴して名古屋を經て歸播致候。

車中妙齡の一婦人と座席を接し、山衣の汗臭きを憚り居り候ひしに、却て先方よりアルプス談を發せられ、白骨温泉、燒岳、上高地、中房等は吾人より數年前の先輩なるを知り忸怩たらざるを得ざるもの有之候。然し婦人登山の逐年盛となりつゝあるは岳界の爲慶賀すべき事に候て、實に意を强ふするに足るものと存候唯惜むらくは婦人に對する山上の特種設備の不備なる事に候か（九、七、二五、加古儀平）

△七月十六日附御送附被下候會員章（第三五〇號）大町對山館に於て廿日受領仕候、借用證乍延引送附いたし候、今回は會員竹下英一君と協議の上關西方面より女子の團體能率如何を試みんと存じ候處、幸ひ同僚女教員の贊成を得て女子六名と男子六名にて白馬登山を決行仕り候、上高地方面に於ては多少今日まで婦人も參り居り、尙又白馬へも關東よりは女學生及一般婦人も登山せし由に候得共、山に何等の理解なき關西婦人は如何に懸念いたし居候處、幸ひにして六名中二名丈けは山上に於て稍々疲勞の傾向之ありしも、豫定の行動を了して昨朝歸阪仕り候、一行の登山記事は大阪時事新報に白馬行と題して七月廿一日より連載され居り候故、幾分にても關西婦人に山といふものゝ理解と智識を與へ得る事と信じ居候、五年前の登山に比し、登山路の開拓せられたると山上石室の設備の出來しは結構に候へ共、今日の登山者の數より見れば尙更に二三の石室の設備も要求せられ候。（朝輝記太留）

會報

○第十三回大會記事

大正九年五月九日赤坂溜池町三會堂に於て開會。午前十時陳列場を開くも遲しと熱心なる來會者陸續詰掛け陳列に忙殺さるゝ係員を捉へて質問さるゝあり或は出品物を搬入さるゝもありて、例によりて一時は中々の混雜なりしも、やがて一と通り整理も濟めば、各自悠々圖書を閱覽し或は休憩室にて山談に花を咲かする會員もあり。午後六時より階上大廣間にて講演會を催し、辻村評議員開會の辭を述べ本會發達の大要及び趣旨を略說して後、豫告の如く理學博士藤原咲平氏は高層の氣象現象について、理學博士中村清二敎授はイヹロウストーン・ナショナル・パークについて幻燈を用ひて明快なる講演を試みられ、九時閉會したり。會員及會員外の來會者を合せて百數十名に達したりしが、何れも靜肅を保ち熱心に聽講されたり。當日出品物左記の如し。

○保々三九郎氏出品
濠洲ブルー・マウンテンス案內記
○磯貝藤太郎氏出品
自筆三幅對－琵琶池、笠ケ岳、萬座溫泉。
○Japan Tourist Bureau 出品
A Colorado Summer, Seago, 1914.
Berner-Oberland.
Bird's eye view of the Laurentian Mountains.
Canadian Rockies.
La route des Alpes, Evian-Nice.
Luzern-Stanserhorn.
National Parks Portfolio.
Nouveau chemin de fer alpestre, de Kristiania à Bergen.
The New High Mountain Railway, from Kristiania to Bergen.
The Simplon Route.
Wengen, Winter Sport.
○近藤茂吉氏出品
Ball's Alpine Guide, 4 vols.
The Playground of Europe by Sir Leslie Stephens.
Swiss Travel and Swiss Guide Books W.A.B. Coolidge.
歐文山岳圖書目錄(未完製)

○中村清二氏出品
イエロウストーン・ナショナルパーク附近寫眞繪葉書等數十種。
⊙中村清太郎氏出品
自筆黒部峽谷縱覽(樺平の谷より上流を望む)。
同黒部峽谷の一部(オリヲ谷附近)
○高畠和雄氏出品
槍ヶ岳の初雪(大正七年九月廿三日撮影)額二面。
○高野鷹蔵氏出品
山岳圖書數十種
○高頭仁兵衛氏出品
書籍
新編武蔵風土記稿　八十册　新編相摸國風土記稿　二十五册

地圖目錄

一、九州及琉球の部
熊本縣管內圖。薩日大隅圖。筑前國繪圖。九州一覽圖。肥後國天草郡之圖。豊後八郡。琉球諸島全圖。豊前國小倉城並市街之圖。長崎縣管內全圖。鹿兒島全圖。九州之圖。熊本縣管內圖。長崎港全圖。豊後國輿地全圖。長崎奉行西屋鋪住居圖。長崎縣管內全圖。肥後國勢細見圖。熊本近傍里程細圖。大分縣管內全圖。九州及琉球精選圖。大分縣管內地圖。大日本九州一覽之圖。大日本九州之圖。長崎之古圖。肥州長崎之略圖。肥後國天草郡總繪圖。日州延岡城繪圖。九州全圖。大日本九州九ヶ國之圖。西海道。薩摩國勢細見圖。長崎阿蘭陀屋鋪繪圖(四枚の內)。長崎之古圖坤。長崎唐人屋鋪繪圖(四枚之內)。肥前。九州明細圖。筑後國三池繪圖面。薩摩鹿兒島居宅之圖。豊前。長崎繪圖。肥前長崎圖。肥前長崎近傍圖。九州。鹿兒島縣實測圖。

二、中國ノ部
播磨國細見繪圖。島根縣一覽表。播磨國姫路城市圖。播磨輿地全圖。島根縣管下伯耆國全圖。播州石寶嶽。岡山縣管內地圖。播磨國繪圖。備中國大繪圖。播磨國輿地全圖。美作國地圖。廣島圖。播磨國全圖。播磨國大繪圖。備中國巡覽大繪圖。中國兩道掌覽圖。同上。長防圖。因幡伯耆二國土性圖。播磨大繪圖。備中略圖。伯耆國大山寺略繪圖。

三、四國ノ部　並雜著
四國金毘羅彌谷寺善通寺。土州五臺山十景圖。香川縣管內讃岐全圖。阿波國全圖。南海四國全圖。四國八十八ヶ所順拜略圖道法。四州掌覽圖。土佐國圖。土佐河波。讃陽高松圖。和歌山區近鄉連擔地圖。和歌山縣管內圖。紀州高野山。丹後但島國繪圖。生野鑛山地質說明書附圖。尾張國輿地圖。備後安藝二國土性圖。

○武田久吉氏出品

山城名勝志	十五册(缺本)	正德元年(一七一一)
都名所圖會	六册	安永九年(一七八〇)
拾遺都名所圖會	五册	天明七年(一七八七)
再撰花洛名勝圖會	八册	元治元年(一八六四)
攝津名所圖會	十二册	寛政十年(一七九七)
和泉名所圖會	四册	寛政七年(一七九五)
河內名所圖會	六册	享和元年(一八〇一)
伊勢參宮名所圖會	六册	寛政九年(一七九七)

近江名所圖會　四冊　文化十一年(一八一四)
紀伊國名所圖會　五冊　文化八年(一八一一)
紀伊國名所圖會　二編五冊　文化九年(一八一二)
紀伊國名所圖會　三編七冊　天保九年(一八三八)
紀伊國名所圖會　後編六冊　嘉永四年(一八五一)
播州名所巡覽圖繪　五冊　享和三年(一八〇三)
藝州嚴島圖會　十冊　天保十三年(一八四二)
阿河名所圖會　二冊　文化八年(一八一一)
東海道名所圖會　六冊　寛政九年(一七九七)
木曾路名所圖會　七冊　文化二年(一八〇五)
木曾街道圖繪　二冊　明治二十七年飜刻
國芳木曾街道六十九次　一冊
東國名勝志　五冊　寶暦十二年(一七六二)
銅版袖珍日光名所圖會　二冊　明治十五年(一八八二)
唐土名勝圖會　六冊　文化二年(一八〇五)
松島圖誌　一冊　文政三年(一八二〇)
伊香保志　三冊　明治十五年(一八八二)
甲斐叢記　前輯五冊　嘉永四年(一八五一)
北越雪譜　初編三冊　天保十三年(一八四二)
北越雪譜　二編四冊　天保十三年(一八四二)
下野國誌　十二冊　文久元年(一八六一)
日光山志　五冊　天保八年(一八三七)
利根川圖志　六冊　安政二年(一八五五)
富士根元記　一冊

日本名山圖會　三冊　文化元年(一八〇四)
日本山水名區　二冊
小笠原眞圖　一冊(寫本)　文久元年(一八六一)
養　滿德志　二冊　享保二十一年(一七三六)
(日本輿地通志畿內部大和圖)
肥前豐後風土記　一冊
常陸風土記　一冊　天保十年(一八三九)
播磨國風土記　一冊
伊豆海島風土記　一冊
武藏野話　四冊　文化十二年(一八一五)
寸簸之地理　二冊　安政七年(一八六〇)
嚴島道芝記　四冊　元祿十五年(一七〇二)
信貴山緣起　三冊　享保六年筆
皇國道中早見一覽　一冊
大日本地圖道中記　一冊　明治十二年(一八七九)
五海道中細見記　一冊　安政五年(一八五八)
諸國道中袖かゝ見　一冊　天保千年(一八三九)
東海木曾兩道中懷寶圖鑑　一冊　天保十三年(一八四二)
東海道巡覽記　一冊　寛延四年(一七五一)
吾嬬路記　一冊　享保六年(一七二一)
With Camera and Rucksack in the Oberland and Valais by R. A. Malley.

生植物

キミカゲサウ(函館產)。コメツガの新綠(三峰川上流產)。

Sapponaria oxymoides. Arenaria balearica

○戸澤英一氏出品

鉈（上州）　一口。

○梅澤親光氏出品

關東里程圖　東京近傍旅人之栞　東京區分繪圖　御江戸大繪圖（文久再刻）武藏國全圖　改正道中記　旅行用心集（文化七年版）　伊豆七島圖　鐵道線路略圖二種（明治二十二年）

○山田淳一氏出品

高山植物畫端書。山岳油繪。寫眞。

○片桐商店出品

登山用天幕一張。防水布製外套。リュックサック數十點。

○美滿津商店出品

リュックサック、大、中、小、號外各三個。用負子三個。一閑張製水呑十個、アルペンストック二本。同覆ひ及提紐各五點。麻繩一卷。スキー用帽子二個。

○日本山岳會出品

日本山岳會舊會員章（正會員用、幹事用）。同上新會員章。英國山岳會々員章。佛國山岳會々員章。瑞西山岳會々員章。

陸地測量部測量成果表、第八、第九、第十、第十一卷、附圖共。

Ice-caves of France and Switzerland by G.F. Browne.

Peaks, Passes, and Glaciers by John Ball.

Ski-Runs in the High Alps by F.F. Tuoget.

The Mountains of California by John Muir.

日本山岳會機關雜誌。イギリス山岳會機關雜誌。英國地學雜誌。フランス山岳會雜誌。イタリー山岳會雜誌。スペイン山岳會年報。スイス山岳會機關雜誌佛文及獨文のもの。同會年報。蘇國山岳會雜誌。スキーデン旅行倶樂部年報。南阿山岳會年報。米國山岳會年報。加奈太山岳會雜誌。アパラシヤ山岳會雜誌。コロラド山岳會雜誌。マザーマ山岳會雜誌。プレヤリークラブ雜誌。スイエラクラブ雜誌。レイニア山研究報告。

○第九回小集會記事

大正九年六月十三日午後一時麹町區紀尾井町清水谷皆香園に於て田部幹事司會者として開會、左記の講演あり。

一武藏野の逃水に就て　理學士　梅澤親光氏

二木曾山脈の地貌發達に就いて　理學士　辻村太郎氏

梅澤氏は古來有名なる武藏野の逃水に關する前人の考察を紹介し、殊に最近の學說なる藤原理學博士の不毛地に於ける蜃氣樓說の首肯し難き點を擧げ、更に種々の假說を試みられたり。

辻村氏は木曾山脈を主題に選び、更に他の實例を擧げて山岳地の地貌發達に關し、甚だ興味ある諸學說を述べ、出席者を卑益さるゝこと大なりき。

他日乞ふて誌上に掲載することあるべし。講演終了後尚ほ時間に餘裕ありしを以て、各自熱心なる山談を試み、頗る面白き會合なりき。

當日出席會員酒井忠一、別宮貞俊、高畑棟材、黒田孝雄、松本善二、伊藤新三、五十嵐芳雄、村越匡次、高田達也、松宮三郎、六鶴保、青木軍二郎、松井幹雄、又木周夫、沼井鉄太郎、茨木猪之吉、郷郁三郎、辻村太郎、田部重治、梅澤親光、高頭仁兵衛、木暮理太郎、武田久吉の二十三氏及び會員外四名なりき。

○會務報告

大正九年五月廿六日松本高等學校山岳會へ陳列の爲め海外諸山岳會機關雜誌十七種出品。

大正九年六月十三日午前十時より清水谷皆香園に於て幹事會開會、左記事項につき協議す。

一、附中山岳會及び大阪高商山岳會へ幻燈映畫貸與の件。
一、會費增額の件。　一、雜誌用紙見本檢査。一、會員除名處分の件。一、團體の入會に關する規定（本誌前號會則參照。）

右終つて入會申込者詮衡の結果左記六名入會許可さる。公下桑石。神谷泰。佐藤熊藏。田近正貞。Owen Walker. Henry F. Mo ningnier.

（出席幹事－木暮。高野。高頭。武田。田部。梅澤。）

大正九年六月十七日附屬中學校桐蔭會山岳部代表者に幻燈映畫貸與。

大正九年六月二十二日大阪高商山岳會代表者に幻燈映畫貸與。

○會員の住所移轉

本誌第十四年第二號に附錄としたる會員名簿の訂正及び追加は前條會報欄に掲げ置きたるが、其後移轉の通知に接したるもの左の如し。

大正九年八月發行

月

地學雜誌　第三百七十九號
歷史地理　第三十六卷第一號
ツーリスト　第八年第四號
日本アルプス槍ケ岳登山案内
（歐文圖書は英文附錄に揭載せり）

○本會規則拔萃　（大正八年六月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアル可シ
第五條　本會ハ會長ヲ載カズ幹事若干名ヲ置キ、一切ノ會務ヲ處理セシム
第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム
第十條　本會々員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス名譽會員ハ本會幹事ノ推薦ニヨルモノトス
第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス、（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）
第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マル可シ
第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ前納ス可キモノトス（以下略）

現任幹事　（七名）

木暮理太郎　中村清太郎　高野鷹藏　高頭仁兵衞　武田久吉
田部重治　梅澤親光

評議員　（十四名）

城數馬（在朝鮮）　小島久太（在桑港）　近藤茂吉　三枝守博
辻本滿丸　辻村伊助　（在瑞西）　山川默及ビ現任幹事七名

○大正九年度會費未納者に告ぐ

本年度の會費は本年度初期に於て前納す可きものなるに拘らず、未納の向あるを以て八月中夫々督促狀を發し置きたるも、尙納附されざる場合には集金郵便を差立つ可く、其費用は總て滯納者に於て支辨さる可きものなるに付き、右豫て了承ありたし。

大正九年八月二十八日印刷
大正九年八月三十一日發行

〔定價金壹圓貳拾錢〕

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市麹町區富士見町四丁目六番地　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

The Mountain-Ranges dividing the Tamagawa and the Sagamigawa, by Dr. H. Takeda.

A trip to the Simorôka of Kurobegawa from Ômachi, by Mr. T. Numai.

From Ômugawa to Mibugawa (A record of the ascent of Kitadake and Arakawadake), by Mr. N. Yanagi.

THE PLATES IN THE JAPANESE PART.

Facing Page.

(32) Kurobegawa, near the confluence of the Gozenzawa. Phot. by Lr. K. Itô.

(64) Kurobegawa, between the confluence of the Oyamazawa and of the Gozenzawa. Phot. by Mr. K. Itô.

(88) View towards north from a point north of Ainotake. Phot. by Mr. T. Asai.

Mountaineer Bulletin, Vol. X, Nos. 7, 8.	Seattle, 1920.
Bird-Lore. Vol, XXII, No. 2.	New York, 1929.
Alpina, 28. Jahrgang, Nr. 5.	Zürich, 1920.
Svenska Turistf öreningens Årsskrift, 1920.	Stockholm, 1920.
Rivista Mensile del Club Alpino Italiano, Vol. XXXIX, Num. 4–5.	Torino, 1920.
L'écho des Alpes, 56me année, No. 5, 6.	Genève, 1920.

THE THIRTEENTH ANNUAL MEETING.

The Thirteenth Annual Meeting of our Club was held, as advertized, on May 9th at the Sankaidô Hall, Akasaka. The Exhibition Room was opened at 10 A.M., and books, maps, paintings, photographs, specimens, alpine instruments, utensils, etc. were shown to the public. The following lectures were given in the large room upstairs, commencing at 6 P.M.

Meteorological Phenomena .....Dr. S. Fujiwara.
Yellowstone National Park .....Prof. S. Nakamura.

THE NINTH ORDINARY MEETNG.

The Ninth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Shimidzudani, on June 13th, presided by Prof. Tanabe. The following lectures were given :—

The "Nigemidzu," a curious phenomenon recorded to occur in Musashino .... Prof. Umezawa.
Geomorphological Study of the Kiso System... Prof. Tsujimura

Twenty-three members and four guests were present.

NEW MEMBER.

742 Owen Walker, 14, Takajômachi, Kanazawa.

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese Part of the current number of this Journal are :—

to be cut in the ice to allow it to be mounted with safety. Just in the narrowest part of the arête Bohny, who had not shown exceptional qualities of steadiness, stopped, and turning to Mrs. Weston who was next him asked if she was given to giddiness "Sind Sie schwindlich?", but a short catechism on the subject so reassured him that he turned to his work with a manifestly lighter heart and increased cheerfulness. After an hour or so of Blondin work on the ice-crest it gave place to steep but not difficult rocks and soon we found ourselves on the top of the Altels, and so our second Alpine peak that day was gained. The descent to the Schwarenbach was a tedious 3 1/2 hours trudge over smooth and slipping stones and scree, the ice sheet that covers the upper part of the mountain bearing too little snow for glissades to be safe. A great welcome awaited us at the inn, for the double climb has seldom been made by ladies, and we were not expected till two hours or so later, and Bohny remaked it was the first time a party of three, so far as he was aware, had ever reached the top of the Balmhorn unroped.

Two days later Mrs. Weston and I said "good bye" to our entertainers, whom we had quite got to like, and passing over the Schwarzgrätli and the Engstligengrat, without a guide, found our way down to the Engstligen Alp, and the Capuan allurements of Adelboden. There was no inducement to linger longer than one needful night among them. The next day saw us passing through Frutigen and sheltering snugly under the friendly eaves of the Schonegg at Spiez, just in time to escape the first bad weather of our five weeks holiday.

On Thursday Sept. 14th. incessant rain washed us out of Spiez, chased us into Bern and flung an ironical farewell greeting as we passed the frontier at Pontarlier. So we left the Alps behind us, but the memory of the summer of 1911 will ever remain green and fresh and furnish delightful recollections for many a dull day yet to come.

CLUB LIBRAY.

The following publications have been received since June 1920:—

American Museum Journal, Vol. XVIII, No. 1.	New York, 1918.
Natural History, Vol. XX, No. 2.	,, 1920.
Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. IX, No. 7.	Boulder, 1920.
Trail and Timberline, Nos. 20–21.	Denver, 1920.
Mid-Pacific Magazine, Vol. XX, No. 1.	Honolulu, 1920.

On Thursday at 4 a.m. three of us, with Jakob, had a perfect day on the Wildstrubel, the ascent being all the more interesting because the glacier was almost wholly "dry" and therefore much more crevassed than ever before. The 4 1/2 hours climb was amply repaid by the most glorious prospect of the Pennine Alps to the South and nearly all those of the Oberland to the North.

Our friend was highly fortunate, and no less naturally delighted, that her second and final peak (this season) proved so splendid a bellevue. Here all was seen that should have been seen, whereas on the Tschingelhorn we had mainly "viewed the mist, and missed the view."

A three hours descent brought us back to the Hotel on its lofty perch at the edge of the Gemmi cliffs and to a welcome tea.

On Friday Sept. 8th. Mrs. Weston and I returned alone to the Schwarenbach Inn, where we spent several days before descending to lower levels on our homeward way.

Monday Sept. 11th. however was signalized by yet another accomplishment of an often defeated desire, the ascent of the Balmhorn, for which I had three times crossed the Gemmi, but invariably "in thunder lightening, or in rain."

Taking with us as a porter (for he is not a certificated guide) Hans Bohny, brother-in-law of the Hotel proprietor, we left at 4 o'clock on a lovely morning, and threaded our way round the strong steeps of the Rinderhorn on to the Schwarg Glacier, which soon led us by abrupt and crevassed slopes of ice, to the ridge of the Zagengrat. Leukerbad now lay at our feet in a dull purple haze far beneath while the distant Pennine peaks rose loftily far beyond. After breakfast, here, we turned to the left, and an upward trudge along easy rocks took us on to the snow crest and slopes that lead to the twin summits of the Balmhorn. Some distance below the ridge a group of half a dozen chamois suddenly appeared, but galloped gracefully out of sight all too soon.

In a little over 5 1/2 bours we were on the top of our peak, the further and slightly higher of the two snow humps that constitute the "pair" of (Balm)horns.

The view was much the same as that from the Wildstrubel but its greater height and more central position give it corresponding advantages and make it, on such a cloudless day as this, one of the finest view-points in the whole of the Alps. From the lower of the two tops we decided to vary our way down and traversed the "knife edge" arête leading from it to the Altels.

This is fairly level but very narrow indeed and exceedingly steep on either hand, so that a good balance and a steady head are absolutely essential. In one place the ridge suddenly rises some 25 feet at an angle of about 70°, and here huge steps had

midnight) greatly pleased my friend, and he twice told me his favourite anecdote of the commanding officer of a certain Swiss regiment who, though a good soldier, was somewhat fond of O.D.V. Observing on parade one day a private with a rather bulging breast-pocket, he enquired the reason and was told it was the previous drill book he always kept there near his heart. Calling the man out of the ranks, he caused all the rest to "right about turn, quick march" for several paces. He then examined, and consumed, the contents of the "drill book," remarking in loud and satisfied tones that they were most beneficial in what they imparted. Finally he returned the private and the company once more to their public duties, and there the incident was closed! The Obersteinberg was reached in 13 hours, at 6 o'clock in the evening and the pleasantest week end of our holiday gave me a welcome rest after rather a a strenuous series of climbs.

On Monday morning Sept. 4. we packed up and sent off our luggage once more, and by 11 o'clock we were on the march for the Mutthorn Hut. A merry lunch in the middle of the Tschingel glacier lightened the rücksacks and also labour of the way, and a night's stay at the familiar *cabane* prepared us for the climb up the Tschingel therefrom. One part of the *Cabane* is reserved for ladies only, but when Mrs. Weston went there to retire to rest for the evening she found it already occupied by a stout and stubborn looking German tourist. On explanation that it was 'reserved,' and the drawing of his attention to the Swiss Alpine Club notice to that effect, clearly printed in English, French and German, still failed to move him. He merely rudely remarked that he entirely refused to make way for any lady and intended to pass the night there himself. Finally the 'gardian' of the Cabane came to the rescue, and in a very short space of time the foolish Teuton retired, in silent trial unavailing fury, to share a straw strewn shelf with some forty others who would doubtless have gladdly dispensed with his company.

On Sept. 5. we climbed the Tschingelhorn in dull grey weather a great contrast to our ascent hitherto, and the afternoon saw us descending the Kander glacier, with its tall steep moraine of which the sharp crest offers a Blondinlike pathway far down towards the deep dark Gasterntal.

At Selden we spent the night at the pleasant little Hotel Petersgrat, and next day mounted by way of the Hotel Waldhaus and the new steeply rugged path, to the Gemmi which it joins just above Stock.

A picnic lunch by the stream below the Schwarenbach refreshed us for the final stretch to the Wildstrubel Hotel, at which place of doubtful excellence we spent an abbreviated night.

but strenuous work, and now another hour's well earned rest, making tea and enjoying the splendid prospect on either hand was our reward.

The finest feature of the view was the magnificient rampart of peaks—from the Aletschhorn on the left to the massive pyramid of the Bietschhorn on the right—which rises on the East side of the Lötschental, straight in front, and again away on the left were the Beich pass and the Lötschen Lücke, two of the earliest glacier expeditions I ever made, and very pleasant memories they recalled. Again all gleamed bright and clear under a cloudless sky, and, as on the Weisse Frau, and the Gspaltenhorn, already, the weather seemed to do his (or is'nt "she"—feminine by reason of her moods, the clerk of the weather!) best to make up for the disappointment she had, inflicted on me in past years. Turning to the descent, due at first imagined that "all was over but the shouting," however, showed the difficulties to be many. It cost three hours of the greatest care and steady effort circumvent the tangled maze of crevasses of the Jägi glacier which dropped in steep and broken escarpments from our feet to the level valley floor, 3000 feet below. This now became practically a new expedition and we had to take quite a different line from that previously followed by earlier parties. The conditions of the ice was wholly foreign to that of the ordinary seasons, owing to the unique and prolonged heat of the past summer, which had both melted away the snow-bridges over the existing crevasses and opened out a great many fresh fissures in the ice. Success at length rewarded our toil and when off the glacier and out of the rope, tea time again arrived. Then came the final trudge along the lovely Lötschental, over green Alps and through beautiful forests of larches and pines. Here and there some little emerald lake lay shimmering deep and still under the indigo sky. At 3 p.m. we had gained the charming little new inn on the Fafler Alp. After 'Café complet' my companion turned his face down the glen for Ried, the Rhone Valley and home, while I spent the night in solitary state and on Saturday at 5 a.m. was on my way back to the Obersteinberg by way of the Petersgrat and the Mutthorn Hut. A sporting suggestion of Jakob's met with instant approval—that we should traverse the Tschingelhorn (11790 ft.) from East to West, which we did with great satisfaction enjoying the fine bit of rock climbing on the East arête immensely. Appearently this had only been done once before and that by Jakob's elder brother and his Herr. This fact, combined with the intelligence Jakob had gleaned in the Lötschental to the effect that our crossing of the Schmadrijoch was the first successful attempt for two years (the last party having more overreached Fafleralp somewhere about

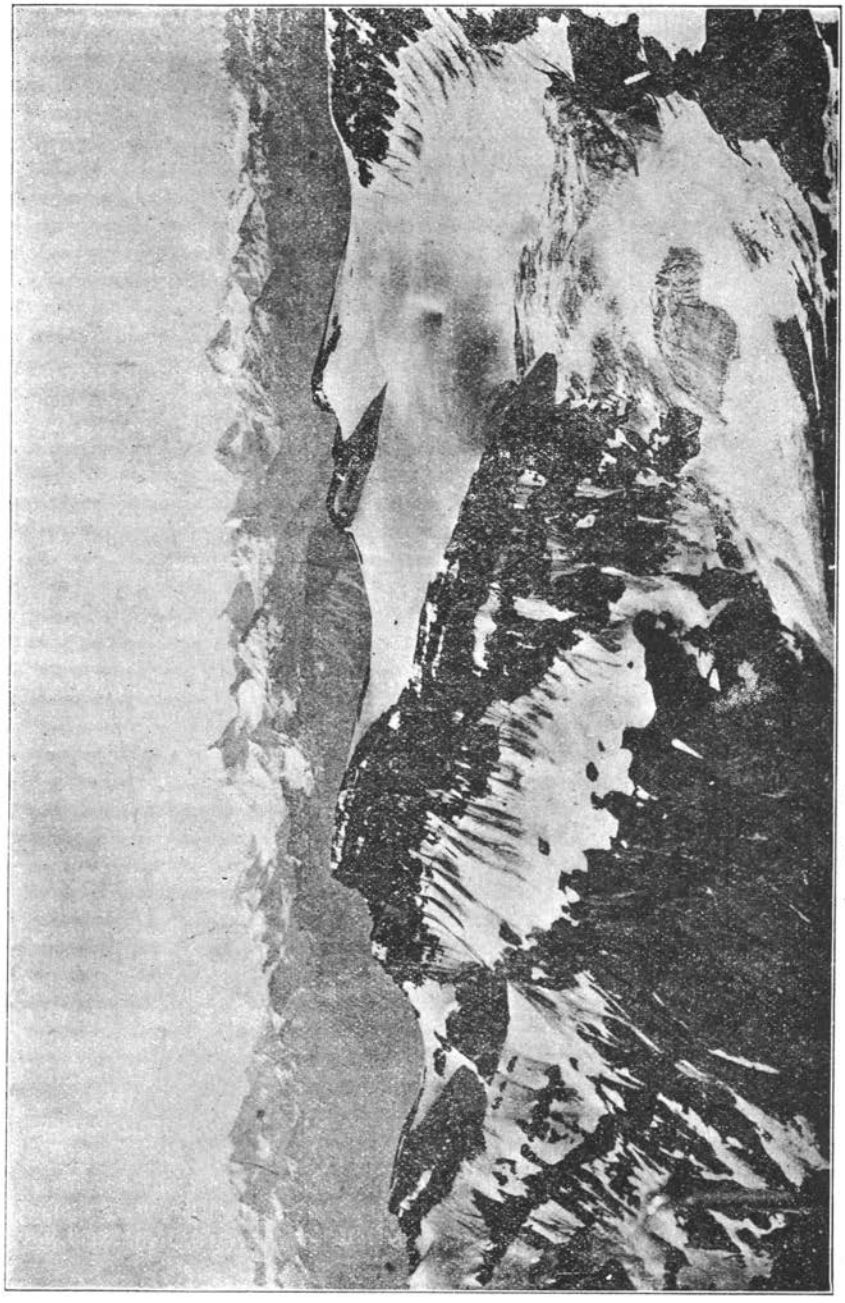


Fig. 2. Panorama from Wildstrubel.

This time however the conditions were more kind. On Sept. 1st. at 3.45. H.S.B. and I with Jakob, and Gottfried as porter, had said our good byes and with lanterns swinging in our hands and good wishes ringing in our ears, we were at last trumping steadily on our way towards the Schmadrijoch, the splendid pass that crosses the lowest gap in the ridge between the Grosshorn, on the left, and the Breithorn on the right. The latter is the most noticeable peak seen in views of the head of the Lauterbrunnen Valley.

Passing a little to the north of the Oberhorn See we crossed a high wall of moraine, but to get on to the Breithorn Glacier, had to somehow cross over a wide and turbulent torrent near its ridge. Some time was spent, by the dim light of satrs and lanterns, in finding a place shallow enough to ford. The two men splashed through vigourously and then Jakob seizing a big boulder hurled it in midstream and called ont to me "that will do for you, Sir." It very nearly "did for" me, in a different sense. At any rate I got such a drenching as made it indifferent whether I waded or swam the stream. The glacier was easily crossed and then on the left, we opened out the lights of Wengen, a lovely chaplet of brilliants flashing far away below. Our first piece of real work was the passage of a Bergschrund on to a very difficult out-crop of rocks affording little hand, or foot hold for the first few feet. To the right was the channel of a great ice avalanche we had seen fall some time before, but now such downfalls were held fast bound in the icy grip of the frosts of night. Above this, the climb was most interesting, and for 1500 ft. or so kept us to steep rocks on the left of the pass. In one place we saw a shelter of loose fragments of rock built up against an overhanging cliff, some five years ago by a French climber and his guides when overtaken by bad weather and an intermittent cannonade of stones from above. The crux of the climb is really to get above the great boss of ice which rises first above the head of the pass. Once we had done this we knew we should be the masters of the situation, in fact the "head bosses." Jakob had indeed reconnoitred it the day before, and evolved a circuitous route that, which certainly led up above the great bulge only did so at the cost of an hour or two of hard work at step cutting. This time, however, he modestly accepted a suggestion from me to continue by the rocks we were still on. By thus getting on a level with the top of the boss we crossed the steep couloir safely in carefully constructed steps, and in a few minutes the main obstacle was overcome. Above it we crossed a very deep and fearsome-looking Bergschrund and in five minutes more we were in the narrow gap in the rocky ridge that marks the Schmadrijoch. We had taken only 5 1/4 hours steady

and odd costumes they suggested as an appropriate title—a trio of "pickel'd Herren." (n.b. pickel=German for ice-axe!)

The top we gained in 1 3/4 hours from the Lücke greatly to Jakob's satisfaction, and a prospect of wonderful beauty and extent unrolled itself before us. Nearly all the great Alpine Peaks stood up clear cut, against a cloudless sky; while at our feet stretched the long broad ice stream of the Kanderfirn leading into the Gasterntal on the right and part of the Tschingel Glacier falling downwards to the Ober Steinberg on the left.

The time to leave the top came all too soon, but the descent proved very little quicker, as far as the Lücke, than the upward way. It was not specially difficult but being very steep, with the immense drop on the right of the ridge, needed steadiness of care.

On the "Böse Tritt" our English friends seemed a little uncomfortable, as we watched them descending, far above us, but the antics of their leading guide, who was both clumsy and uncertain, were such as to inspire them with little sense of security and ease.

From the Lücke, above which we had discarded the rope, it was a case of "facilis descensus" indeed; and 35 minutes served to land us at the hut, where exactly an hour longer of steady going had been needed for the ascent; and so, at 11.30 a.m. in a little over 7 hours, including halts, our expedition came to an end and with it we settled our old score against the Gspalten horn.

The conditions had been perfect; we were both in excellent training, and the climbing from first to last was enjoyable to a degree. Mrs. Weston had certainly never shown to better advantage on a mountain, and I quite understood why Jakob, later on, confided to me that he would like to take her up a very difficult mountain, because she climbed so well!"

The English party arrived half an hour later, and the "Pickled Herren," looking really "frilled" in fact "done brown" an hour later still. After lunch and a short rest we once more sallied forth from the Hut, and in two hours were on the top of the Gamchi Lücke, and by six o'clock had plodded over the now softening snows of the Tschingel Glacier, passed the lovely turquoise waters of the Oberhorn Lake, and reached our next head quarters, the quaint unconventional little inn—the Hotel Obersteinberg, whose acquaintance I first made 14 years ago and to which I always return with interest and pleasure.

Several times I had returned here, intending to cross the great wall of rock and ice that shuts off the valley of Lauterbrunnen from that of the Lötschental, but the weather always vetoed my proposals.

below but the climbing there was comparatively simple though no doubt appearing exceedingly sensational to those on the watch, and here, however, time passed quickly, and after reaching the top (with a 2nd. or 3rd. breakfast thereon) a quick and fairly easy descent of 2 1/2 hours landed us highly pleased with our interesting scramble at the hut once more.

A quiet Sunday was followed by repacking of luggage and sending it round to meet us at Obersteinberg at the head of the Lauterbrunnen valley. In two detachments we made our way again up to the Gspaltenhorn Hut, Mrs. Weston and I going on after breakfast with Jakob, while the others came on after lunch with his brother Gottfried a 'porter' without ambitions to possess the "Führerbuch" of a qualified guide.

The hut this time sheltered 8 or 9 besides ourselves, the two remaining parties consisting of three Germans with a guide, and an Englishman and his wife with their two guides, all bound like Mrs. Weston and myself for the Gspaltenhorn itself.

It was our third try, and the weather gave every hope of success. August 29th. saw us on the move early. By 4 A.M. three lanterns were twinkling at intervals up the Büttlassen Lücke Screes, ours being half an hour behind the Germans and ten minutes later than the other English pair. In a little over 1 1/2 hour we reached the Lücke, and were again fortunate in a lovely view. After a second breakfast on the Col, we roped together and applied ourselves to the varied and most interesting work before us.

The climbing was delightfully exhilarating, but difficult enough to prevent one from giving much attention to the glorious view of the Jungfrau group beyond the Lauter-brunnen Valley, or the tremendous slopes of rock and glacier that fell in sensational sweeps of 4,000 to 5,000 feet to the Sefinental below us.

The photograph of Mrs. Weston and Jakob on the upper Gend' arme gives an idea of this part of the ridge, though the rocks are steeper than they look owing to unavoidable foreshortening on the part of the camera. Higher up we came to the "Böse Tritt," a nearly perpendicular piece of cliff about 120 ft. in height, consisting the most difficult part of the climb. It is now rendered less terrifying by the presence of two stout ropes one above the other, 1 1/2 inches thick, but the less one uses them, the more sporting is the passage found to be.

At the foot of the "Böse Tritt" we nearly caught up the German party, who did not seem very happy either here or on the steep ice-slope which above them led upwards to the summit of the Peak. They were a curious assortment of climbers—these three—"queer fish" someone called them, and with their ice-axes

Büttlassen from the Lücke, a splendid rock climb discovered 5 years ago by our leader, and, so far, only made by 4 or 5 parties before our own. These rocks luckily had already begun to warm up in the genial sun, and except in sheltered spots on the West face were pleasant and interesting to deal with.

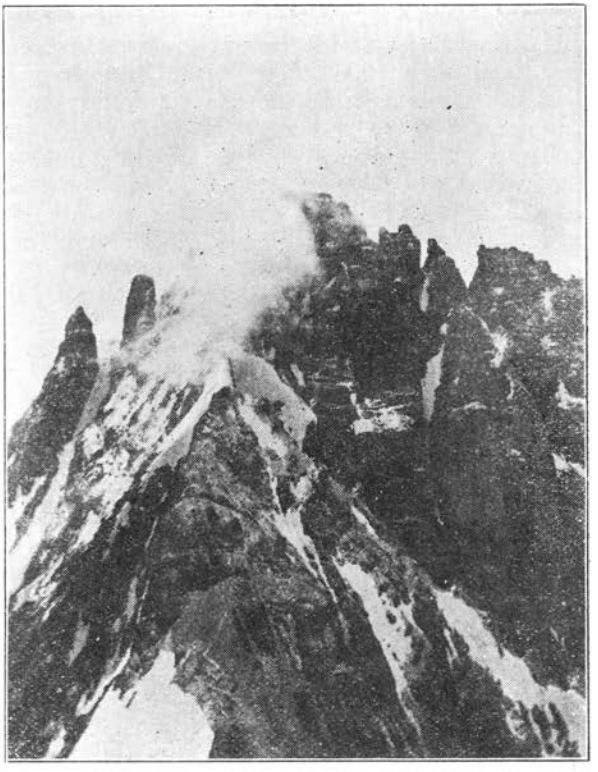


Fig. 1.

The arête of the Gspaltenhorn August 1911 by the Auther.

The actual climb (though only taking 1.38 min. rather quick going) was of the highest order, two chimneys and a curious "letter box" hole on the arête giving delightful and difficult problems to solve. Sometimes we had to work out on the ridge looking towards Mürren, with a sheer drop of 2000 or 3000 feet

of the hut was the frequent arrival of belated parties from Kandersteg, and the chatter of three English 'guideless' climbers chiefly discoursing on the inconsiderateness of noisy foreigners in Club Huts!

They had high ambitions that evening, but accomplished, I fear, only lowly performances the next day, as their overnight's story of past triumphs was only succeeded by a mornign's failure to reach the summit of the Wilde Frau. Still, as they were the only party to try anything at all besides ours, (the rest descending in despair), I must give them their due. The Weisse Frau gave us on the other hand of her severest frosts and that morning the icy ridge on which we spent 3 hours of hard work (chiefly represented by Jakob's strenuous step cutting) was a case of "Cold shoulder" indeed. The early dawn, however, as the great snow-peaks of the Oberland awoke from sleep and darkness at the kindly touch of the genial sun, provided a perfectly kaleidoscopic series of gorgeous colouring, only less impressive and awe inspiring than the purple and saffron, and green and gold, of the sky above. At the top, while the others rested, photographed, and ate. I got astride the actual summit-ridge, and managed *à cheval* to work my way up to the highest point which still could only afford sitting room after I had cut off the apex of the snowy needle.

The way down, after the steepest of the ice slopes had been passed, was an exhilarating scramble, enlivened only by the partial disappearance of one of the party in a crevasse as a sequel to a previous swift and sudden-but unintentional-slide down a steep snow slope to the extent of the rope between himself and the man above. The whole descent only took 1 1/2 hours to the Ohthurli Hut, and that afternoon saw us at the new Gspaltenhorn Hut, on the opposite side of the Gamchi glacier, at the head of the Kiental. At that new and excellent shelter we spent a cheerful and sociable evening. The next morning mounting the steep and toilsome screes that led in 1 3/4 hours to the Büttlassen Lücke, the clear cut gap between the famous Gspaltenhorn on the right and the Büttlassen on the left. The wonders of that dawn will never fade from the recollection of those who had the exquisite pleasure of witnessing them, the prospect from Mürren to the Jungfrau and her giant companions being splendid beyond description.

Had the conditions been favourable Mrs. Weston and I were to have climbed the Gspaltenhorn, from which a violent thunderstorm 4 years ago had rudely driven us, drenched and defeated.

The rocks of the Gspaltenhorn, now still in shadow, were filmed with a dangerous coating of ice, so we decided to "run away" a second time without "fighting."

H S B and I roped up with Jakob for the traverse of the

following day saw us early afoot, crossing the well-known pass of the Sefinen-Furgge (8583 ft.), between the Grosse-Hundshorn and the Büttlassen. We were without guides and thoroughly enjoyed during our route finding on these expeditions, and when we finally reached the delightful little Hotel-Blümlisalp in the Kiental "at the end of the perfect day" we found our-selves and not for the first time, in one of the most lovely, and least-known, of all valleys of the Bernese Oberland.

I should like to commend the Kiental to the notice of any members of the J.A.C. who may be planning a visit to the Alps in the near future. There are climbs of every kind, length, and degree of difficulty, and for them abler guide, nor pleasanter comrade can be found than our own Jakob Mani. The eldest son of the schoolmaster of Reichenbach, the principal village in the valley, he is one of the most intelligent and well-informed Swiss guides I ever met. He loves the mountains for their own sakes, and for what they can tell him of a power and wisdom greater than that of the men who dwell beneath their shadows.

In the Swiss Federal Army, he held the rank of Sergeant Major, and performed also the duties of what he called 'Mother of his Company.' I first climbed with him in 1910, and leaving him then with regret, met him again this year with unbounded pleasure.

Jakob not only speaks English well, but can even make jokes in it and as he possesses a delightful sense of humour, of a quaint and whimsical kind, the longest day's climb is never dull in Jakob's company. His warm heart, kindly courtesy, and unselfish thoughtfulness, combined with his friendly manner win friends wherever he goes. On one occasion he and I, on the Wilde Frau, came very near to "going West" together in a sudden snow storm in these same Oberland mountains, but a man could have climbed his last peak in no better company than his.

But this year it was in mostly snnshine that Jakob came with me as 'guide, philosopher, and friend.' The first peak we set out to climb, together with my friend Somerset Bullock, was the Weisse Frau (12010 ft.) the centre peak of the Blümlis Alp group.

With the ladies of our party, we walked up for lunch at the chalet on the Bund Alp, described in Von Fellenberg's charming story of the first ascent of the Weisse Frau some 50 years ago. After lunch, the ladies returned to the Hotel Blümlisalp, while Bullock and I, with Jakob, trudged up to the Swiss Alpine Club Hut on the Hohturli Pass (9120 ft.).

A dull gray, and chilly sky offered dubious prospects for the morrow and the steady rain that soon came down therefrom made us glad of a substantial shelter. The only drawback to the interior

"IN THE PLAYGROUND OF EUROPE."

(Alpine Wanderings of two J.A.C. members in 1911.)

BY

REV. WALTER WESTON.

A Famous English poet has told us that Sorrow's crown of Sorrow is in remembering happier days, and to those of us who are at present exiles from both the great Alpine 'playgrounds' we love so well, this fact has never come home with such painful force as to-day. We have been hearing from many of our J.A.C. friends of their plans for this summer's climbs, and next to the pleasure of sharing in such experiences our-selves comes that of hearing of the good times they are enjoying in those familiar and delightful regions. In due course we shall hear from them of their present adventures on the peaks and in the valleys, in sunshine and in storm. Meanwhile, we here have to be content with recalling happy memories of the advenentures of the past 'Decies repetita placebit.'

The present paper is an attempt to set before our friends and colleagues of the Nippon Sangaku Kwai some notes of the last Alpine season Mrs. Weston and I spent in Switzerland. The record needs be brief and simple though some of the expeditions were both long and by no means easy. It is from the leaves of my last journal that the notes are taken, and if to any of my readers those leaves prove somewhat dry, I can only apologize, with the excuse that at any rate they are in keeping nature's own conditions as an early autumn wind in laying bare the trees before me as I write.

In August 1911 I had gone out in advance to the Bernese Oberland, the region already known to the J.A.C. through the travels of Messrs. Kondô, Tsujimura, Kaga and other Japanese climbers. My companion, then, was a well known member of the Alpine Club, Somerset Bullock, with whom I first began serious climbing, without guides, in 1897. (see "an adventure on the Eigerjoch"). When Mrs. Weston joined us at Spiez, so that Lake of Thun, we at once went up to Mürren, above the valley of Lauterbrunnen, and the next morning ascended the Schilthorn (9754 ft.), a pleasant climb of some 6 hours up and down and famous as one of the finest and most central view-points in the central Oberland. So great was Mrs. Weston's energy and eagerness to penetrate to the heart of the mountains, however, the

NIPPON SANGAKU KWAI.

(THE JAPANESE ALPINE CLUB.)

Fujimichô IV: 6, Kôjimachi-ku, Tôkyô.

Postal Transfer Account: No. 4829 Tôkyô

List of the Officers (Honorary).

Elected Nov. 26th, 1919.

General Secretaries.

N. Takatô, Esq. Dr. H. Takeda.

Recording Secretary & Treasurer.

Prof. C. Umezawa.

Librarian.

T. Takano, Esq.

Editors.

R. Kogure, Esq. S. Nakamura, Esq. Prof. J. Tanabe.

Council.

Hon. K. Jô.	M. Saigusa, Esq.	Dr. M. Tsujimoto.
R. Kogure, Esq.	T. Takano, Esq.	I. Tsujimura, Esq.
K. Kojima, Esq.	N. Takatô, Esq.	Prof. C. Umezawa.
S. Kondô, Esq.	Dr. H. Takeda.	S. Yamakawa, Esq.
S. Nakamura, Esq.	Prof. J. Tanabe.	

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it in to the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Members are required, on their admission into the Club, to pay Yen 5 as entrance fee, and Yen 3 as subscription for the current year, and thereafter an annual subscription of Yen 3, payable in advance on the 1st of January in each year. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries equiring a reply should enclose return postage.

SANGAKU

Vo. XV August 1923 No. 1

(English Supplement)

CONTENTS

PAGE.

IN THE PLAYGROUND OF EUROPE—REV. WALTER WESTON.. 1

CLUB LIBRARY. 12

THE THIRTEENTH ANNUAL MEETING. 13

THE NINTH ORDINARY MEETING.. 13

NEW MEMBER. 13

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL. 13

THE PLATES IN THE JAPANESE PART. 14

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XV 1920 No. 1